

田 島 小 松 浦 遺 跡

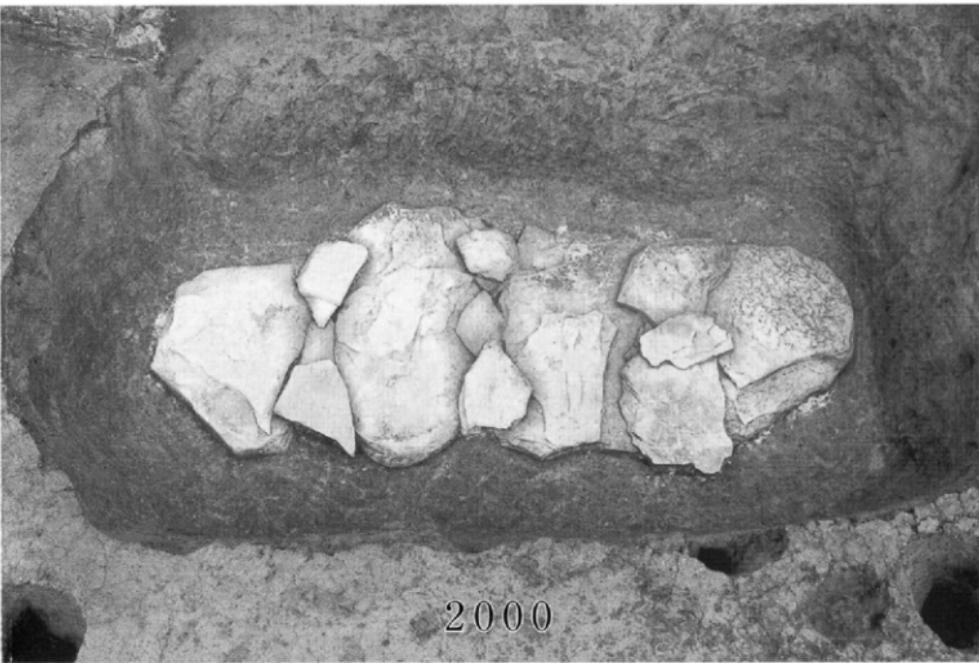
第 1 次 調 査

田 島 A 遺 跡

第 1 次 調 査

第 2 次 調 査

— 新設道路別府香椎線の建設に伴う発掘調査報告書 —



福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、国内外において重要な地域として多くの人に知られています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努め後世に残そうと考えています。

本書は田島小松浦遺跡、田島A遺跡の発掘調査成果を報告するものです。本書が埋蔵文化財の保護と知識を高める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西憲一郎

例 言

- 本書は、1987年度、1998年度に福岡市教育委員会が調査を実施した田島小松浦遺跡第1次調査、田島A遺跡第1次、第2次調査の報告書である。調査の担当は加藤隆也である。
- 田島A遺跡第2次調査は道路建設に伴い、道路面まで切り下げる自動販売機を設置するため発掘調査をおこなったもので、地権者の黨克己氏には多大な協力をいただいた。
- 本書に使用した遺構の実測は、永井大志、坂田邦彦、田中克子、井上蘭子、本田浩二郎、加藤が、遺物の実測図は田中克子、加藤が行った。製図は田中、加集、本田、加藤が行った。使用した遺構、遺物の写真は加藤、本田が撮影した。
- 本書で用いる方位は全て磁北である。遺構の呼称は記号化し掘立柱建物をSB、土坑・土壤・石蓋・土壤墓、貯蔵穴をSK、溝をSD、柱穴をSPとした。
- 石蓋上土壤墓の調査・整理においては本田浩二郎の協力を得た。他の執筆、編集は加藤が行った。
- 本報告に係るすべての出土遺物・記録類(図面・写真・スライドなど)は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9762	遺跡略号	TKU-1		
調査地地番	城南区田島2丁目地内、別府2丁目地内				
開発面積	11,880m ²	調査対象面積	1,000m ²	調査実施面積	695m ²
調査期間	1998年1月13日～1998年3月31日				

遺跡調査番号	9801	遺跡略号	TZA-1		
調査地地番	城南区田島1丁目地内				
開発面積	2,680m ²	調査対象面積	2,680m ²	調査実施面積	2,014m ²
調査期間	1998年4月6日～99年2月10日				

遺跡調査番号	9830	遺跡略号	TZA-2		
調査地地番	城南区田島1丁目405				
開発面積	28m ²	調査対象面積	28m ²	調査実施面積	24m ²
調査期間	1998年9月1日～1998年9月11日				

本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査組織	1
2. 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第3章 田島小松浦遺跡第1次調査の記録	
第1節 IA地区の調査	
1. 調査の概要	6
2. 検出遺構	6
第2節 IB地区の調査	
1. 調査の概要	8
2. 検出遺構	8
第3節 II地区的調査	
1. 調査の概要	11
2. 検出遺構	11
第4節 まとめ	12
第4章 田島小松浦遺跡の自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)
第5章 田島A遺跡第1次、第2次調査の記録	
1. 調査の概要	27
2. 検出遺構	29
竪穴住居 (S C)	29
掘立柱建物 (S B)	34
柱穴 (S P) 出土遺物	42
土坑・土壤、貯蔵穴 (S K)	44
溝 (S D)	67
石蓋上壙墓 (S K)	76
その他の遺物	80
3. まとめ	86
第6章 田島遺跡の自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)	3
Fig. 2 古地図上調査地点(約1/4,000)	4
Fig. 3 田島小松浦遺跡調査区位置図(1/500)	5
Fig. 4 IA区遺構配置図(1/100)	7

Fig.5	I B区遺構配置図(1/100).....	9
Fig.6	II 区遺構配置図(1/100).....	10
Fig.7	田島小松浦遺跡出土遺物(1/3、1/1).....	11
Fig.8	田島 A 遺跡調査区位置図(1/500).....	28
Fig.9	田島 A 遺跡遺構配置図(1/150).....	折り込み
Fig.10	竪穴住居 (S C) - 2 6, 2 7, 3 5, 3 6 実測図(1/40).....	30
Fig.11	竪穴住居 (S C) - 8 0, 8 1 実測図(1/40).....	31
Fig.12	竪穴住居 (S C) 出土遺物実測図 1(1/3).....	33
Fig.13	竪穴住居 (S C) 出土遺物実測図 2(1/3、1/1).....	34
Fig.14	掘立柱建物 (S B) - 0 1, 0 2, 0 3, 0 4 実測図(1/80).....	35
Fig.15	掘立柱建物 (S B) - 0 5, 0 6, 0 7, 0 8 実測図(1/80).....	36
Fig.16	掘立柱建物 (S B) - 0 9, 1 0, 1 1 実測図(1/80).....	37
Fig.17	掘立柱建物 (S B) - 1 2, 1 3 実測図(1/80).....	39
Fig.18	掘立柱建物 (S B) 出土遺物実測図 1(1/3).....	40
Fig.19	柱穴 (S P) 出土遺物実測図 1(1/3).....	40
Fig.20	柱穴 (S P) 出土遺物実測図 2(1/3、1/1).....	41
Fig.21	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) - 0 1, 0 2, 0 3, 0 4, 0 7, 0 8, 0 9, 1 0, 1 1 実測図(1/40).....	45
Fig.22	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 1(1/3).....	47
Fig.23	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 2(1/3).....	48
Fig.24	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) - 1 2, 1 3, 1 6, 1 7, 1 8, 2 1 実測図(1/40).....	50
Fig.25	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 3(1/3).....	51
Fig.26	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) - 2 2, 2 3, 2 5, 3 3, 3 7, 4 1, 4 3, 5 0, 5 5 実測図(1/40).....	53
Fig.27	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 4(1/3、1/1).....	54
Fig.28	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 5(1/3).....	55
Fig.29	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 6(1/3).....	56
Fig.30	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 7(1/3).....	59
Fig.31	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 8(1/3).....	60
Fig.32	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図 9(1/3).....	61
Fig.33	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) - 6 6, 6 7, 6 8, 6 9, 7 1, 7 2 実測図(1/40).....	63
Fig.34	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) 出土遺物実測図10(1/3、1/1).....	64
Fig.35	土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) - 7 3, 7 6, 7 9, 8 5, 8 6, 8 7 実測図(1/40).....	65
Fig.36	溝 (SD) 0 5, 1 9, 3 8, 5 6, 5 9, 7 0 実測図(1/40).....	66
Fig.37	溝 (SD) 出土遺物 1(1/3).....	69
Fig.38	溝 (SD) 出土遺物 2(1/3).....	72
Fig.39	石蓋土壙墓 SK - 4 2 実測図(1/20).....	74
Fig.40	石蓋土壙墓 SK - 5 1 実測図(1/20).....	折り込み
Fig.41	石蓋土壙墓 SK - 5 2 実測図(1/20).....	折り込み
Fig.42	石蓋土壙墓 SK - 5 3 実測図(1/20).....	75
Fig.43	石蓋土壙墓出土遺物.....	77
Fig.44	谷頭上層断面実測図(1/40).....	80

本文目次

Fig.45 谷頭出土遺物実測図(1/3)	81
Fig.46 表採遺物実測図 1 (1/3)	84
Fig.47 表採遺物実測図 2 (1/3)	85

図版目次

P L . 1	(1) I A 区、I B 区全景 (西から)	(2) I A 区全景 (北西から)
P L . 2	(1) I A 区全景 (北西から)	(2) I A 区 S K - 0 1 完掘状況 (北東から)
P L . 3	(1) I A 区、I B 区全景 (南東から)	(2) I A 区 S K - 0 2 挖削状況 (北から)
P L . 4	(1) I B 区南壁土層断面 (東から)	(2) I B 区 S K - 0 1 挖削状況 (南から)
P L . 5	(1) II 区全景 (西から)	(2) II 区全景 (東から)
P L . 6	(1) II 区全景 (東から)	(2) II 区段落ち際状況 (北東から)
P L . 7	(1) II 区谷部掘削状況 (北西から)	(2) II 区谷部断面状況 (北東から)
P L . 8	(1) 調査区掘削状況 (東から)	(2) 調査区掘削状況 (西から)
P L . 9	(1) 調査区掘削状況 (北から)	(2) 調査区掘削状況 (西から)
P L . 10	(1) 調査区掘削状況 (東から)	(2) 田島 A 遺跡 2 次調査区全景 (南西から)
P L . 11	(1) 調査区掘削状況 (東から)	(2) 調査区掘削状況 (北から)
P L . 12	(1) S C - 2 6 完掘状況 (西から)	(2) S C - 2 6 カマド検出状況 (西から)
P L . 13	(1) S C - 2 7 遺物検出状況 (北から)	(2) S C - 2 7 完掘状況 (東から)
P L . 14	(1) S C - 3 5 完掘状況 (北から)	(2) S C - 3 6 完掘状況 (北から)
P L . 15	(1) S C - 3 6 完掘状況 (東から)	(2) S C - 8 0 , 8 1 挖削状況 (東から)
P L . 16	(1) S K - 0 1 挖削状況 (北東から)	(2) S K - 0 2 挖削状況 (北東から)
P L . 17	(1) S K - 0 3 挖削状況 (北から)	(2) S K - 0 4 挖削状況 (北から)
P L . 18	(1) S K - 0 7 遺物検出状況 (西から)	(2) S K - 0 8 遺物検出状況 (北から)
P L . 19	(1) S K - 0 9 挖削状況 (北東から)	(2) S K - 1 0 挖削状況 (北東から)
P L . 20	(1) S K - 1 1 挖削状況 (北から)	(2) S K - 1 2 挖削状況 (北から)
P L . 21	(1) S K - 1 2 挖削状況 (北から)	(2) S K - 1 3 検出状況 (東から)
P L . 22	(1) S K - 1 6 検出状況 (北東から)	(2) S K - 1 8 遺物検出状況 (北から)
P L . 23	(1) S K - 2 0 遺物検出状況 (北西から)	(2) S K - 2 1 遺物検出状況 (東から)
P L . 24	(1) S K - 2 2 遺物検出状況 (東から)	(2) S K - 3 3 遺物検出状況 (東から)
P L . 25	(1) S K - 4 1 遺物検出状況 (西から)	(2) S K - 5 5 遺物検出状況 (北から)
P L . 26	(1) S K - 6 9 遺物検出状況 (北から)	(2) S K - 7 3 遺物検出状況 (南から)
P L . 27	(1) S K - 7 9 遺物検出状況 (南から)	(2) S K - 8 5 遺物検出状況 (南から)
P L . 28	(1) S D - 1 9 検出状況 (北から)	(2) S D - 5 9 土層断面状況 (北から)
P L . 29	(1) S K - 4 2 蓋石状況 (北から)	(2) S K - 4 2 土壌内状況 (北から)
	(3) S K - 4 2 土壤掘削状況 (北から)	(4) S K - 4 2 土壤内小口部状況 (北から)
P L . 30	(1) S K - 5 1 蓋石状況 (西から)	(2) S K - 5 1 蓋石状況 (南から)
	(3) S K - 5 1 土壤内状況 (西から)	(4) 土壤調査状況 (南から)

- | | | |
|----------|--|--|
| P L . 31 | (1) SK - 5 2 蓋石状況（北から）
(3) 土壌内状況（北から） | (2) 土壌内状況（東から）
(4) 土壌内堆積土掘削状況（南西から） |
| P L . 32 | (1) SK - 5 3 蓋石状況（西から）
(3) 土壌内状況（南から） | (2) 土壌内床面状況（西から）
(4) 床面白色粘土状況（東から） |

写 真 目 次

表紙	石蓋土壤基SK-5 1	Ph. 1	調査に参加された方々
Ph. 2	竖穴住居80, 81調査状況	Ph. 3	溜井02堆積状況
Ph. 4	合せ口壺棺44検出状況	Ph. 5	貯蔵穴55調査状況
Ph. 6	溝46遺構検出状況	Ph. 7	溝38遺物検出状況
Ph. 8	溝70調査状況	Ph. 9	石蓋土壤基配置状況
Ph. 10	唐木田先生調査風景	Ph. 11	谷頭土層断面状況
Ph. 12	合せ口壺棺44調査状況	Ph. 13	溝46遺物出土状況



Ph.1 調査に参加された方々

第1章 はじめに

1. 調査組織

田島小松浦遺跡第1次調査 (平成9年度)

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 文化財部長 平塚克則

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第1係長 二宮忠司

調査庶務 文化財整備課 内野保基

試掘調査 埋蔵文化財課 中村啓太郎

調査担当 埋蔵文化財課 加藤隆也

田島A遺跡第1次、第2次調査 (平成10年度)

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 文化財部長 平塚克則

埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財課第1係長 二宮忠司

調査庶務 文化財整備課 木原淳二

試掘調査 埋蔵文化財課 中村啓太郎

調査担当 埋蔵文化財課 加藤隆也

発掘作業員

海津宏子	清原ユリ子	佐藤テル子	柴田常人	中國登美子	西尾タツヨ	上生ヨシ子
船越恒人	細川友喜	堀川ヒロ子	松井フユ子	溝田雅子	三好道子	門司弘子
山口タツエ	山田ヤス子	岩見敏子	川嶋ツキエ	山尾タマエ	土生ヒサヨ	鳥井原良治
高橋茂子	原 美晴	加集寛隆	水野由美子	税所道泰	指山歌子	指山浩子
徳永洋二郎	大鶴好子	中山竹雄	平山榮一郎	田中和こ	木田ひろこ	矢野和江
高木美千代	田中 肇	城 容子	古庄孝子	高木章夫	持田純子	坂田邦彦
堀 晴介	村本 剛	小林裕明	坂本俊司	柴田シズノ	西田マキエ	森友ナカ
小金丸ミネ子	黛ツギノ	友池富美恵	深見佳子	田中弘子	永井大志	

整理作業員

田中克子 尾崎君枝 加集和子 山本良子

2. 調査の経過

平成8年7月に土木局から都市計画道路別府香椎線の埋蔵文化財の事前審査についての依頼があり、8月、9月、11月にそれぞれ試掘可能な地点から調査をおこない。試掘の成果から発掘調査対象地点は3カ所あることがわかった。西側の2地点は福岡市文化財分布地図に記載のない新規の遺跡であるため以前の地図と現在の地形変化から範囲をくくり、字名をとつて田島小松浦遺跡とした。今回の調査地点は2地点であるが同じ丘陵の同じ事業であるため併せて第1次調査とした。東側の2,680m²の地点に関しては一部のみ從米の田島A遺跡内にかかっていたが、試掘の成果から北側へ遺跡の広がりがみられ、範囲の拡大をおこなった。

第2章 遺跡の位置と環境

(1) 地形

福岡市の平野部は西南部に位置する油山から北へのび、鴻の巣山（標高100.5m）を中心とする平尾丘陵によって東西に二分され、福岡平野と早良平野と形成する。油山と油山に源を発する樋井川が北流する間にはいくつかの低丘陵が油山山麓から北へのびており、その先端部の河岸段丘の頂部に本遺跡が立地している。博多古図によると現在の大濠から島側にかけては草ヶ江の入海であり、以前北側数百メートルまで湿地がせまってきていたと思われる。つまり、北側に展開する湿地帯とその向こう側の博多湾を眺望できる位置にある。

七隈から飯倉にのびる丘陵上には飯倉A遺跡をはじめ、飯倉B遺跡、飯倉C遺跡と連続する丘陵に遺跡が広がっており、対して別府遺跡、茶山遺跡、田島小松浦遺跡、田島A遺跡、田島B遺跡、田島和尚頭遺跡等点在して小地域のまとまりをみせる。田島周辺は現在では宅地化され視覚的にはわからないが、南北方向に複雑に小さな谷が複雑に入り合っており、このような地理的条件が遺跡の分布を散漫にさせている。

(2) 周辺の遺跡

飯倉遺跡

南北にのびる飯倉丘陵に位置する遺跡群であり、地形の変化から飯倉Aから飯倉Gまでの遺跡が分布する。飯倉A遺跡は1次調査、飯倉C遺跡は3次調査、飯倉D遺跡は1次調査、飯倉F遺跡は3次調査、飯倉Gは4次調査、飯倉H遺跡は2次調査まで計14カ所の発掘調査がおこなわれている。最も最近の飯倉G遺跡の第4次調査では、南北方向の丘陵を弥生時代中期の深さ4m以上のV字溝で切る遺構がみつかっている。他の調査でみられる集落遺跡は弥生時代から古墳時代にかけてのものが主であり、また古墳の分布も重なっており、干隈古墳群A群から干隈古墳群F群までにわかれている。

別府遺跡

田島遺跡と同様に南北方向の低丘陵先端の遺跡である。現在第1次調査のみおこなわれており、昭和61年6月16日から7月22日まで調査をおこなった。検出遺構は弥生時代中期の土坑、井戸、古墳時代後期の堅穴住居、中世から近世の溝、掘立柱建物である。

小笠遺跡

樋井川に南面する丘陵尾根の先端部に位置する。小笠团地の造成に伴う調査で、昭和47年4月10日から6月3日まで調査をおこなっている。石蓋土壙墓6基、土壙墓、祭祀土壙を検出した。石蓋土壙墓出土の遺物は鉄鏃1点のみで、遺構の時期を直接しめす遺物はほかに出土していない。祭祀遺構の遺物は弥生時代後期のものである。

京ノ隈古墳・遺跡

京ノ隈古墳は4世紀末に位置づけられる割竹形木棺を主体部とする前方後円墳である。京ノ隈遺跡は平安時代末期の経塚である。



1. 0 1 1 6 元寇防塁
2. 0 2 4 0 西新町遺跡
3. 0 2 4 3 飯倉B遺跡
4. 0 2 4 5 飯倉A遺跡
5. 0 2 4 6 飯倉C遺跡
6. 0 2 5 3 飯倉F遺跡
7. 0 2 4 4 別府遺跡
8. 0 2 4 8 茶山遺跡
9. 2 4 2 4 七隈古墳群B群

10. ★ 2 7 8 4 田島小松浦遺跡（今回報告）
11. ★ 0 1 9 9 田島A遺跡（今回報告）
12. 0 2 4 9 田島和尚頭遺跡
13. 0 2 0 0 田島B遺跡
14. 0 2 0 1 神松寺遺跡
15. 0 1 9 8 六本松遺跡
16. 0 2 0 2 小笠遺跡
17. 0 2 0 3 長尾遺跡
18. 0 8 5 7 京ノ隈古墳

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)



Fig. 2 古地図上調査地点(約1/4,000)

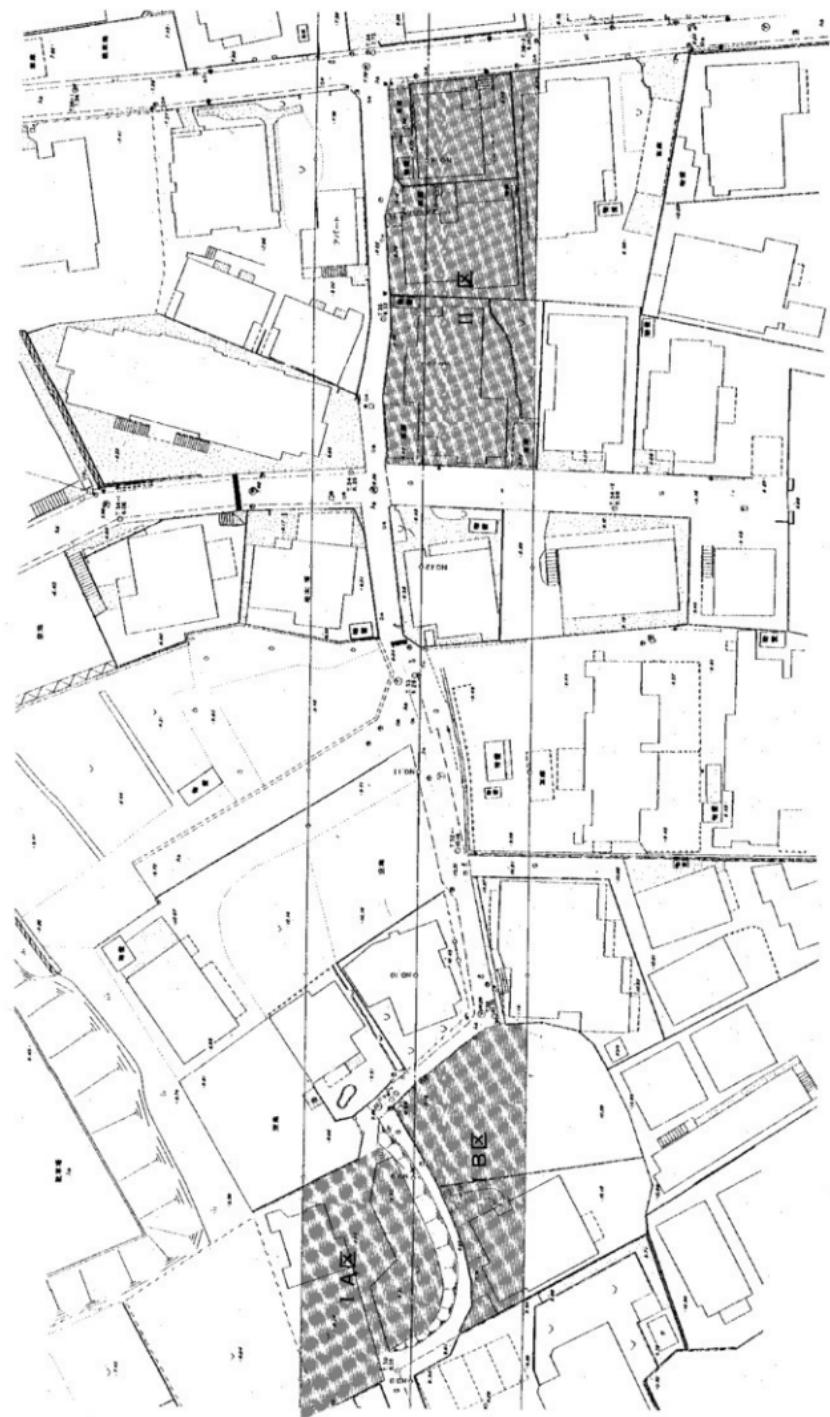


Fig. 3 田島小松浦遺跡調査区位図(1/500)

第3章 田島小松浦遺跡第1次調査の記録

第1節 IA地区の調査

1. 調査の概要

98年1月5日プレハブ工事。7日土木局と現地協議。排土の置き場所、障害物、調査範囲の確認をおこなう。8日発掘器材搬入。9日IA区の調査対象地内を東西方向に現行の道路が通っており、閉鎖することができないことがわかり、道路を挟み北側をIA区、南側をIB区とすることになった。12日再び現地にて土木局と協議。14日より表土剥ぎ作業を開始する。16日バリケード設置。19日から人力による遺構検出作業を始める。遺構面は風化バイラン土の上面にあたり、北側では現地表から約-3.0cm、南側の道路側は道路面が盛り土をしてつくられているため約2m以上の比高差となる。標高は調査区の南東隅が高く8.65mであり北西側に緩やかに低くなり北西隅は7.62mを測る。現況は宅地であったため埋設管や浄化槽等の搅乱が著しい。重機での排土は調査地の東側に出し、作業時にでた排土は西側に積んだ。検出遺構は土坑、柱穴がみられ、古墳時代の遺物片が上面の土層に含まれていた。2月17日に高所作業車にて全景写真撮影。3月16日より埋め戻し作業を開始して調査を終了した。

2. 検出遺構

SK-01 (Fig.4, PL.2)

調査区西側に位置し、搅乱に一部切られる。長軸105、短軸70、深さ5.3cmを測る。床面はやや平坦である。覆土は灰茶褐色粘質土であった。地山土と覆土の違いは明瞭であり、覆土もしまっており、何らかの目的で人為的に掘削されたものは明らかであるが、その性格と時代は出土遺物もなく不明である。

SK-02 (Fig.4, PL.3)

調査区の西端に位置し、平面橢円形を呈する。長軸115、短軸85、深さ1.1cmを測る。覆土は灰褐色粘質土であり、床面は緩やかな船底形を呈する。柱痕跡等はみられない。平面規模に対して遺構の深さが浅く後世の削平が著しいものであったことをうかがわせる。

SP-01 (Fig.4)

調査区の南東隅に位置する。直径4.0cm、深さ2.6cmの柱穴である。塵土は暗褐色砂混じり粘土である。柱痕跡は土表面、床面では確認できなかった。壁は直線的に立ち上がり、底はやや平坦である。遺物は土師器の小破片が1点出土している。胎土は均一で細かく、細かい砂粒を含む。埋土は別章でまとめた自然化学分析をおこなった。

SP-02 (Fig.4)

調査区北側に位置する。直径2.5cmほどで平面は不定形である。深さは1.1cmであり、底の北側には細い穴みられ、後世木根が遺構を切って生えていたようである。埋土はSK-02と近似する灰褐色粘質土であった。遺物は土師器の小破片が1点ある。胎土は細かく均一で砂粒はあまりみられない。

その他の遺物

遺構検出時などに採集された遺物には、土師器では厚みのあるやや大きめの壺の破片、片彫りのみ

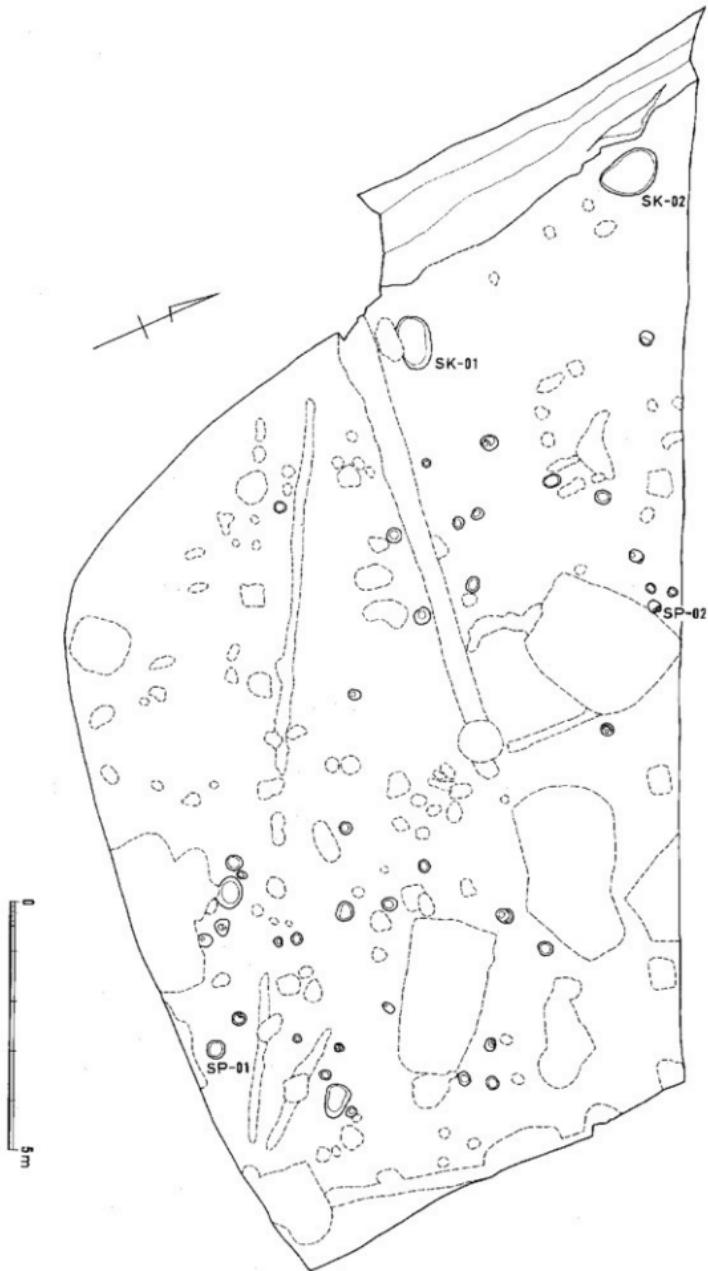


Fig. 4 I A区造構配置図(1/100)

られる青磁皿片、陶器片などがみられた。

第2節 IB地区の調査

1. 調査の概要

重機によるIA区の表土剥ぎ作業後すぐにIB区の表土剥ぎ作業にはいった。西側から表土を剥ぎだし、排土は道をこえた西側空き地に積んだ。遺構確認面は現地表土から中央部で90cm、東側で約60cmを測る。地山の上面には10~20cmの暗茶褐色粘質土の遺物包含層が調査区西側を中心にみられた。ただし、この遺物包含層はIA区ではみられなかった。旧地形は東端が最も高く標高9.67mをはかり、西端も9.26mとやや高く、調査区の北側中央部が8.93mを測り最も低くなる。調査区内東側の遺物包含層は上面の堆積土に削られていることから地山面の傾斜はさらにつよいものであったと思われる。検出遺構は柱穴、土坑である。溝状にみられるものは包含層の上面からの掘り込みの緩やかな傾斜をもつものである。

2. 検出遺構

SD-01 (Fig.5)

調査区の東よりにて検出された。遺構の幅は南側調査区壁の観察から約9mを測り、遺物包含層の上面から掘り込まれ、地山上で確認された最も深い部分は弧をえがいて西側に緩やかに曲がる。遺構の覆土は灰黄色砂質土である。出土遺物は主に土師器片であるが1点、糸切底の土師器小皿片がみられることから、遺構の掘削時期は中世以降である。

SD-02 (Fig.5)

調査区の西側でみられた。遺構の幅は上記のSD-01と同じく調査区南側壁の土層観察から約11mを測る。遺構の傾斜も緩やかで、土層の堆積状況からSD-01堆積以降に掘削されている。遺物は土師器片が数点出土している。遺構の性格はSD-01もあわせて溝としての掘削ではなく、耕地の縁を画する段のようなものではなかったかと考える。

SK-01 (Fig.5, PL.4)

調査区東側にて検出された。平面は長方形を呈し、幅35cm、長さ120cmを測る。底部は北側が一段低くなっている、深さは50cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であり、土質はよくしまっている。遺構の壁はほぼ直角に立ち上がる。出土遺物はみられなかった。

SP-01 (Fig.5)

調査区南壁の際にて検出された。直径は約25cm、深さは30mを測る。南壁の土層では掘り込み面の確認はできなかった。埋土は灰茶色粘質土であった。

SP-02 (Fig.5)

SD-02の掘削下において検出された。直径30cmを測り、深さは21cmである。埋土は暗茶褐色粘質土である。器種は特定できないが土師器片が1点出土している。

表探遺物

主に遺物包含層からの出土遺物である。1は砾石である。2は石繖。基部を欠くがU字形の抉りが

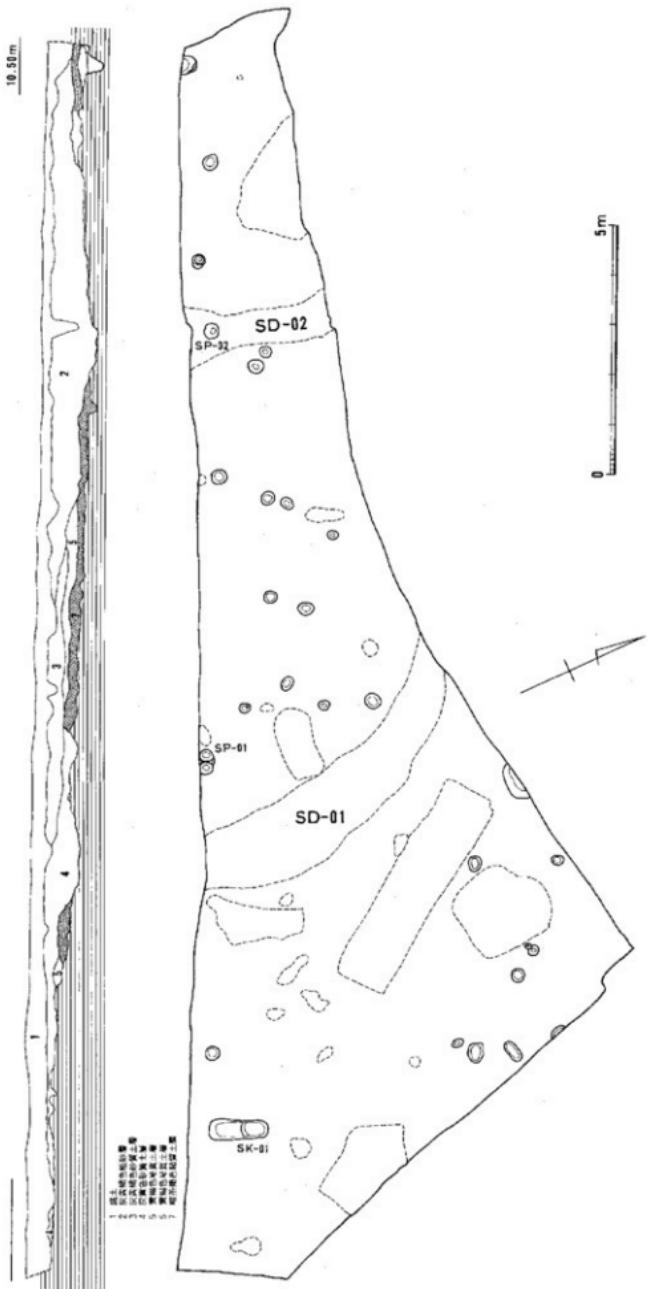


Fig. 5 IB区造構配置図(1/100)

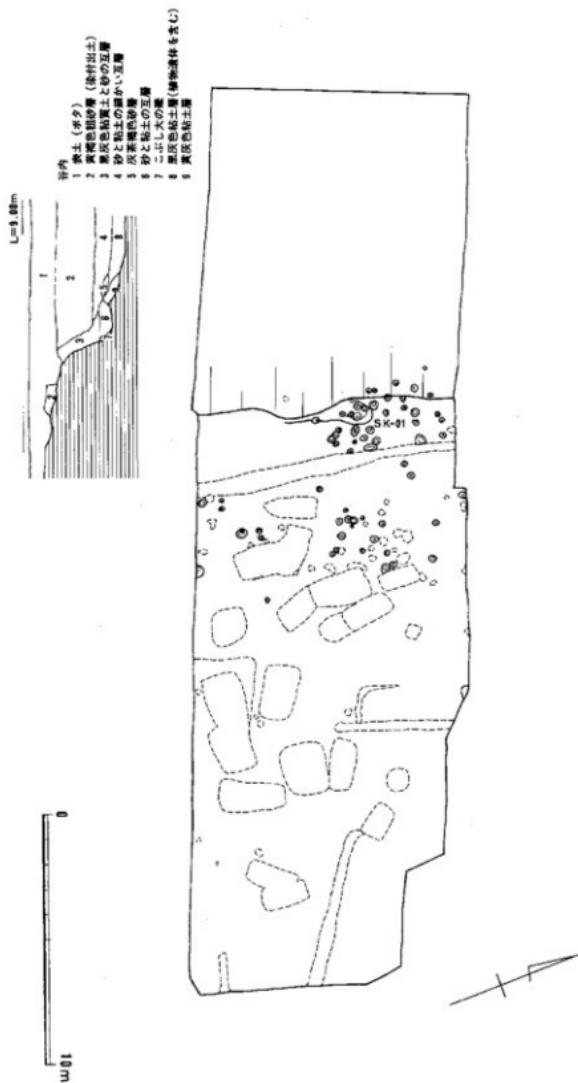


Fig. 6 II区遺構配置図(1/100)

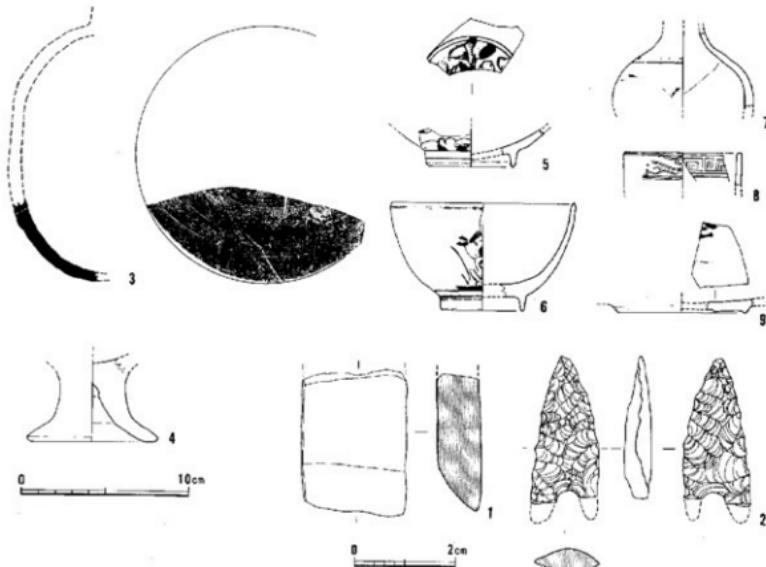


Fig. 7 田島小松浦遺跡出土遺物(1/3, 1/1)

入り、体部は細身で比較的長い。黒耀石。現存長さ3.0、幅1.3、厚み0.5cm。他に固化できるほど残存が良好ではないがカエリの低い須恵器坏身破片が出土している。

第3節 II地区の調査

1. 調査の概要

1月26日からII区の表土剥ぎ作業を開始する。II区の調査対象地内の北側にも現行の道路があり、上下水道、ガス管など地下埋設物もあり南側だけの調査をおこなった。試掘の情報として調査区東側は、現地表面より-2.2mまで谷内堆積であることがあらかじめ判っていた。現況は宅地で調査区を通る道路面より約50cm高くなっていたが、すべて宅地化時の盛り土であり、遺構検出面は道路面より約10~20cm下がった風化バイラン土であった。表土剥ぎの結果調査区の西側3分の1は谷状をしていることと、東側3分の1は地山が以前はさらに高かったようで遺構は削平のため検出されなかった。よって安定したバイラン土がみられる範囲は幅30mほどで南北方向に現在は埋没してみられないが細かな谷が複数走っていたようである。遺構は谷に向かって傾斜する斜面部にてのみ検出した。1月29日から手作業による遺構検出をはじめ、地山上の遺構を2月17日に高所作業車で全景写真を撮り終了し、2月25日より谷部の調査を開始した。谷の調査は底まで深く、安全のための養生などをとり困難を極めたが、3月13日に写真撮影をおこない掘削調査を終了した。

2. 検出遺構

SK-01 (Fig.6, P.L.6)

調査区西側、谷の落ち際にあたり、平面は不定形を呈する。床面は緩やかに弧をえがき、壁は緩や

かにひらく。深さは約35cmを測る。水を低地へ落す溝の様相も呈するが、残存が悪く全体が不明なため性格は明確にならない。

出土遺物（Fig.7） 3は須恵器提瓶。外面は回転ヘラ削り後、上からカキ目を施す。4は土師器高壺。底径7.8cmを測る。

谷内調査

現地表から-100cmまでは炭坑のボタで埋めている。その下150cmが染付が出土する黄褐色粗砂層であり江戸時代末頃の堆積である。よって江戸末までは高低差は約2m以上あったことになる。その下標高7.5mから約1mが今回調査した中層と下層の部分となる。中層は砂と粘土の細かい互層となつておらず、水成の堆積であることが解る。下層は黒灰色の粘質土であり、掘削時にも植物遺体が発見された。図化できたものは上層の遺物であり、中層、下層の遺物は極端に少なく、また小破片である。中層の遺物には白磁、青磁片が瓦の破片と混じって出土した。中層の時代は12世紀から13世紀頃があつたられ、その後江戸時代の末に大きく埋められ、明治になって炭坑から出るボタにより、完全に谷が埋没したと考えられる。

出土遺物（Fig.7）

5 明代青花碗。連子碗。高台径5.4cm。16世紀前半を主体とする。上層出土。6 肥前系染付丸碗。口径11.0、器高6.4、高台径5.0cm。18世紀後半～19世紀。7 肥前系染付徳利。赤絵。上層出土。8 肥前系染付筒碗。口縁内外にペンシルドローイングにより染付け。口径7.0cm。18世紀後半～19世紀。9 肥前系染付皿。蛇の目凹形高台。高台径7.6cm。18世紀前半頃。

第4節まとめ

今回の調査により、この周辺の地形は現在では埋没してみられないが南北方向に細い谷が複数通っていることが明らかとなった。それ故に高所部分は、古墳時代に集落として利用されるものの大きく前平されており遺構の残存は悪い。古墳時代の環境は詳しくは自然科学分析の章を参照されたいが大まかには、スキガがはえる比較的に開けた乾いた場所で集落の立地としては良好な場所であったと言えよう。またイネ属の細胞や珪酸体もみられたことから、樋井川周辺やまた別の湿地帯などでは水田を営んでいたと思われる。中世の環境は谷内の土壤分析から、深くて細い谷はやや埋まつて東西方向の移動もおこないやすくなつていて、アカマツやクロマツなどがみられる人間の手が入った林であった。現在では樋井川側に約百mよると13世紀前半を中心とする集落が田島A遺跡として調査されているが、このような集落はそれ以外にもこの周辺に散在したのではないかと考えられる。今回の調査は田島小松浦として第1次調査となつたが今後の調査により、この地の利用のされ方や各時代の状況がさらに明らかになることを期待し、今回の成果がそのための足がかりとなれば幸いである。

第4章 田島小松浦遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

田島小松浦遺跡（福岡県福岡市城南区に所在）は、鳥飼平野の南に広がる中位段丘の上位面の春日面上に位置する。春日面は仲原礫層からなる河岸段丘であるが、地形面の開析が進んで複数の尾根状を呈しており、いくつかの谷底平野が形成されている（唐木田ほか、1994）。今回の発掘調査では、古墳時代の集落跡が確認されている。また中世に埋没したとみられる開析谷も認められている。

今回の自然科学分析調査では、古墳時代および中世頃の古環境に関する情報を得ることを目的として、古墳時代の遺物包含層と遺構埋積物、中世の谷埋積物を対象として珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析をそれぞれ実施する。

1. 試料

試料は、古墳時代の遺物包含層から採取された1点（試料番号1）、古墳時代の柱穴状遺構埋積物から採取された1点（試料番号2）、谷埋積物の上層および下層から採取された2点（試料番号3・4）、合計4点である。分析試料の一覧表を表1に示す。

表1 分析試料

試料番号	採取地区	立地	採取層位等	時代性	土質	分析項目		
						D	P	P0
1	I B 区	段丘上	遺物包含層	古墳時代	褐色粘土混じり砂質シルト		○	○
2	I A 区	段丘上	柱穴状遺構埋積物	古墳時代	暗褐色砂混じり粘土			○
3	II 区	谷	埋積物（上層）	中世	灰オーブ色粘土混じり砂質シルト	○	○	
4	II 区	谷	埋積物（下層）	中世	暗灰黄色砂質シルト	○	○	○

凡例) D : 硅藻分析 P : 花粉分析 P0 : 植物珪酸体分析

2. 分析方法

(1) 硅藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、K.Krammer (1992)などを用いる。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イ

オン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数が200個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の変遷図を作成する。また、産出する化石が現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたって、淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については K.Asai & T.W atanabe (1995) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料を湿重で約10 g 秤量し、水酸化カリウム処理、簡別 (250 μ m)、重液分離 (臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理 (無水酢酸 : 濃硫酸 = 9 : 1) の順に物理・化学的な処理をして花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基準とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフロン (-) で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 植物珪酸体分析

湿重5 g 前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理 (70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出される植物珪酸体の出現傾向から周辺のイネ科植物相について検討するために、植物珪酸体群集の層位的分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基準とする百分率で求める。

3. 結果

(1) 硅藻化石

結果を表2、図1に示す。2試料とも硅藻化石が含まれる。完形殻の出現率は、試料番号4が50%、試料番号3が70%であり、試料番号3の方が化石の保存がよい。両試料の硅藻化石群集は、

表2 硅藻分析結果(1)

種類	生態性			環境指標種 E2	3	4
	鹽分	pH	流水			
<i>Nitzschia lorenziana</i> Grunow	Meh				-	1
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind		1	-
<i>Nitzschia obtusa</i> var. <i>scalpelliformis</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	1
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	1
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	12
<i>Anomoconis brachysira</i> (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O, T	-	1
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	20	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
<i>Caloneis hyalina</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	1
<i>Cymbella naviculariformis</i> Auerwald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	16
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	2
<i>Cymbella subaequalis</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, T	-	1
<i>Eunotia arcus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1
<i>Eunotia arcus</i> var. <i>bidentata</i> Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	1
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	3	7
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	1
<i>Frustulina rhomboidea</i> (Ehr.) De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P	-	1
<i>Frustulina rhomboidea</i> var. <i>saxonica</i> (Rabh.) De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	1
<i>Frustulina vulgaris</i> (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	-	6
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	7	5
<i>Gomphonema pseudosphaerophorum</i> H. Kobayashi	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	5
<i>Gomphonema subtile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	9	6
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB, S	1	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	16	1
<i>Navicula gibbula</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	1
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	27	18
<i>Navicula saxophila</i> Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	1
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	-	3
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2
<i>Neidium affine</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		-	1
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	12	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Kramer	Ogh-ind	ind	l-ph		2	4
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	2
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U	5	4
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	12
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	7	3
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>scalaris</i> (Ehr.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	2
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		2	1
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	2
<i>Pinnularia divergens</i> W. Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		2	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	19

表2 珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境指標種	3	4
	塩分	pH	流水			
<i>Pinnularia inconstans</i> Mayer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1
<i>Pinnularia macilenta</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	2
<i>Pinnularia major</i> Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	1
<i>Pinnularia cf. mayeri</i> Kramer	Ogh-unk	unk	unk		-	1
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	1
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1
<i>Pinnularia pisciculus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		-	5
<i>Pinnularia rupestris</i> Mantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		1	1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Kramer	Ogh-ind	ind	ind	RI	32	4
<i>Pinnularia silvatica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	2
<i>Pinnularia streptoraphe</i> Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	2
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	3	2
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O		11
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	4
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	2	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	23	4
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	6
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> fo. <i>gracilis</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>hattori</i> Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	2
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	16	-
<i>Surirella bohemica</i> Maly	Ogh-ind	ind	unk		1	2
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	2
<i>Surirella tenera</i> Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi		-	2
<i>Tabellaria flocculosa</i> (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T		1
海水生種合計					0	0
海水・汽水生種合計					0	0
汽水生種合計					0	1
淡水・汽水生種合計					2	1
淡水生種合計					206	205
珪藻化石総数					208	207

凡例

II. R : 塩分濃度に対する適応性	pl:水素イオン濃度に対する適応性	C. R : 流水に対する適応性
Meh : 汽水生種	al-bi:真好水性種	l-bi:真止水性種
Ogh-Mch: 淡水生種-汽水生種	al-il:好7%好水性種	l-ph:好止水性種
Ogh-hil: 貧塩好塩性種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種	ac-il:好酸性種	r-ph:好流水性種
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種	ac-bi:真酸性種	r-bi:真流水性種
Ogh-unk: 貧塩不明種	unk : pH不明種	unk : 流水不明種

環境指標種

E2:汽水泥質干潟指標種 (小杉, 1988)

K:中~下流性河川指標種 O:沼沢湿地付着生種 P:高層潮原指標種 (以上は安藤, 1990)

S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)

R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内, 1991)

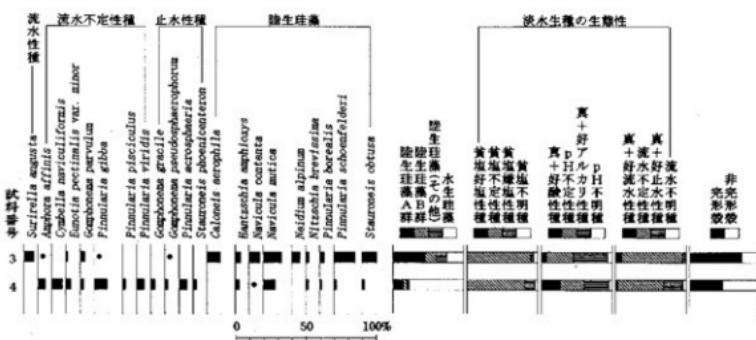


図1 主要珪藻群集の層位的分布
海水-汽水-淡水生産度出率・完形殻度出率は全種基數、淡水生産の生態性の比率は淡水生産の合計を基準として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の試料について検出した種類を示す。

水域に生育する水生珪藻と陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻から構成されるが、その割合は試料により異なる。産出分類群数は、合計で19属70分類群である。

試料番号4は水生珪藻が約70%と優占し、流水域にも止水域にも生育する流水不定性種が優占し、この他に止水域に特徴的な真+好止水性種が多産する。主な産出種は流水不定性の *Amphora affinis*、*Cymbella naviculiformis*、*Pinnularia gibba*、*P. viridis*、好止水性の *Pinnularia acrosphaeria* である。これらの種の多くは沼澤湿地付着生群（安藤、1990）とされる。また、陸生珪藻のなかでも耐乾性の強いA群（伊藤・堀内、1991）の *Navicula mutica* が約10%産出する。

試料番号3は、陸生珪藻が約70%と優占する。主な産出種は、A群の *Caloneis aerophila*、*Navicula contenta*、*N. mutica*、*Neidium alpinum*、未区分陸生珪藻（伊藤・堀内、1991）である *Pinnularia schoenfelderi*、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻B群（伊藤・堀内、1991）の *Stauroneis obtusa* である。また、水生珪藻では、流水性の *Surirella angusta* が約10%産出する。

(2) 花粉化石

結果を表3、図2に示す。試料番号1では、シダ類胞子が検出されるだけで、花粉化石が全く検出されない。

試料番号4では、花粉化石が比較的良好に検出される。試料番号4で検出される木本花粉の中では、マツ属が約70%出現しており優占する。この他に、ヤマモモ属・クマシデ属-アサダ属・コナラ属・アカガシ属・クリ属-シイノキ属-マテバシイ属・ニレ属-ケヤキ属・ブドウ属などを僅かに伴う。

草本花粉ではイネ科が多産し、オモダカ属・カヤツリグサ科・ホシクサ属・ミズアオイ属・クワ科・ソバ属・キカシグサ属・キク亜科などを伴う。

表3 花粉分析結果

種類	試料番号	1	4
木本花粉			
モミ属	-	1	
ツガ属	-	2	
マツ属	-	172	
ヤマモモ属	-	3	
クマシデ属—アサダ属	-	11	
コナラ属コナラ亜属	-	2	
コナラ属アカガシ亜属	-	17	
クリ属—シノキ属—マテバシイ属	-	15	
ニレ属—ケヤキ属	-	3	
イスノキ属	-	1	
カラスザンショウ属	-	1	
ニシキギ属	-	1	
ブドウ属	-	3	
ツバキ属	-	1	
ウコギ科	-	1	
カキ属	-	1	
スイカズラ属	-	1	
草本花粉			
オモダカ属	-	2	
イネ科	-	506	
カヤツリグサ科	-	21	
ホシクサ属	-	1	
ミズアオイ属	-	4	
クワ科	-	21	
サナエタデ節—ウナギツカミ節	-	20	
タデ属	-	1	
ソバ属	-	53	
アカザ科	-	4	
ナデシコ科	-	10	
アブラナ科	-	4	
バラ科	-	1	
マメ科	-	1	
フウロソウ属	-	1	
キカシグサ属	-	23	
アリノトウグサ属	-	10	
セリ科	-	2	
オミナエシ属	-	1	
ヨモギ属	-	10	
キク亜科	-	26	
タンポポ亜科	-	11	
不明花粉	-	22	
シダ類胞子			
シダ類胞子	90	728	
合計			
木本花粉	0	236	
草本花粉	0	733	
不明花粉	0	22	
シダ類胞子	90	728	
総計(不明を除く)	90	1697	

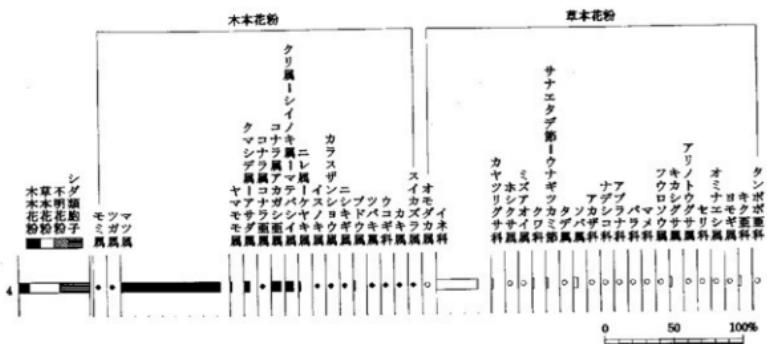


図2 主要花粉化石群集の層位的分布
出見率は、木本花粉は木本花粉化石種数、草本花粉・シグ類別子は種数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なび、○●は1%未満の試料について検出した種類を示す。

(3) 植物珪酸体

結果を表4、図3に示す。試料番号2では、タケ亜科、ウシクサ族ススキ属などが検出されるものの、検出個体数が非常に少ない。

試料番号1では、タケ亜科・ウシクサ族ススキ属が多産し、コブナグサ属・イチゴツナギ亜科を伴う。また、イネ属も僅かであるが検出される。また、近藤・ピアソン(1981)による樹木の葉部内に形成される樹木起源珪酸体の分類で第IIIグループおよび第IVグループに属する珪酸体も検出される。

試料番号4・3では、イネ属両珪酸体が高率に出現し、タケ亜科・ウシクサ族が多産する。この他、イチゴツナギ亜科を伴う。また、稻軸に形成されるイネ属両珪酸体、イネ属の短細胞列や機動細胞列も認められる。この他、樹木起源珪酸体の第IIIグループおよび第IVグループに属する珪酸体も検出される。

表4 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	9	-	101	50	
タケ亜科	44	3	32	37	
ウシクサ族コブナグサ属	1	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	61	4	9	30	
イチゴツナギ亜科	6	-	17	17	
不明キビ型	47	5	38	52	
不明ヒゲシバ型	22	-	4	9	
不明ダンチク型	25	3	20	20	
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	7	-	42	41	
タケ亜科	21	-	17	21	
ウシクサ族	42	2	43	22	
不明	41	2	20	21	
合計		215	15	221	215
イネ科葉部短細胞珪酸体	111	4	122	105	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	326	19	343	320	
組織片					
イネ属頭珪酸体	-	-	3	4	
イネ属短細胞列	-	-	13	15	
イネ族葉部組織片	-	-	67	40	
樹木起源珪酸体					
樹木起源第IIIグループ	1	9	-	5	
樹木起源第IVグループ	4	6	1	6	

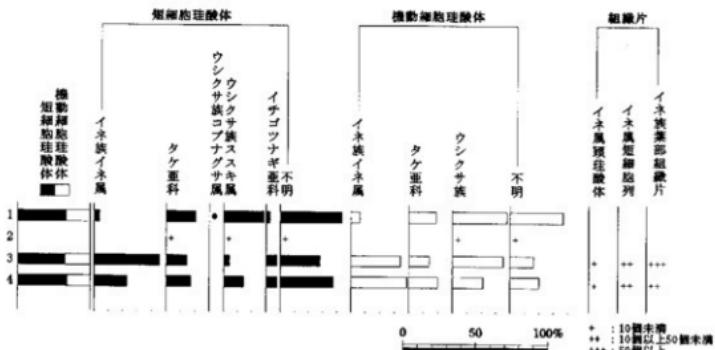


図3 植物珪酸体群集の層位的分布と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉部機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、●はイネ科葉部短細胞珪酸体で200箇未満、イネ科葉部機動細胞珪酸体で100箇未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

4. 遺跡周辺の古環境

(1) 古墳時代の古環境

古墳時代の柱穴状遺構内埋植物からは、植物珪酸体がほとんど検出されなかつたが、遺物包含層からは多産した。一方、花粉・胞子化石は保存状態が悪く、遺物包含層からシダ類胞子がわずかに検出されただけである。この原因としては、調査地点の立地環境を考慮すると、堆積後の風化作用の影響により分解・消失したことが示唆される。したがって、当時の植生については、植物珪酸体組成に基づいて検討する。

遺物包含層の植物珪酸体組成は、タケ亞科とウシクサ族スキ属が多産することが特徴である。タケ亞科に含まれるササ類やタケ類は好気的な場所に分布する。スキ属には乾いた場所に生育するスキのほかに湿地生のオギが含まれるが、植物珪酸体組成において湿地生のヨシ属が全く検出されないことからみて、スキ由来と考えられる。したがって、当時の調査地点はスキやササ類などが分布する比較的開けた場所であったことが推定される。

また、植物珪酸体組成には樹木起源の植物珪酸体が認められた。近藤・ビアスン(1981)の分類によれば、今回の珪酸体は第IIIグループおよび第IVグループに対比されるものである。第IIIグループは維管束細胞の節部がケイ化したもので大部分の樹木葉部に形成される。イスノキ属の樹木葉の維管束細胞に由来する珪酸体がこの形態と類似するとされている(近藤、1976)。第IVグループは維管束細胞の周辺部に形成されるものである(近藤・ビアスン、1981)。ここでは樹木の種類を特定することはできないが、調査区周辺にはイスノキ属などの暖温帶性の広葉樹が分布

していた可能性がある。このことは、本地域には完新世以降、基本的には暖温帶性の常緑広葉樹林が成立していたと考えられている（畠中、1977；安田、1977；黒田・太田、1978など）こととも調和的である。

本層準からは、栽培植物のイネ属由来の短細胞・機動細胞珪酸体も検出された。出現率が低率であったことや、上記したような環境を考慮すると、調査区内で栽培されていたものではなく、何らかの経路を経て持ち込まれたものと思われる。

（2）中世の古環境

谷埋植物の珪藻化石群集は、中層と下層で異なっていた。下層では、沼よりも浅く水深が1m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢や、水深の浅い湿地に生育する沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）が多産した。これに対して上層では、陸生珪藻が約70%と優占した。陸生珪藻とは好気的な環境の堆積物に繁茂する珪藻である。現在の表層土壤の調査によれば、陸生珪藻が全珪藻化石に占める割合が70～80%以上の場合、その場所は風成堆積した土壤などの好気的な場所であったことを示唆するとされている（伊藤・堀内、1991）。したがって、谷内は、下層が堆積する頃には沼沢～湿地のような湿潤な場所であったが、埋積の進行に伴い次第に離水し、中層が堆積するころには好気的な状態となったことが推定される。

下層の時期の谷内は、草本花粉が多産したこと、その中には水湿地生植物の種類が認められたことから、オモダカ属・ホシクサ属・ミズアオイ属・キカシグサ属などの草本植物を中心とした植生が成立していたと考えられる。また、植物珪酸体において栽培種のイネ属が多産したことから、谷内では稲作が行われていたことが推定される。中層でもイネ属が多産したことから中層堆積期も稲作が行われていたことが推定される。

谷周辺の植生は、木本花粉の中でマツ属花粉が多産したこと、マツ属にはアカマツ・クロマツの2種が知られているがいずれも闊葉樹であることから、二次林のような性格をもった植生であったことが推定される。また、ヤマモモ属・アカガシ亞属・クリ属・シイノキ属・マテバシイ属・イスノキ属など暖温帶を中心に分布する種類や、カラスザンショウ属・ニシキギ属・ブドウ属・カキ属・スイカズラ属など林縁部など日当たりが良好な場所に分布する種類なども当時の植生を構成する要素であったと思われる。

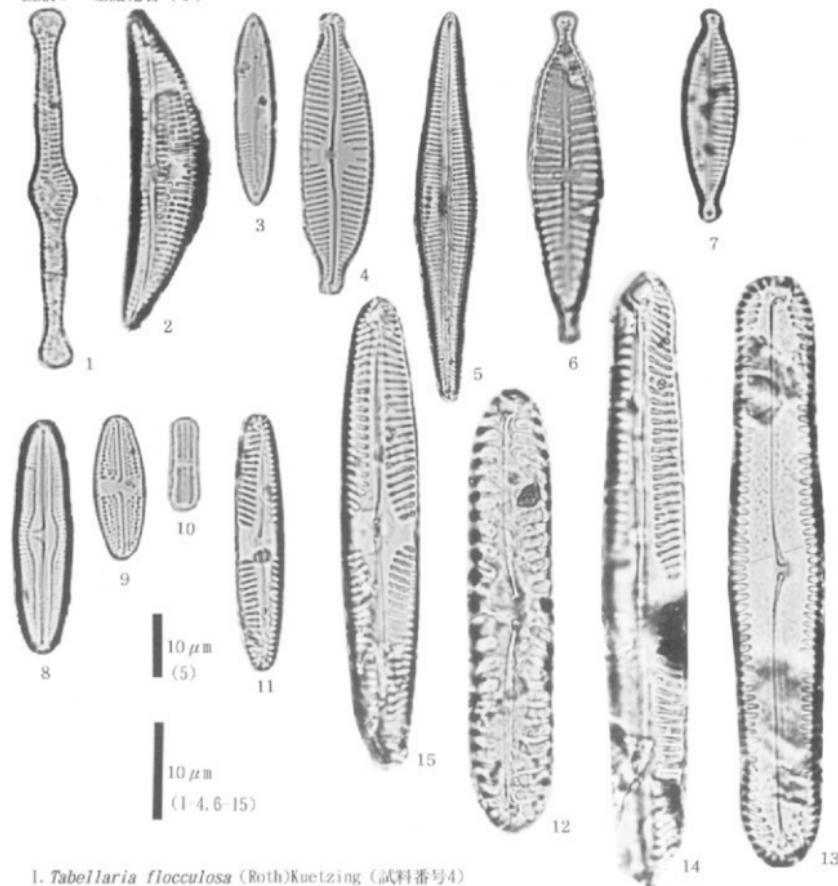
ところで、完新世後半におけるマツ属花粉の増加現象は日本各地で認められており、九州地方もその例外ではない（中村・畠中、1976；黒田・畠中、1979；Ishizuka, 1985など）。本遺跡で捉えられたマツ属花粉の多産も同様な現象に対比されると考えられる。その増加開始時期は各地で異なっており、本地域では少なくとも中世の時期には分布域を広げていたことが推定される。また、マツ属の増加の原因としては、直接的あるいは間接的な人間の植生干渉が著しくなった結果、二次林要素としてマツ類が増加したとする見解が一般的であるが、各地域でその変遷様式は異なっていた可能性が高い。今後、本地域でもこのような視点から植生と、人間活動や自然環境

変化との関係を明らかにしていきたい。

引用文献

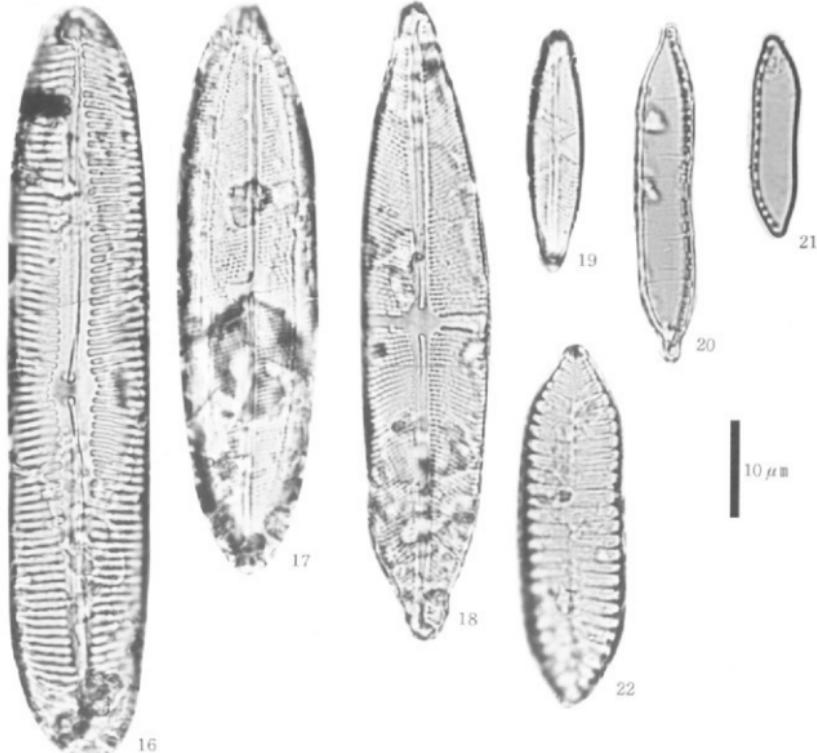
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- K. Asai & T. Watanabe (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p. 35-47.
- 畠中健一 (1977) 福岡市四箇遺跡の花粉分析学的研究. 昭和51年度特定研究「穀作の起源と伝播」, p. 25-29.
- K. Matsunaka (1985) PALYNOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WARM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. *Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B)*, 18, p. 29-71.
- 伊藤良永・塙内誠志 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 黒田登美雄・太田辰夫 (1978) 福岡市天神地域の後期更新世～完新世堆積物の花粉分析学的研究. その1. 第四紀研究, 17, p. 1-14.
- 近藤鉢三 (1976) 樹木起源の珪酸体について. ペドロジスト, 20, p. 176-189.
- 近藤鉢三・ピアソン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 布広畜産大学研究報告, 12, p. 217-229.
- 近藤鉢三・佐瀬隆 (1986) 植物珪酸体分析. その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.
- 小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- K. Krammer (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p. 1-353., BERLIN + STUTTGART.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae, Band 2/2 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariales, Eunotiaceae, Band 2/3 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achmanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 中村純・畠中健一 (1976) 板付遺跡の花粉分析学的研究. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集「板付一市営住宅建設にともなう発掘調査報告書 1971～1974」, p. 29-42, 福岡市教育委員会.
- 安田喜憲 (1977) 北九州における2・3の遺跡の泥土の花粉分析. 昭和51年度特定研究「穀作の起源と伝播」, p. 11-24.

図版1 珪藻化石(1)



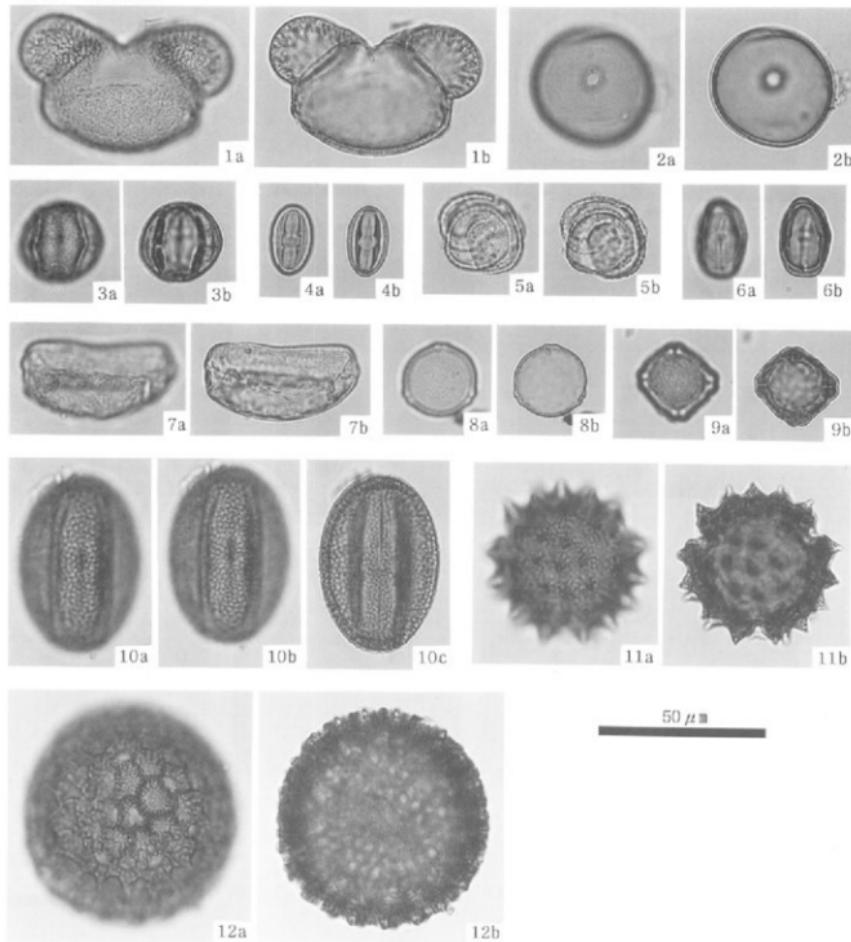
1. *Tabellaria flocculosa* (Roth) Kuetzing (試料番号4)
2. *Amphora affinis* Kuetzing (試料番号4)
3. *Caloneis aerophila* Bock (試料番号3)
4. *Cymbella naviculiformis* Auerwald (試料番号4)
5. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (試料番号4)
6. *Gomphonema sphaerophorus* Ehrenberg (試料番号4)
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (試料番号3)
8. *Navicula gibbula* Cleve (試料番号3)
9. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号4)
10. *Navicula contenta* Grunow (試料番号4)
11. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (試料番号3)
12. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (試料番号4)
13. *Pinnularia acrosphaeria* W. Smith (試料番号4)
14. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (試料番号4)
15. *Pinnularia substomatophora* Hustedt (試料番号4)

図版2 珪藻化石(2)



16. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (試料番号4)
17. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (試料番号4)
18. *Stauroneis phoenicenteron* var. *hattorii* Tsumura (試料番号4)
19. *Stauroneis obtusa* Lagerst (試料番号3)
20. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号3)
21. *Nitzschia brevissima* Grunow (試料番号3)
22. *Surirella angusta* Kuetzing (試料番号3)

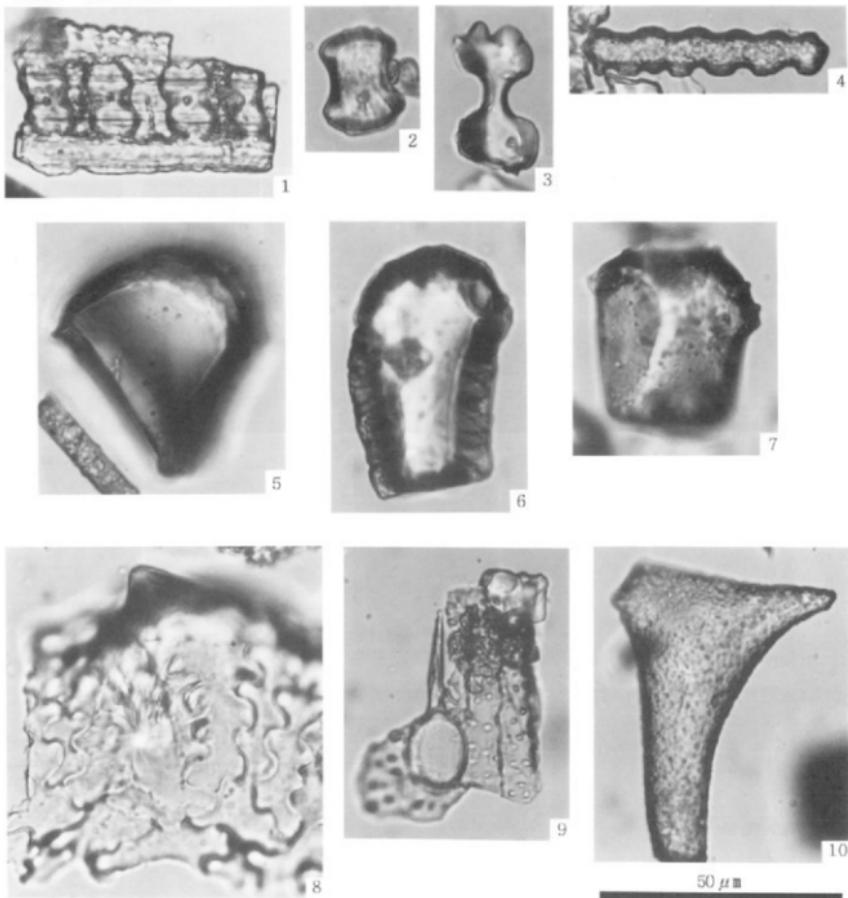
図版3 花粉化石



1. マツ属(試料番号4)
3. コナラ属アカガシ亞属(試料番号4)
5. ホシクサ属(試料番号4)
7. ミズアオイ属(試料番号4)
9. アリノトウグサ属(試料番号4)
11. キク亜科(試料番号4)

2. イネ科(試料番号4)
4. クリ属—シノキ属—マテバシイ属(試料番号4)
6. キカシグサ属(試料番号4)
8. クワ科(試料番号4)
10. ソバ属(試料番号4)
12. サナエタデ節—ウナギツカミ節(試料番号4)

図版4 植物珪酸体



1. イネ属短細胞列(試料番号3)
3. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号4)
5. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号3)
7. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号4)
9. イネ族葉部組織片(試料番号3)

2. タケ亜科短細胞珪酸体(試料番号3)
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号1)
6. タケ亜科機動細胞珪酸体(試料番号3)
8. イネ属顆粒体(試料番号3)
10. 樹木(第IIIグループ) 硅酸体(試料番号4)

第5章 田島A遺跡第1次、第2次調査の記録

1. 調査の概要

1997年度の田島小松浦遺跡の調査から翌98年度の田島A遺跡第1次の調査にうつり、調査を4回の排土機替えに分け99年2月まで調査をおこなった。それ以外に道路建設に伴い自動販売機の移動による調査が発生したが調査面積が狭小で、調査にかかる期間が短期間であるため遺跡確認調査のため調査をおこない第2次調査とした。

第1期の調査は中央部から東に向かって約半分の表土剥ぎ作業を4月6日から始めた。遺構は現地表面から約30~40cm剥いたローム層上面にて検出された。この年の春から夏にかけて雨が多く作業ができる日が数日あった。主な遺構は竪穴住居、掘立柱建物、柱穴、溝、土坑、上塙などであり、特に地形的に高い西側の遺構密度は濃い。磁北に沿うように溝がはしり、あわせて掘立柱建物、木棺墓、竪穴状の遺構など中世の集落がみられた。しかし、台地の幅が狭く水源が近くにあったせいか井戸はみられなかった。6月5日には笛丘小学校の生徒が現地見学に訪れる。6月12日に高所作業車で全景写真撮影を行い6月22日から埋め戻し作業と第2期調査区の表土剥ぎ作業を開始した。

第2期は調査区東端の調査であり、東に向かって傾斜しており遺構の残存も良好であった。遺構は地表下50~100cmの西側に比べればやや深いレベルで検出された。北東の一辺は大きく四角に削られており、周辺に住まわれている老人の話では昭和になって土取りをおこなったという話を聞いた。昭和のはじめ頃の地図でもこの四みはなく矛盾しない。検出遺構は弥生時代前期の貯蔵穴、古墳時代の石蓋土壙墓、竪穴住居、溝、やや大きめの掘りかたをもつ古代の柱穴、谷頭と思われる堆積がみられる部分もあった。9月11日より埋め戻し作業にはいった。この年の夏は暑い日が続き調査に参加した作業員や学生も体力的に苦しいものであった。

第2期の調査の後半、田島A遺跡第2次調査をおこなった。幅2mの調査であったが、石蓋土壙墓、貯蔵穴など多くの良好な遺構を検出した。土地所有者の蕉克己氏には文化財調査に対するご理解とご協力をいただいた。

第3期の調査は作業用のプレハブを調査区外に移転し、中央部から西に向かって調査をおこなった。用地の買収が一部遅れており、西端の部分を残して調査を進めた。遺構面は地表下30~50cmのローム層上でみられ検出作業を行った。主な遺構は古墳時代の竪穴住居、中世の集落にともなう溝、掘立柱建物、墓などであった。第1期調査区と接している部分が最もレベル的に高くなり、そこが最も遺構の密度が高い。ただ、弥生時代の遺構は斜面部だけに限られ、古墳時代の遺構が少なく、残存が悪いことは中世までに高所が大きく削られたことが窺われる。10月15日から16日は大型台風がきて調査区は水没しとなる。11月20日夜、泥棒が事務所の1階小窓から入り、水中ポンプ2個とコードリールを盗まれる。12月9日高所作業車で全景写真撮影。埋め戻しはせず調査区を引き渡して調査終了。

第4期調査は西端部だけを調査した。年がかわり98年1月6日より表土剥ぎ作業に入る。地山はローム層であるが西側に向け傾斜がやや急になっている。その上面に20~30cmの遺物包含層が確認でき、含まれる遺物量が多いことから人力による掘削を行った。検出遺構は柱穴、溝などで密度はやや薄くなるが、遺構の残存は良好である。主な遺構の時代は中世であり、弥生時代から古代の遺構は他の部分に比べ著しく薄い。2月4日は雪であったがこの日から埋め戻し作業を始め調査を終了した。

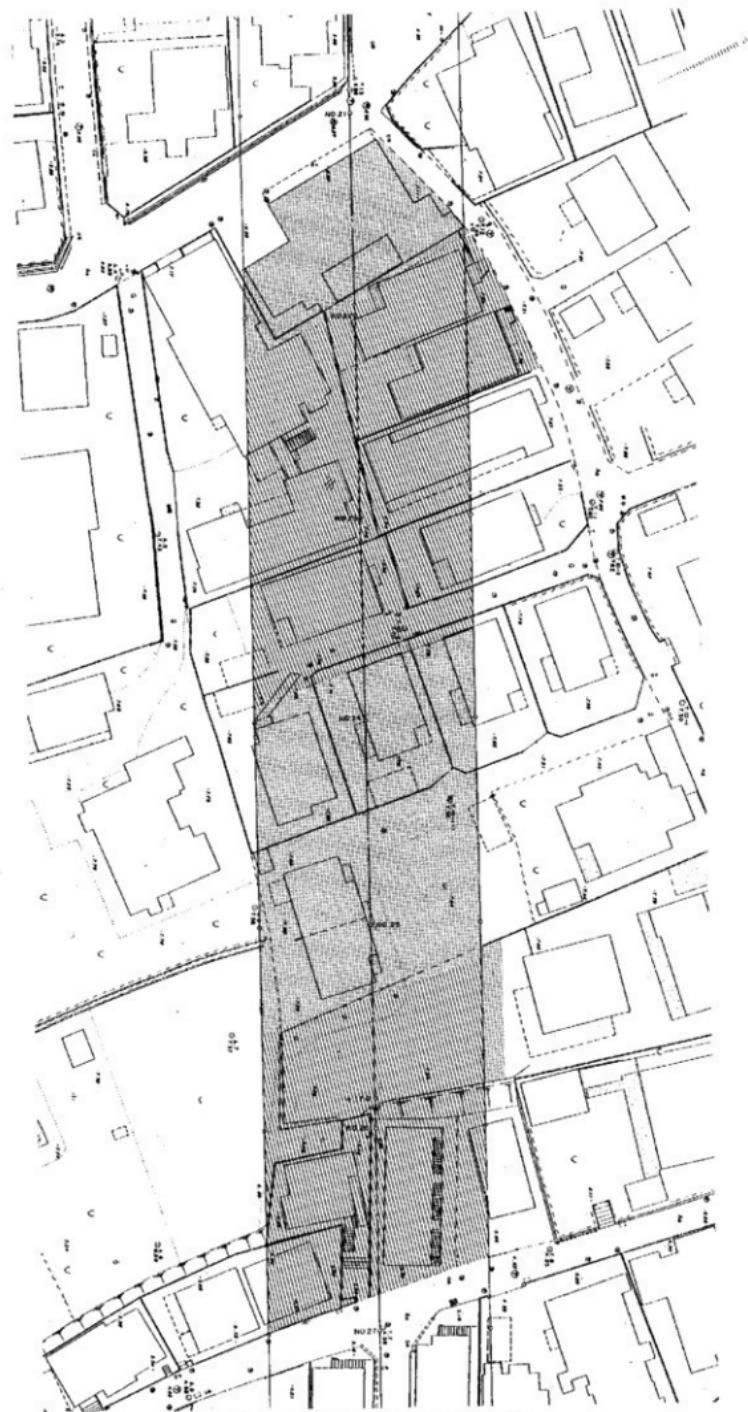


Fig. 8 田島 A 遺跡調査区位置図(1/500)



Fig.9 田島A遺跡遺構配置図(1/500)



2. 検出遺構

竪穴住居 (S C)

S C - 2 6 (Fig.10, P L.12)

I - 2 にて検出され、S K - 2 5 に切られる。東西3.0m、南北2.9mを測る方形の竪穴住居である。残存深さは45cmを測る。東壁中央部には掘り込みのカマドがみられる。四隅の近くに柱穴があり、幅約10cmの周縁溝がカマド部以外にめぐる。カマドに使われていた白色粘土の残存が良好な部分もみられたが、床面上にも粘土塊が散っていた。

出土遺物(Fig.12) 1 土師器壺。口縁内面の屈曲明瞭。外面ハケ目調整、内面口縁下手持ちヘラ削り。カマド出土。2 土師器壺。口縁内面の屈曲明瞭。外面縦方向ハケ目調整、内面口縁下手持ちヘラ削り。口径28.2cm。(SK-025出土のものと接合)遺構の時期 図示した壺が古代か古墳のものか不明。SC-025と切り合っており、遺物がどちらに従属するのかは不明。

S C - 2 7 (Fig.10, P L.13)

I - 3、J - 3 にて検出された。長軸4.6m、短軸3.3mを測る長方形の竪穴住居である。残存は悪く、最も深いところで約10cmであった。南壁の西よりに土坑がつくられる。主柱穴は不明である。

出土遺物(Fig.13) 11 土師器壺。口縁の屈曲は明瞭、わずかに内湾気味で端部をつまみ出す。口径18.0cm。12 土師器壺。口縁はわずかに内湾気味で端部をつまみ出した名残が若干認められる。口径12.8cm。13 土師器壺。口縁は真っ直ぐ外方にのびる。なで肩。磨滅著しく調整不明。口径19.6cm。14 土師器二重口縁壺。15・16 土師器高坏部。磨滅著しく調整不明。口径18.6cm。17・18 土師器高坏脚。いずれも下位で一旦屈曲する。18は屈曲した部分に四ヶ所穿孔あり。磨滅著しく調整不明。底径11.4cm。19 土師器鼓形器台。内外面横ナデ調整。くびれ部分上下に突帯あり。底径17.0cm。20 鉄製品。不明。遺構の時期は古墳時代初頭と考える。

S C - 3 5 (Fig.10, P L.14)

J - 3、K - 3 にて検出された方形の竪穴住居である。東西2.4mを測り、残存する深さは25cmである。南側は調査区外にのびる。四隅近くに柱穴があることから4本柱であると考えられる。

出土遺物(Fig.12) 3 上師器坏蓋。器高低く、口縁端部は短く立つ。磨滅著しく不明瞭であるが天井部外面は回転ヘラ削りと思われる。口径15.6cm。4 土師器高台付き皿。高台断面は四角形を呈する。磨滅著しく調整不明。高台径18.2cm。遺構の時期は8世紀前半から中頃と思われる。

S C - 3 6 (Fig.10, P L.14・15)

K - 3 にて検出された。方形の竪穴住居であり、東西1.3mを測り、南西角は調査区外にのびる。残存深さは25cmである。主柱穴は4本で、建て替えが2回以上おこなわれたと考えられ、柱穴が複数かさなる。中央部の50×100cmの範囲は被熱して赤化しており、西側には直径45cmの範囲に炭化物が集中する部分がみられる。

出土遺物(Fig.12) 5 須恵器鉢。外面下位にカキ目を施す。6 土師器高坏脚。内面は横、外面は縦方向の手持ちヘラ削り。7 土師器把手。遺構の時期は8世紀前半から中頃と考えられる。

S C - 8 0 (Fig.11, P L.15)

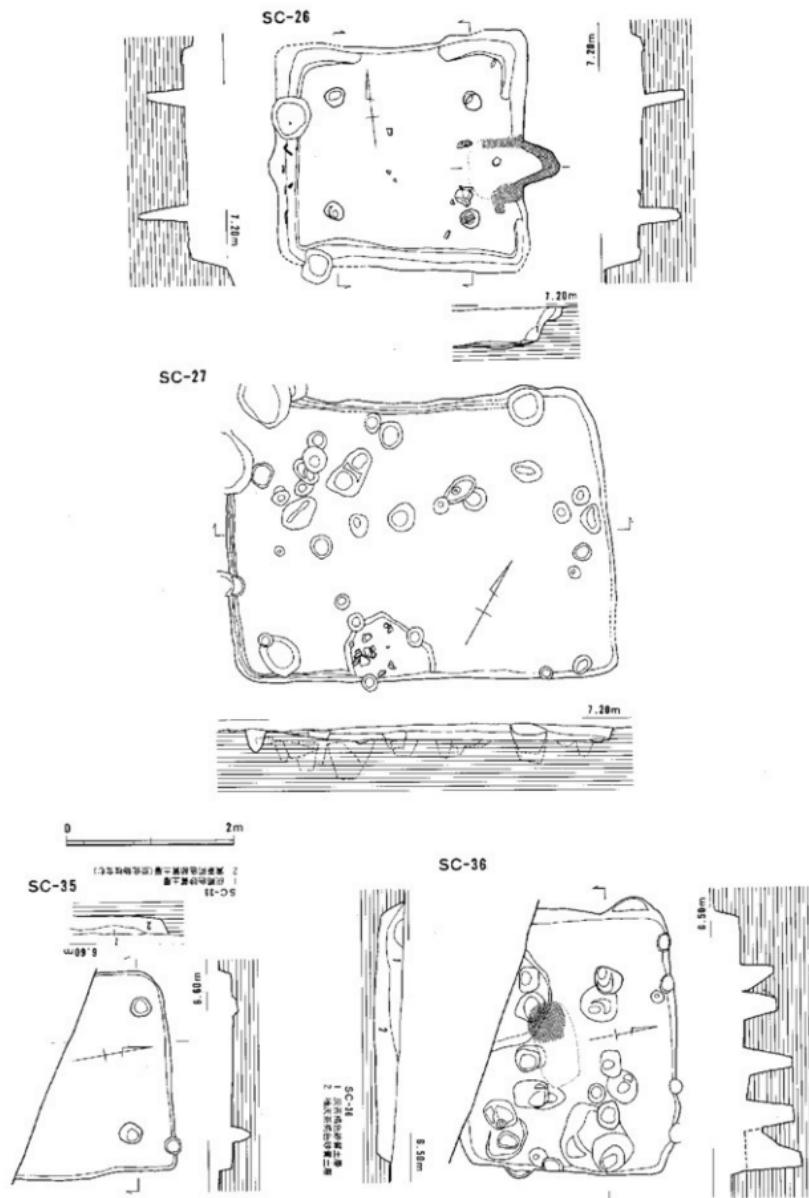


Fig.10 積穴住居 (S C) - 2 6 , 2 7 , 3 5 , 3 6 実測図(1/40)

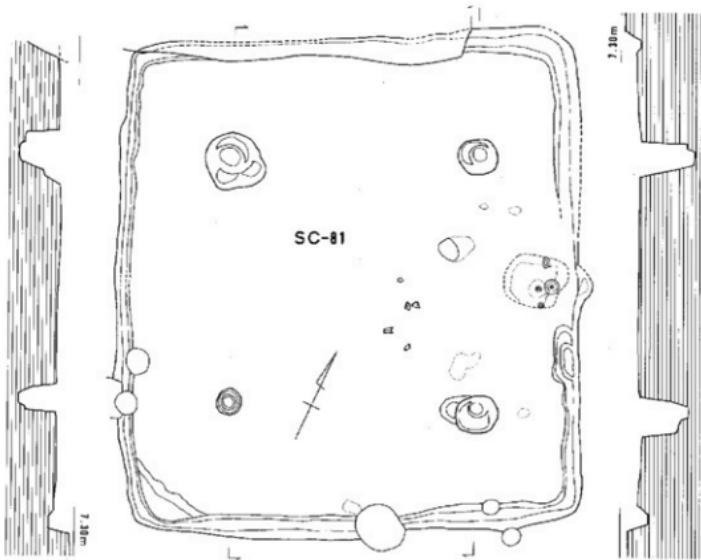
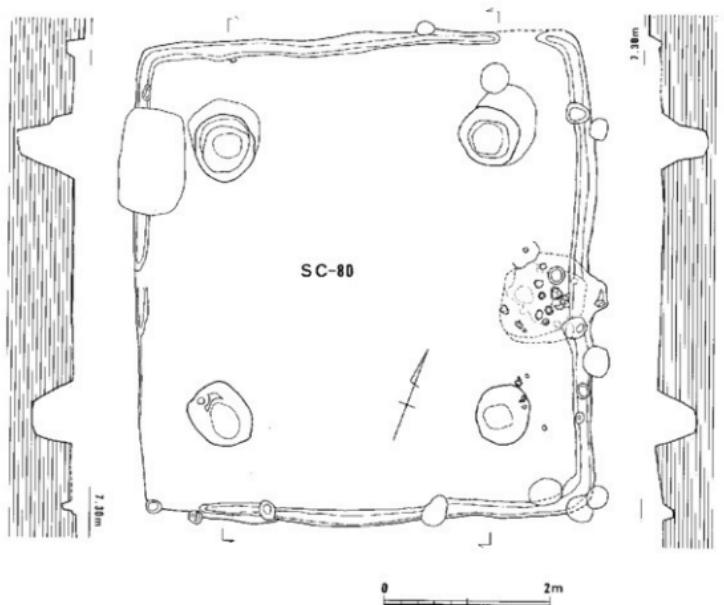


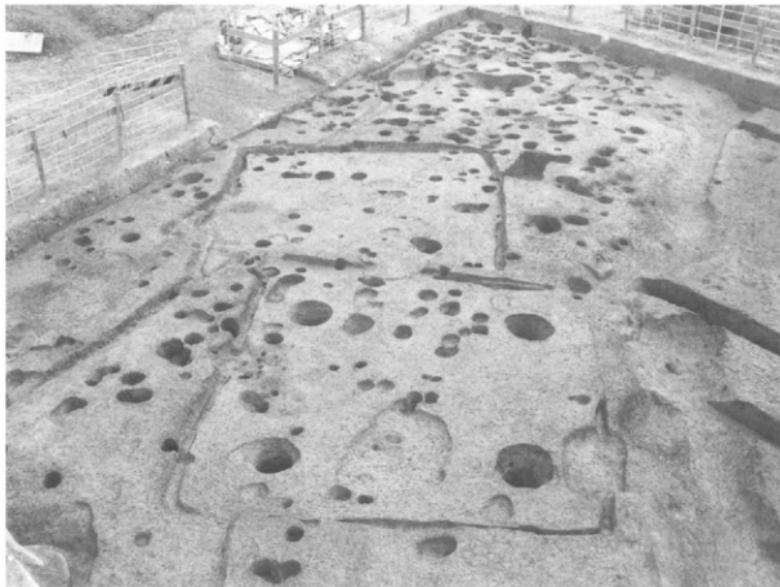
Fig.11 竪穴住居 (SC) - 80, 81 実測図(1/40)

E - 2、F - 2 にて検出された。方形の竪穴住居であり、SC - 8 1 を切る。5.9×5.4mのプランを測り、残存は悪いが北東壁にカマドがみられる。カマド部は床面に対して約20cm深くなつており、被然のため地山が赤色化している。白色の粘土塊がみられた。主柱穴は4本であり、堀方は直径70cm前後と大きく、深さも48~65cmと深い。幅約20cmの周壁溝がまわる。

出土遺物(Fig.12) 8 土師器高坏。坏部は一旦屈曲して外反、屈曲部には段が付く。脚部も下位で一旦屈曲し、屈曲部のやや上方に三ヶ所穿孔あり。坏部内外面かなり精緻なヘラ磨き、脚部は外面に一部ハケ目が残る。口径18.0cm。6世紀後半頃か。9 土師器高坏。中位に不明瞭な段が付く。内外面磨滅顯著だが、外面下位にカキ目が残る。口径15.2cm。10 土師器高坏脚。大きく外反する。内外面磨滅著しく調整不明。底径14.8cm。遺構の時期は6世紀後半頃と思われる。

SC - 8 1 (Fig.11, PL.15)

F - 2、F - 3 にて検出された。方形の竪穴住居であり、SC - 8 0 に切られる。6.0×5.5mのプランであり、北東壁のはば中央部にカマドが付く。SC - 8 0 とは規模、方向、カマドの作り方など酷似しており、住居の造り替えとおもわれる。ただし、残存は良好ではないが、確認できた範囲では埋土の中にブロック状の堆積や地山土がみられないことから、SC - 8 1 の積極的な埋め戻しはおこなわれなかつたと考えられる。切り合いからSC - 8 0 より古いが、プランが酷似することから連続してつくられたと考えられる。



P h. 2 竪穴住居 8 0, 8 1 調査状況

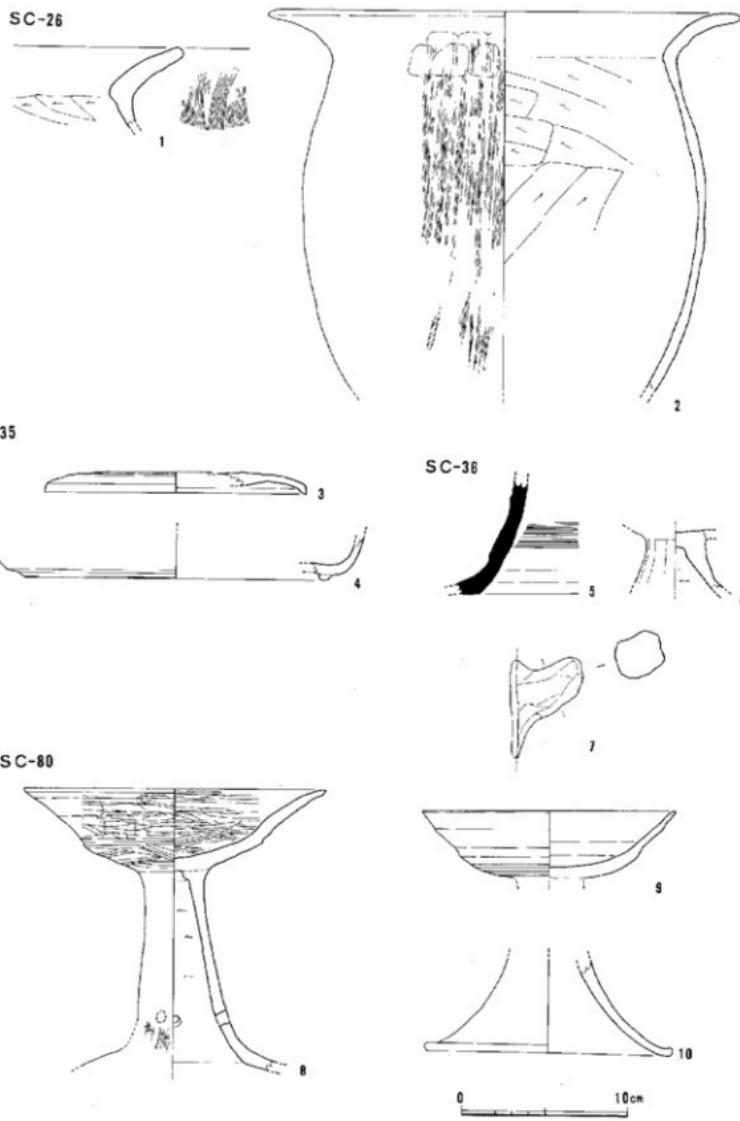


Fig.12 壓穴住居（S C）出土遺物実測図 1 (1/3)

SK-27

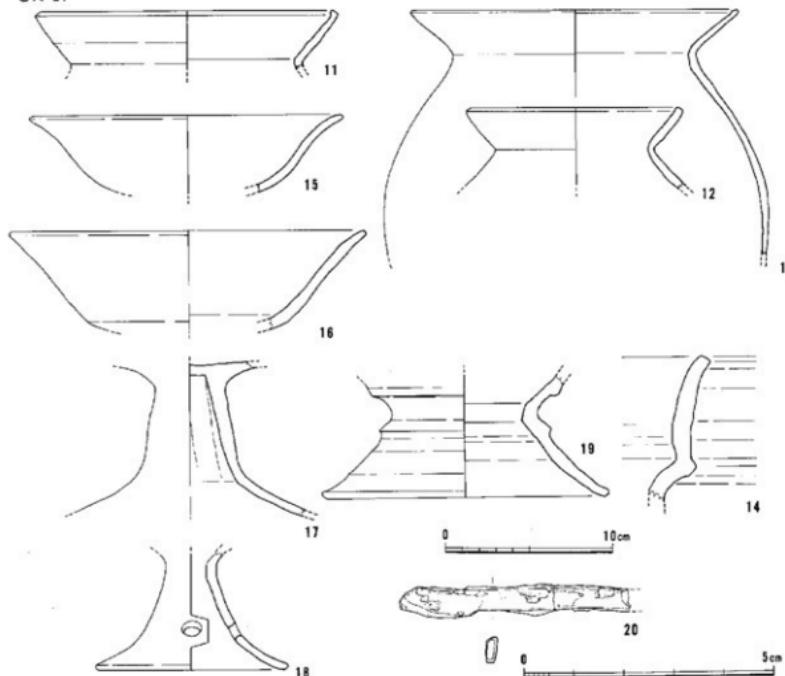


Fig.13 積穴住居 (S C) 出土遺物実測図 2 (1/3, 1/1)

掘立柱建物 (S B)

S B - 0 1 (Fig.14)

G - 2 にて検出された。方位はほぼ磁北にそろ。梁行 2 間 × 柱行 3 間以上であり、調査区北側にのびる。梁行の全長3.3mを測る。柱穴の掘り方は梢円形で、直径30~60cmを測る。建物の内側に S K - 0 7 がちょうど位置するが、S B - 0 1 と S K - 0 7 がセットになる積極的なデータは遺物や層位からは得られなかった。

出土遺物(Fig.18) 21 土師器碗。胎土はかなり白っぽくきめ細かい。口縁は玉縁状に若干肥厚する。口径10.4cm。SP018出土。遺構の時期は中世の範疇に含まれるものと思われる。

S B - 0 2 (Fig.14)

G - 2, G - 3 にて検出された。梁行 2 間 × 柱行 4 間であり、梁行の全長2.4m、柱行全長3.9mを測り、面積約 9 m²である。柱穴の掘り方は梢円形で、直径20~40cmを測る。

出土遺物(Fig.18) 22 土師器小皿。外底部糸切り。口径7.6、器高0.8cm。SP-074出土。23 土師器小皿。底部糸切りか。口径7.8、器高1.2cm。SP-392出土。24 土師器小皿。底部糸切り。口径8.4、器高1.1cm。SP-367出土。25 土師器小皿。底部糸切り。口径8.6、器高1.1cm。SP-350出土。26 土師器小皿。底部

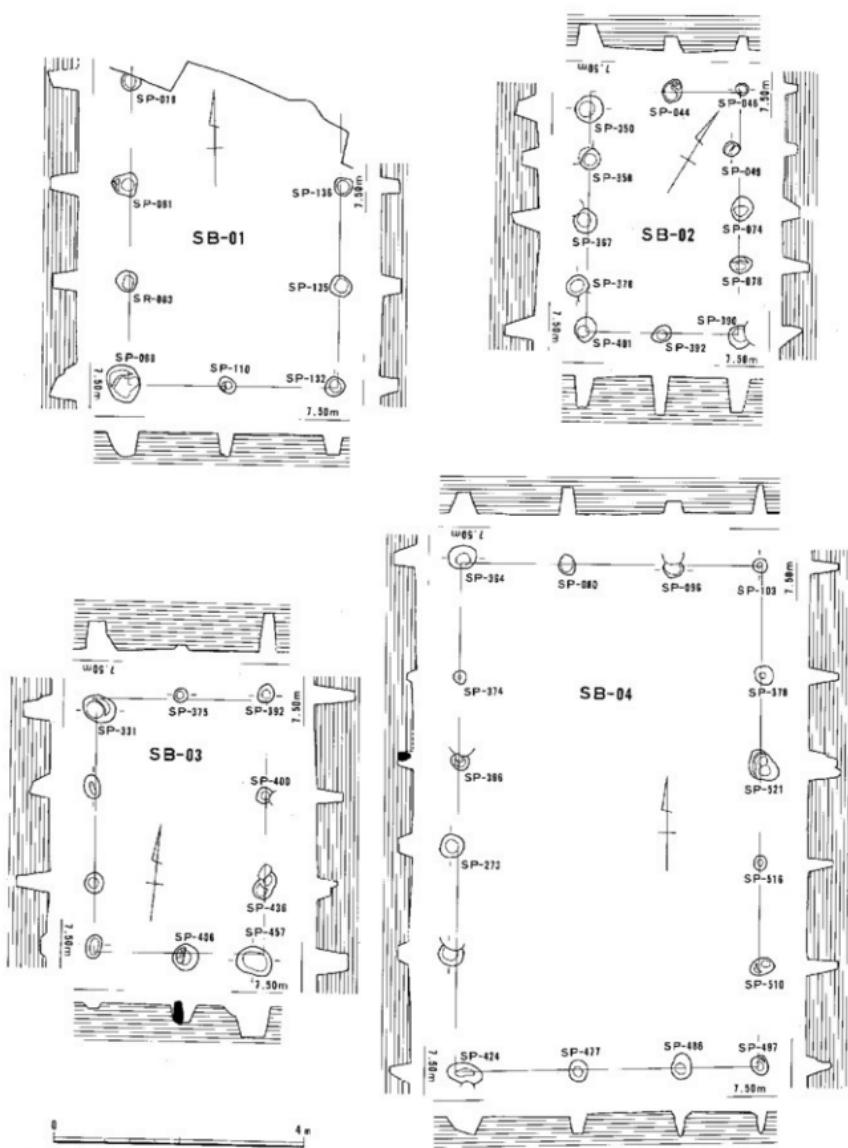


Fig.14 挖立柱建物 (SB) - 01, 02, 03, 04 実測図(1/80)

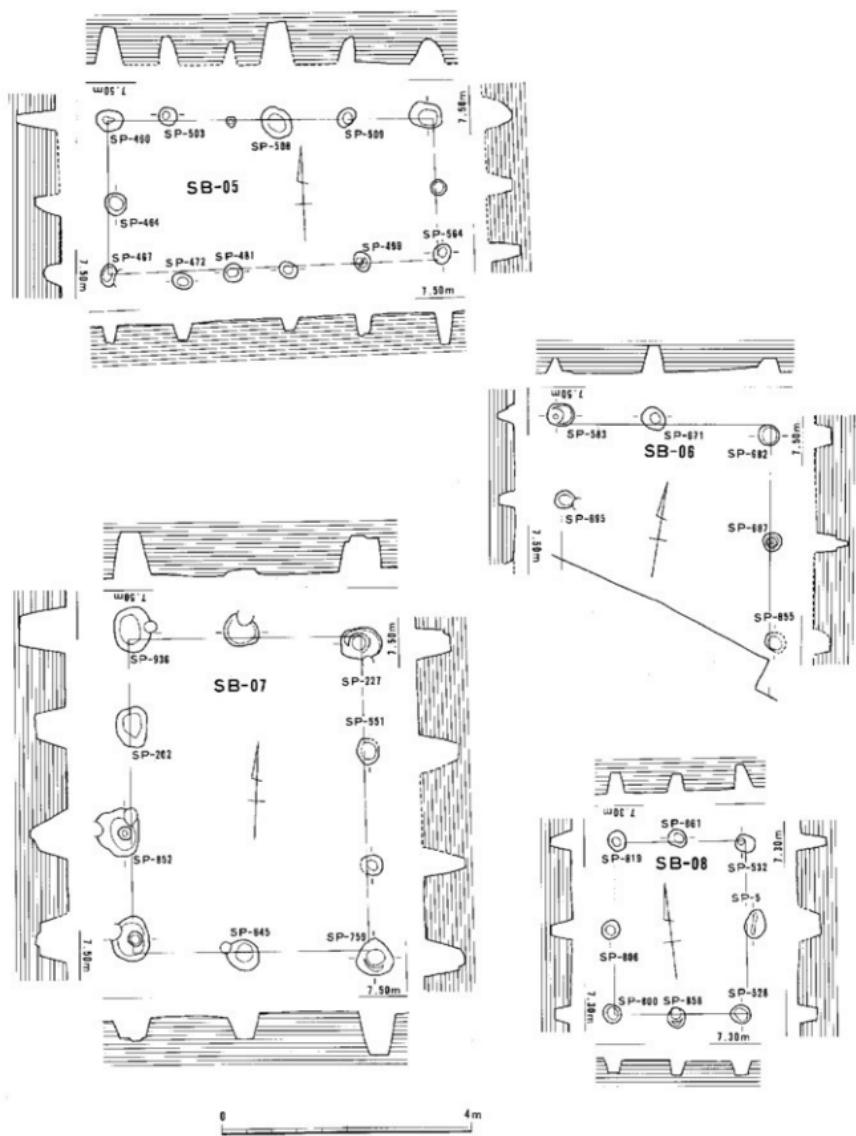


Fig.15 挖立柱建物 (SB) - 0 5, 0 6, 0 7, 0 8 実測図(1/80)

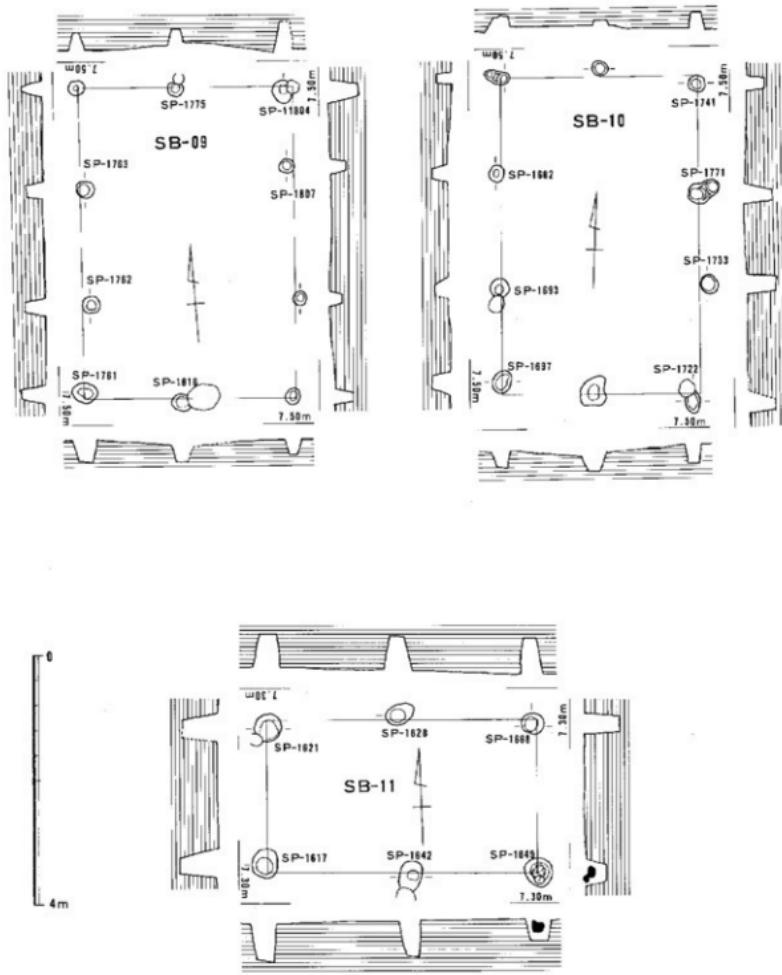


Fig.16 据立柱建物 (S B) - 0 9,1 0,1 1 実測図(1/80)

糸切り。口径9.7、器高1.0cm。SP-392出土。**27** 土師器小皿。底部糸切りか。口径9.2、器高1.0cm。SP-350出土。**28** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.6、器高1.1cm。SP-401出土。**29** 土師器椀。高台径5.2cm。SP-367出土。**30** 瓦器椀。口縁内面に沈線が巡る。内面はかなり精緻なヘラ磨き。畿内系か。SP-401出土。**31** 瓦器椀。内外面の磨きは雑で、特に外面は磨きと磨きの間の空隙が多い。口径18.0cm。SP-350出土。遺構の時期は同安窯系青磁が出上していることから12世紀後半代以降と思われる。

S B - 0 3 (Fig.14)

G - 3 にて検出された。梁行2間×桁行3間であり、梁行の全長2.7m、桁行全長4.1mを測り、面積約11m²である。柱穴の掘り方は梢円形で、直径20~60cmを測る。南側の中央柱穴だけに裏ガメの石がみられた。

出土遺物(Fig.18) **32** 土師器小皿。外底部糸切り。口径9.4、器高1.2cm。SP-331出土。遺構の時期は同安窯系青磁が出上していることから12世紀後半代以降と思われる。

S B - 0 4 (Fig.14)

G - 2、G - 3、H - 3 にて検出された。方位はほぼ磁北にそむく。梁行3間×桁行5間であり、梁行の全長4.9m、桁行全長8.2mを測り、面積約40m²である。柱穴の掘り方は梢円形で、直径20~40cmを測る。西側の一穴にのみ裏ガメの石がみられる。残存深さは10~45cmである。

出土遺物(Fig.18) **33** 土師器小皿。外底部糸切り。口径8.6、器高1.0cm。SP-103出土。**34** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.8、器高1.1cm。SP-521出土。**35** 土師器小皿。底部糸切り。口径8.6、器高1.1cm。SP-521出土。**36** 土師器小皿。底部糸切り。口径9.0、器高1.1cm。SP-378出土。**37** 高台付き土師器小皿。底部糸切りか。口径8.4、器高1.8(皿部1.1)、高台径6.0cm。SP-521出土。**38** 土師器环。底部糸切り。口径15.6、器高2.6cm。SP-273出土。**39** 白磁平底皿VI類。口径10.4、器高2.6、底径4.4cm。SP-273出土。**40** 同安窯系青磁皿。口径11.0cm。SP-521出土。遺構の時期は土師器の法量と、同安窯系青磁が出上していることから13世紀前後から前半代と考えられる。

S B - 0 5 (Fig.15)

G - 3、H - 3 にて検出された。桁行の方位はほぼ磁北に直交する。梁行2間×桁行5間であり、梁行の全長2.3m、桁行全長5.2mを測り、面積約12m²である。柱穴の掘り方は梢円形で、直径20~50cmを測る。残存深さは20~60cmである。

出土遺物 遺構の時期は龍泉窯系青磁、同安窯系青磁が出上していることから12世紀後半代と思われる。

S B - 0 6 (Fig.15)

H - 3、I - 3 にて検出された。梁行2間×桁行2間以上あり、調査区南側にのびる。梁行の全長3.3mを測る。柱穴の掘り方は梢円形で、直径30~40cmを測る。残存深さは20~50cmである。

出土遺物 遺構の時期は同安窯系青磁片が出上していることから遡っても12世紀後半代以降と思われる。

S B - 0 7 (Fig.15)

H - 2、H - 3、I - 2、I - 3 にて検出された。梁行2間×桁行3間であり、梁行の全長3.8m、桁行全長5.0

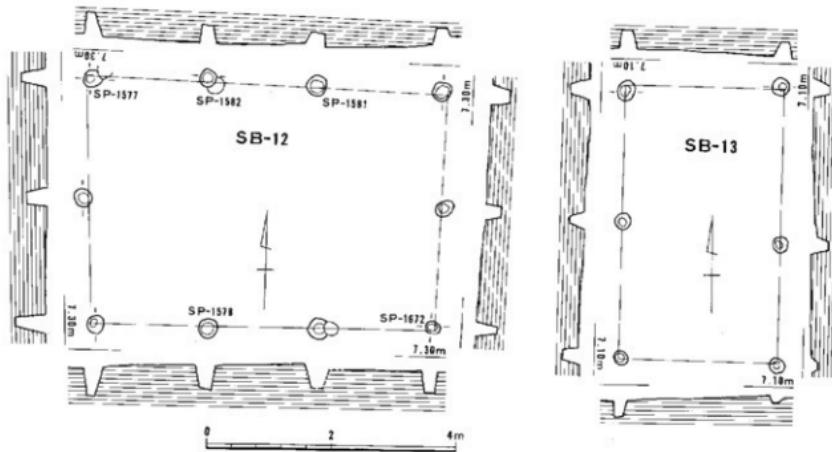


Fig.17 掘立柱建物 (SB) - 12, 13 実測図(1/80)

mを測り、面積約19m²である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径50~60cmを測り、やや大型である。

出土遺物 遺構の時期をきめられる遺物なく、時期不明。

SB-08 (Fig.15)

I-3にて検出された。梁行2間×桁行2間であり、梁行の全長2.1m、桁行全長2.8mを測り、面積約6m²である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30cm前後を測る。

出土遺物 (Fig.18) 41 土師器小皿。口径8.8、器高1.0cm。SP861出土。遺構の時期は中世の範疇に含まれるものと思われる。

SB-09 (Fig.16)

F-3にて検出された。建物の方位はほぼ磁北に向く。梁行2間×桁行3間であり、梁行の全長3.3m、桁行全長5.0mを測り、面積約17m²である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径20~40cmを測る。

出土遺物 遺構の時期は土師器片の出土から中世の範疇に含まれるものと考える。

SB-10 (Fig.16)

E-2, F-2にて検出された。桁行の方位はほぼ磁北にそう。梁行2間×桁行3間であり、梁行の全長3.2m、桁行全長5.1mを測り、面積約16m²である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30~40cmを測る。

出土遺物 遺構の時期は土師器片の出土から中世の範疇に含まれるものと考える。

SB-11 (Fig.16)

E-3にて検出された。建物の方位は磁北に直交する。梁行1間×桁行2間であり、梁行の全長2.5m、桁行全長4.3mを測り、面積約11m²である。柱穴の掘り方は楕円形で、直径30~40cmを測り、南東の一穴だけに裏ガメの石がみられる。

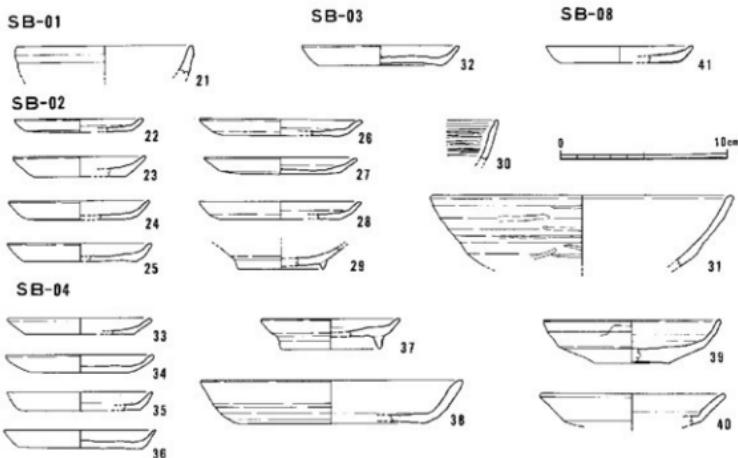


Fig.18 据立柱建物 (SB) 出土遺物実測図 1 (1/3)

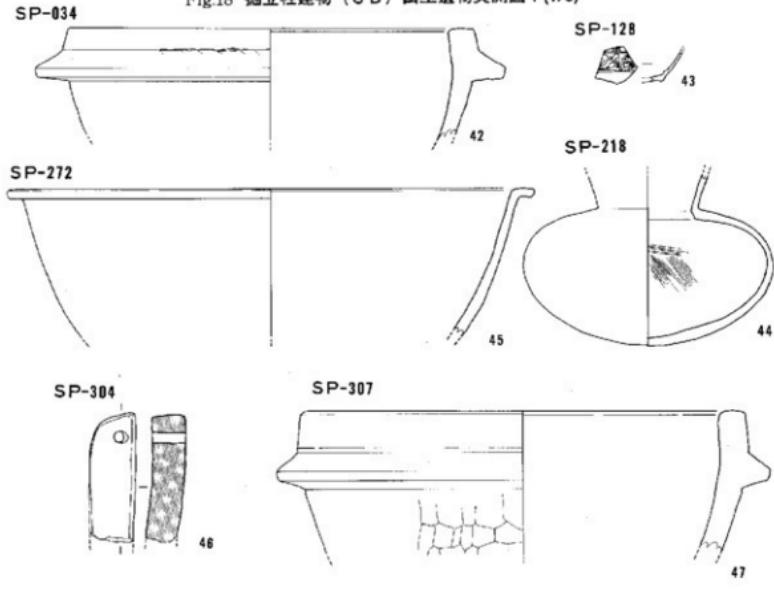


Fig.19 柱穴 (SP) 出土遺物実測図 1 (1/3)

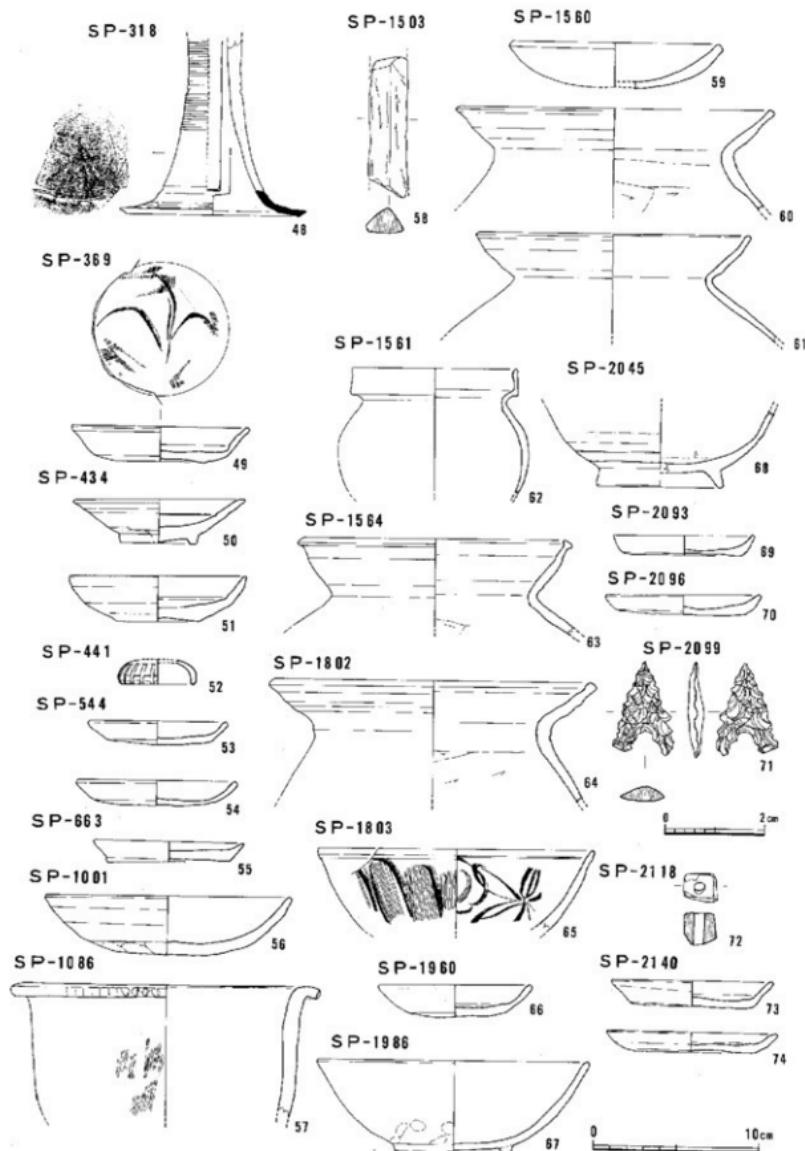


Fig.20 柱穴（SP）出土遺物実測図 2 (1/3, 1/1)

出土遺物 遺構の時期は土師器片の出土から中世の範疇に含まれるものと考える。

S B - 1 2 (Fig.17)

D - 2 , E - 2 にて検出された。建物方位は磁北に直交する。梁行 2 間 × 桁行 3 間であり、梁行の全長3.8m、桁行全長5.8mを測り、面積約22m²である。柱穴の掘り方は梢円形で、直径30cm前後を測る。

出土遺物 遺構の時期を決められる遺物なく、時期不明。

S B - 1 3 (Fig.17)

D - 2 , D - 3 にて検出された。桁行方位は磁北と同じくする梁行 1 間 × 桁行 2 間 梁行の全長2.5m、桁行全長4.4mを測り、面積約11m²である。柱穴の掘り方は梢円形で、直径30cm前後を測る。

出土遺物 遺構の時期を決められる遺物なく、時期不明。

柱穴 (S P) 出土遺物

S P - 0 3 4 (Fig.19)

42 滑石製鍋。外面口縁下に鋸が巡り、鋸から下には煤が付着。口径24.2cm。

S P - 1 2 8 (Fig.19)

43 白磁碗。全体に薄作りで、内面に陽印刻文を施す。口ハゲ腰折れ碗のタイプと思われる。14世紀前半代～中頃か。

S P - 2 1 8 (Fig.19)

44 土師器丸底壺。

S P - 2 7 2 (Fig.19)

45 土鍋。口縁は逆L字状に外折する。外面には煤が付着。口径42.0cm。

S P - 3 0 4 (Fig.19)

46 滑石製品。石鍋の転用品と思われる。端部に一ヶ所穿孔。

S P - 3 0 7 (Fig.19)

47 滑石製鍋。口縁下に鋸が巡り、鋸から下には煤が付着。口径26.4cm。

S P - 3 1 8 (Fig.20)

48 須恵器高环脚。おそらく二ヶ所に長方形の透かしが入る。中位に沈線が二条巡り、その上下にカキ目が入る。下半部にヘラ記号あり。

S P - 3 6 9 (Fig.20)

49 同安窯系青磁皿。外底部は施釉後釉剥ぎする。口径10.6、器高2.1、底径5.3cm。

S P - 4 3 4 (Fig.20)

50 白磁高台付き皿。口径10.2、器高2.7、高台径4.5cm。 51 白磁平底皿VI類。口径10.6、器高2.8、底径4.8cm。

S P - 4 4 1 (Fig.20)

52 青白磁合子蓋。口縁端部から内面は露胎。口径4.4、器高1.5cm。

S P - 5 4 4 (Fig.20)

53 土師器小皿。ヘラ切りか、糸切りか不明。口径8.4、器高1.4cm。 54 土師器小皿。ヘラ切りか。口径9.6、器高1.5cm。

S P - 6 6 3 (Fig.20)

55 土師器小皿。糸切り。口径8.9、器高1.2cm。

S P - 1 0 0 1 (Fig.20)

56 土師器丸底杯。内面磨き、外面押し出し痕あり。口径14.7、器高3.5cm。

S P - 1 0 8 6 (Fig.20)

57 弥生土器甕。口縁外折し、端部に刻み目あり。口径18.4cm。弥生前期。S K - 5 5 付近

S P - 1 0 5 3 (Fig.20)

58 砥石。全面を使用、両端は欠損。石材は粘板岩。

S P - 1 5 6 0 (Fig.20)

59 土師器浅碗。外面は手持ちヘラ削りか。口径12.8、器高2.7cm。 60 土師器甕。口縁はやや内湾気味で端部は平坦。口径19.2cm。 61 土師器甕。口縁は強く屈曲しやや内湾気味に開き、端部は平坦。口径16.6cm。

S P - 1 5 6 1 (Fig.20)

62 上師器二重口縁甕。頭部が強くくびれ、口縁は短く直立する。吉備系か。口径9.9cm。

S P - 1 5 6 4 (Fig.20)

63 土師器甕。口縁はやや内湾気味で端部をつまみ出す。口径16.4cm。

S P - 1 8 0 2 (Fig.20)

64 土師器甕。口縁はやや内湾気味に大きく外に開く。端部をつまみ出しが、稜は不明瞭。口径19.6cm。

S P - 1 8 0 3 (Fig.20)

65 龍泉窯系青磁碗 I類。内面は劃花文、外面は脈入り蓮弁文。口径16.4cm。

S P - 1 9 6 0 (Fig.20)

66 土師器小皿。ヘラ切りか。口径9.1、器高2.0cm。

S P - 1 9 8 6 (Fig.20)

67 瓦器碗。高台は小さく断面三角形。磨減著しく調整は不明瞭であるが、内面は磨き、体外面下部に指痕痕が残る。口径16.2、器高5.6、高台径7.0cm。

S P - 2 0 4 5 (Fig.20)

68 灰釉碗。胎土はかなり白っぽくきめ細か。淡灰白色の不透明釉を薄くかける。内底と体外面下半は露胎。高台径7.6cm。猿投か。

S P - 2 0 9 3 (Fig.20)

69 土師器小皿。糸切りか。口径8.4、器高1.2cm。

S P - 2 0 9 6 (Fig.20)

70 上師器小皿。糸切りか。口径9.4、器高1.2cm。

S P - 2 0 9 9 (Fig.20)

71 石鎚。黒耀石。基部にはV字形に抉りが入る。全面に細かな二次調整を施し、両側辺は鋸歯状になる。小ぶりで長さ18、幅1.3、厚み0.3cm。

S P - 2 1 1 8 (Fig.20)

72 滑石製品。石鍋の転用と思われる。サイコロ状を呈し、中央に穿孔。

S P - 2 1 4 0 (Fig.20)

73 土師器小皿。ヘラ切りか。口径9.7、器高1.5cm。

S P - 2 1 4 0 (Fig.20)

74 上師器小皿。ヘラ切り。口径10.2、器高1.2cm。

土坑・土壤、貯蔵穴（SK）

SK-01 (Fig.21, P L.16)

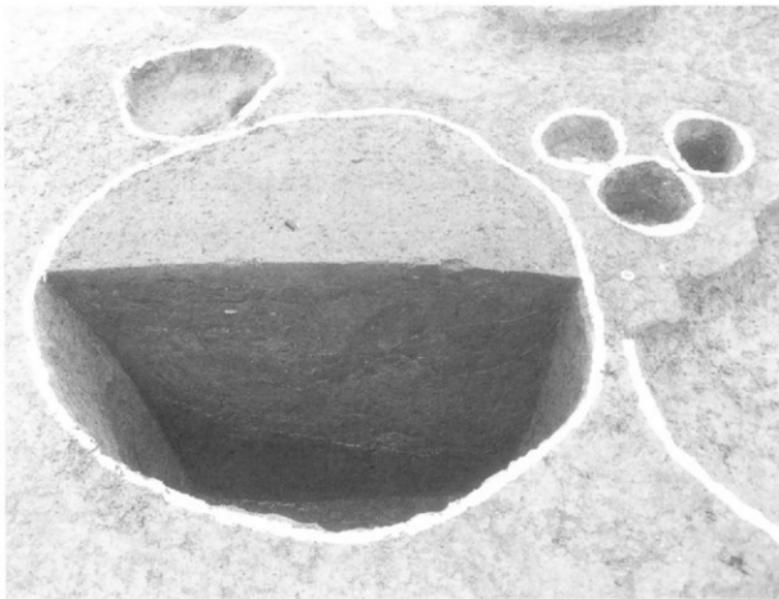
G-2にて検出された。長軸160cm、短軸85cmを測り、平面形は楕円形を呈する。南側が一段深くなっている。遺構の壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰黒色砂質土、灰茶色砂質土であり、底面にこぶし大の礫や土器を廃棄していた。

出土遺物(Fig.22) 75 土師器壺。磨滅著しく調整等不明。口径14.4、器高2.7cm。 76 土師器壺。底部糸切り。口径16.0、器高3.2cm。 77 同安窯系青磁碗。口径15.6、器高6.9、高台径4.8cm。 78 龍泉窯系青磁碗I類。疊付けから高台内に露胎。高台内にハマの痕あり。高台径5.8cm。遺構の時期は土師器壺の法量と龍泉窯系、同安窯系青磁が出土していることから12世紀後半代～13世紀前後と思われる。

SK-02 (Fig.21, P L.16)

G-2にて検出された。直径100cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。遺構の残存深さは約100cmを測り、遺構の壁は垂直に立つ。遺構の底部は八女粘土まで掘られていないことから、降雨時にのみ水が溜まる溜井ではないかと考えられる。

出土遺物(Fig.22) 79 土師器小皿。底部糸切り。口径8.3、器高1.0cm。 80 土師器小皿。底部糸切り。口径8.8、器高1.3cm。 81 土師器壺。底部糸切り。口径13.6、器高3.2cm。 82 龍泉窯系青磁碗I類。口径16.6cm。遺構の時期は土師器の法量と出土陶磁器から13世紀代と考えられる。



P h. 3 潟井02堆積状況

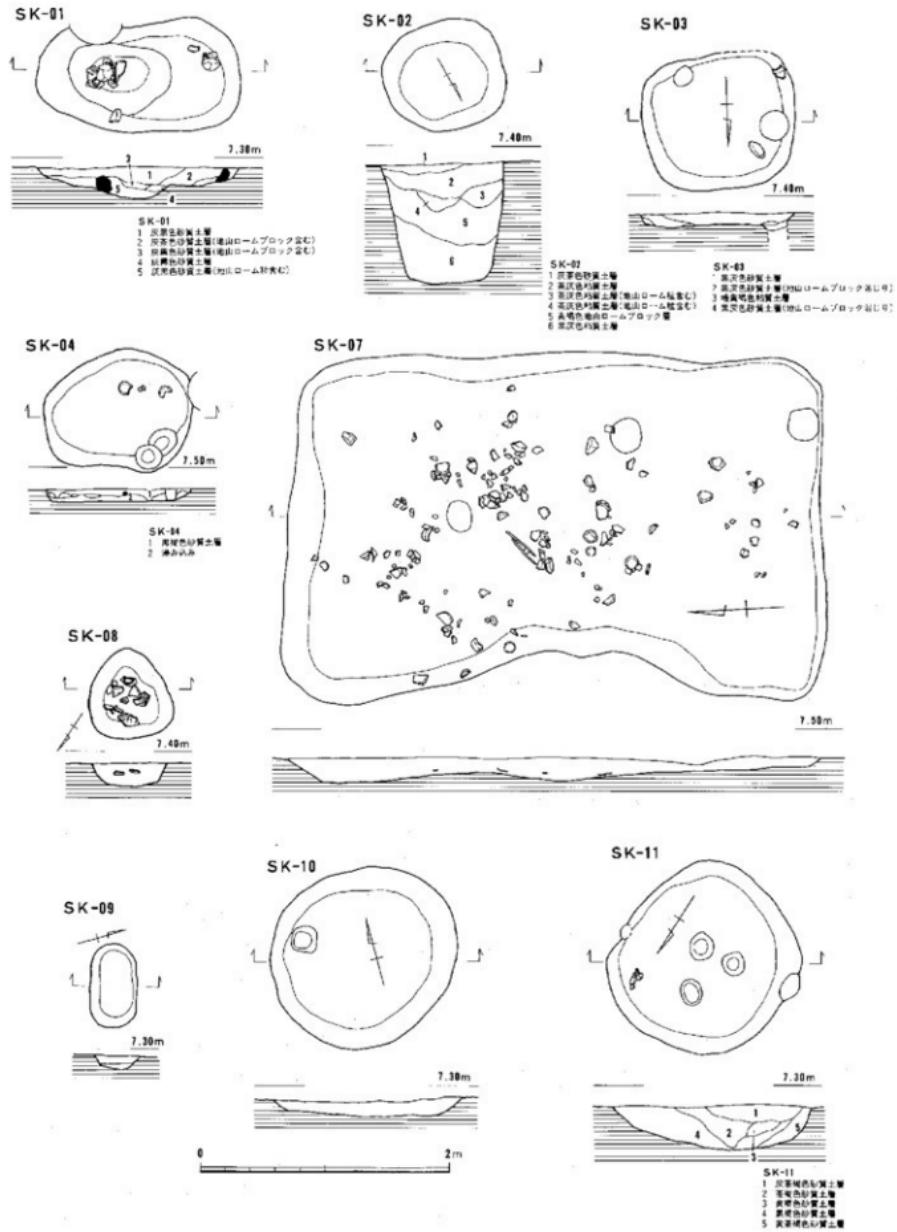


Fig.21 土坑・土壤・貯藏穴 (SK) - 01,02,03,04,07,08,09,10,11 実測図(1/40)

S K - 0 3 (Fig.21、P L.17)

G - 2 にて検出された。長軸120cm、短軸110cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。遺構の深さは約10cmを測り、遺構の壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物(Fig.22) 83 中国産陶器B群長瓶。口縁端部に白泥付着。口径6.0cmを測る。 84 同安窯系青磁碗。遺構の時期は法量の計測できる土師器遺物が少なく不確定だが、同安窯系青磁があることから少なくとも12世紀後半代以降と考えられる。

S K - 0 4 (Fig.21、P L.17)

G - 2 にて検出された。長軸120cm、短軸90cmを測り、平面形は梢円形を呈する。遺構の深さは10cmを測り、遺構の壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物(Fig.22) 85 土師器小皿。底部糸切り。口径8.6、器高1.3cm。 86 土師器小皿。底部糸切り。口径9.0、器高1.1cm。遺構の時期は土師器の出土点数は少ないが、13世紀前半代と考えられる。

S K - 0 6

G - 2 にて検出された弥生時代前期の貯蔵穴である。平面形長方形を呈し、長辺220、短辺180cmを測る。深さは約40cmを測り、遺構の多くは削られている。

出土遺物(Fig.22) 87 弥生土器壺。肩部に沈圈線と羽状文が入る。前期。 88 弥生土器壺。肩部に沈圈線と羽状文が入る。前期。 89 弥生土器壺。肩部に羽状文が入る。前期。

S K - 0 7 (Fig.21、P L.18)

G - 2 にて検出された。長軸430cm、短軸270cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。床面は平坦ではなく、貼床や整地などの状況も上層断面の観察ではみられなかった。掘立柱建物 S B - 0 1 の中におさまるが、いかなる関係であるのか不明である。

出土遺物(Fig.23) 95~114 土師器小皿。底部糸切り。平均法量(25点)口径8.9、器高1.1cm。 115~122 土師器壺。底部糸切り。平均法量(13点)口径14.8、器高3.0cm。 123 白磁碗VI類。口径17.0cm。 124 白磁碗。内面口縁下に沈圈線巡る。口径16.8cm。 125 白磁合子身。かなり白っぽい精良な胎土に、透明釉がかかる。外面は露胎、内面は施釉、釉下には化粧土を施す。型作り。高台径4.8cm。 126 龍泉窯系青磁碗I類。口径16.0cm。 127 龍泉窯系青磁碗I類。疊付けから高台内は露胎。高台径6.2cm。 128 龍泉窯系青磁皿。外底は施釉後釉剥ぎ。口径10.6、器高2.5、底径4.4cm。 129・130 同安窯系青磁碗。129は口径16.0cm、130は16.7cm。 131~133 同安窯系青磁皿。いずれも全面施釉後、外底釉剥ぎ。131は口径11.4、器高2.5、底径4.8cm。132は口径11.0、器高2.2、底径5.6cm。133は口径10.6、器高1.9、底径5.6cm。 134 青白磁合子蓋。天井部外面には陽印刻文を施す。外面と内面天井部に施釉。口径7.8cm。 135 中国産陶器B群長瓶。発色悪く、暗緑灰色の不透明釉が全面にかかる。口径6.2cm。 136・137 鉄製火バシ。二本一対で頭部が頸でつながっていたと思われる。断面は隅丸方形か。長さ30.5cm。遺構の埋没時期は土師器の法量と龍泉窯系青磁II類がないことから、12世紀後半代と思われる。

S K - 0 8 (Fig.21、P L.18.)

H - 2 にて検出された。直径70cmを測り、平面は不定形を呈する。残存深さ20cmを測る。

出土遺物(Fig.22) 90 猛虎質土器鉢。東播系。外底は糸切り、上からナデ調整。内面は使用のためか磨滅する。底径12.0cm。 91 龍泉窯系青磁碗I類。疊付けから高台内は露胎。高台径5.8cm。遺構の時期

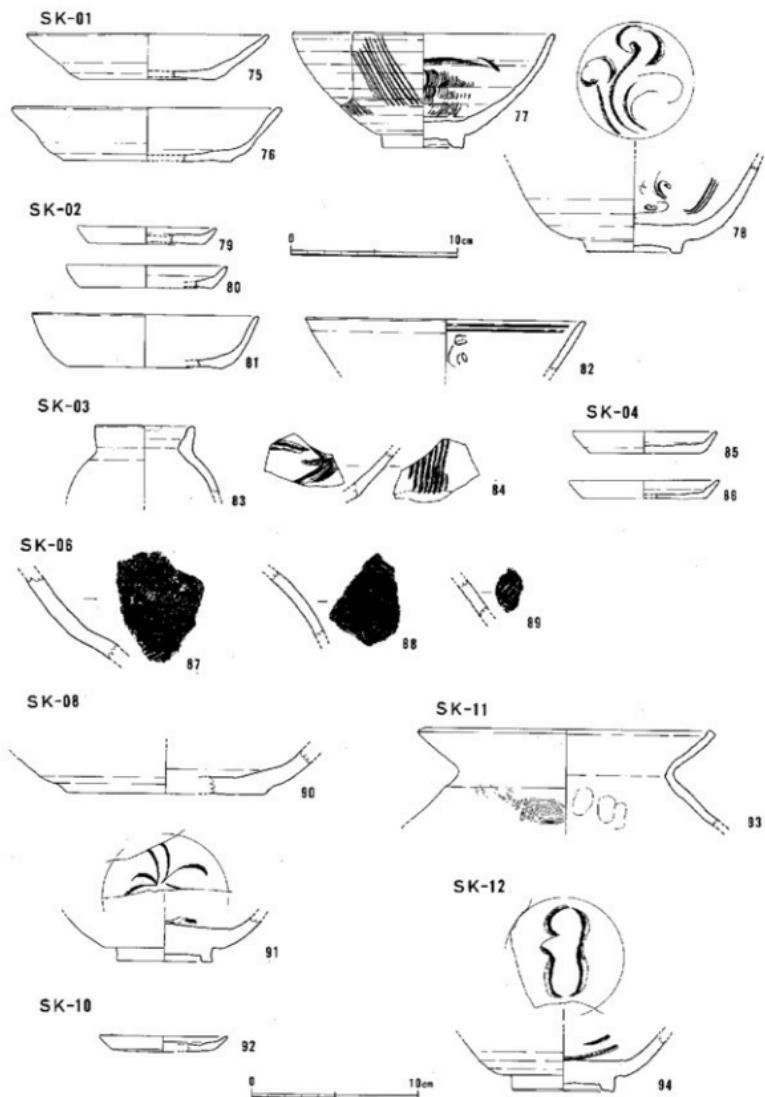


Fig.22 土坑・土壙・貯藏穴（SK）出土遺物実測図1 (1/3)

SK-07

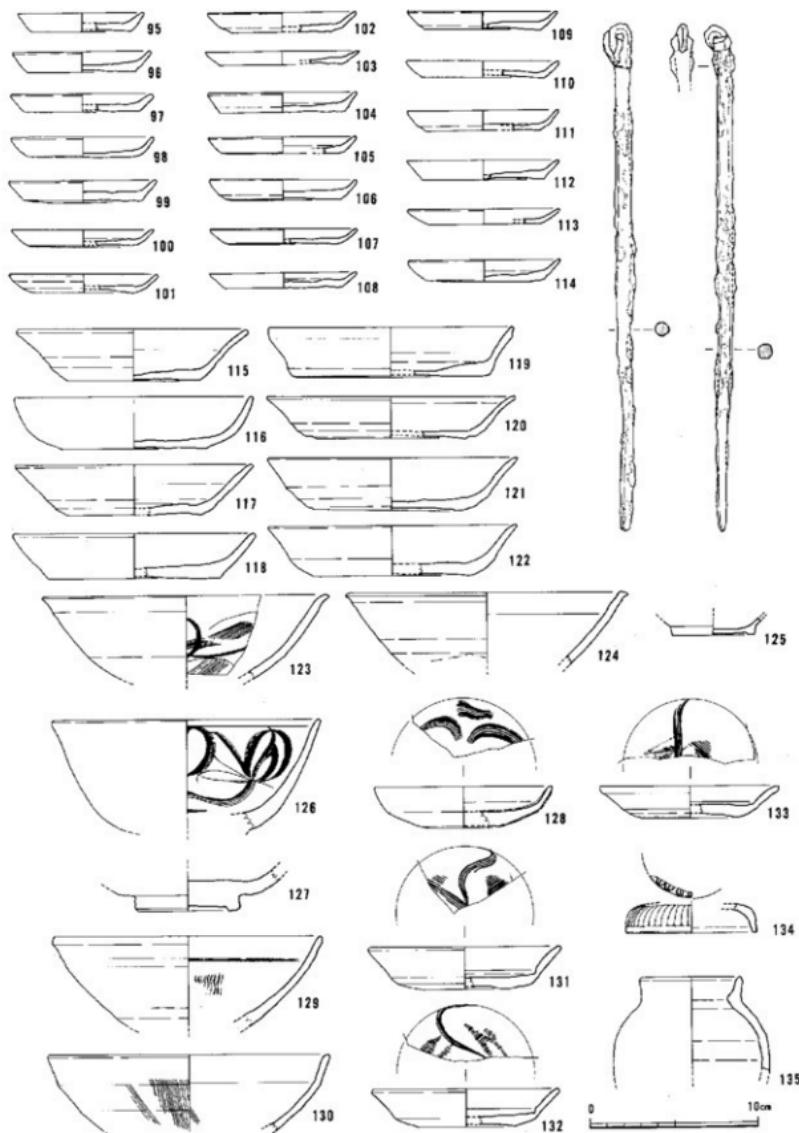


Fig.23 土坑・土壤・貯藏穴（SK）出土遺物実測図 2 (1/3)

は法量の計測できる土師器の出土が少なく不明確だが、龍泉窯系青磁があることから少なくとも12世紀後半以降と思われる。

S K - 0 9 (Fig.21、P L.19)

H - 2 にて検出された。長軸70cm、短軸40cmを測り、平面は長楕円形を呈する。残存深さ15cmを測る。覆土は灰茶褐色砂質土で下位には炭化物粒が多くみられた。炉の可能性も考えられる。

出土遺物 遺物は出土していない。

S K - 1 0 (Fig.21、P L.19)

I - 2 にて検出された。直径150cmを測り、平面は略円形を呈する。残存深さは約15cmを測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.22) 92 土師器小皿。磨滅著しく調整等不明。口径7.6、器高0.9cm。遺構の時期は土師器の出土が少なく不明確だが、同安窯系青磁があることから少なくとも12世紀後半以降と考えられる。

S K - 1 1 (Fig.21、P L.20)

I - 2 にて検出された。直径140cmを測り、平面は不定形を呈する。残存深さは35cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物(Fig.22) 93 上師器壺。口縁端部は若干つまみ出しが稜は不明瞭。体部外側はハケ目、内面はナデ調整、指頭痕残る。口径18.0cm。

S K - 1 2 (Fig.24、P L.20・21)

II - 3、I - 3 にて検出された。長軸190cm、短軸140cmを測り、平面は略台形を呈する。残存深さ15cmを測る。

出土遺物(Fig.22) 94 龍泉窯系青磁碗 I 類。疊付けから高台内は露胎。高台径6.2cm。遺構の時期は出土遺物から、少なくとも12世紀後半以降と考えられる。

S K - 1 3 (Fig.24、P L.21)

F - 2、F - 3、G - 2 にて検出された。長軸170cm、短軸80cmを測り、平面は長楕円形を呈する。残存深さは約25cmで底面はほぼ平坦である。

出土遺物 土師器片のみが数点出土しており、須恵器は混じらない。

S K - 1 6 (Fig.24、P L.22)

G - 3、H - 3 にて検出された。長軸400cm、短軸250cmを測り、平面は不定形を呈する。平面形から複数の遺構が切りあつたものようであるが、明瞭な切り合い関係は不明である。

出土遺物(Fig.25) 138～144 土師器小皿。すべて底部糸切り。口径・器高は順に、8.8-1.3、8.8-0.8、9.4-1.2、9.6-1.2、9.6-1.0、9.7-1.1、9.7-1.0cm。 145 土師器壺。底部糸切り。底径11.0cm。 146 瓦質土器鉢。内面は横方向の丁寧なハケ目調整、下半は使用のため磨滅。外側はハケ目調整施すが、かなり難で指押さえの痕が顕著に残る。口径26.4cm。 147・148 龍泉窯系青磁碗 I 類。口径は147は16.0、148は16.4cm。 149 龍泉窯系青磁皿。口径9.4cm。 150 同安窯系青磁碗。高台径4.6cm。 151～153 同安窯

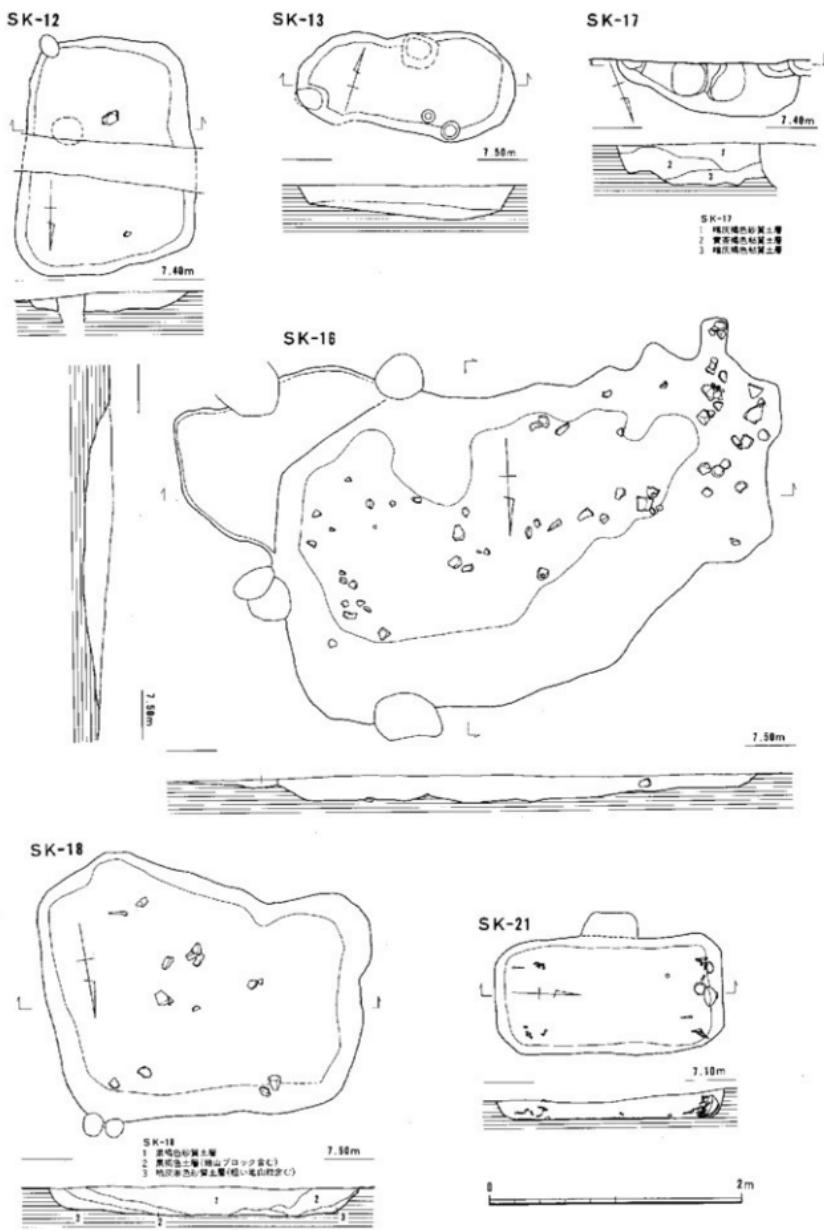


Fig.24 土坑・土蔵・貯藏穴 (SK)-12,13,16,17,18,21 実測図(1/40)

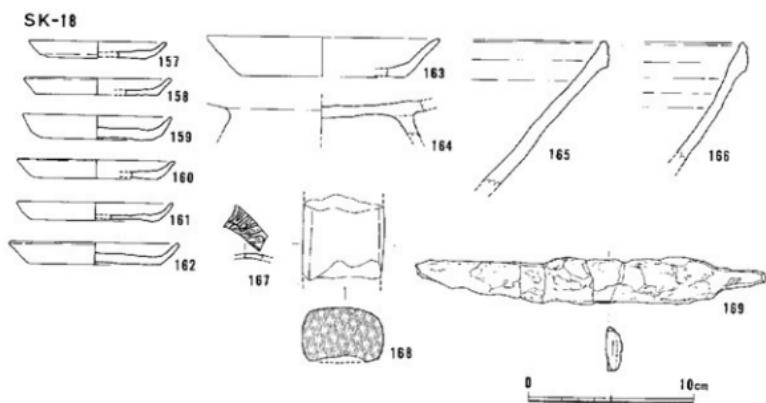
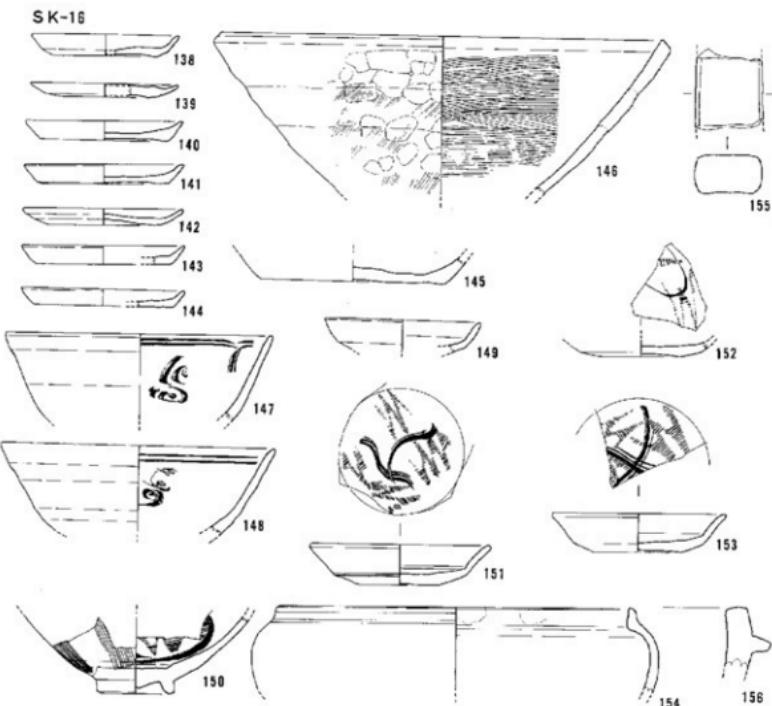


Fig.25 土坑・土壤・貯藏穴（SK）出土遺物実測図 3 (1/3)

系青磁皿。いずれも全面施釉後、外底釉剥ぎ。**151**は口径10.8、器高2.4、底径4.6cm、**152**は底径4.6cm、**153**は口径10.4、器高2.4、底径5.2cm。**154** 中国産陶器B群鉢。やや灰色がかった淡オリーブ色の不透明釉が全面にかかり、口縁内面には目痕が残る。口径21.4cm。**155** 不明土製品。粗砂粒を多く含み、二次的に被熱したと思われる。断面長方形。**156** 滑石製鍋。外面口縁下には鏽が巡り、煤付着。遺構の時期は土師器の法量と、同安・龍泉窯系青磁I類が多く出土、龍泉窯系青磁II類が混じらないことから12世紀後半位と思われる。

S K - 1 8 (Fig.24、P L.22)

H - 3 にて検出された。長軸250cm、短軸180cmを測る、平面は不定形を呈する。残存深さは約20cmを測る。

出土遺物(Fig.25) **157**～**162** 土師器小皿。すべて底部糸切り。法量(口径・器高)は順に、8.2-1.0、8.8-1.0、8.8-1.4、9.4-1.2、9.2-1.1、10.0-1.3cm。**163** 土師器坏。磨滅著しく調整等不明。口径13.8、器高2.4cm。**164** 土師器高台付き坏。磨滅著しく調整等不明。**165**・**166** 須恵質土器鉢。東播系。口縁上方は尖り気味で断面はやや扁平な三角形。**156**は使用のため内面磨滅する。**167** 青白磁合子蓋。外面には陽印刻文あり。内外とも施釉。**168** 不明土製品。粗砂粒を多量含み、二次的に被熱する。SK-16出土の**146**と同じ。**169** 鉄製小刀。長さ20.9、幅2.6cm。遺構の時期は土師器の法量と、同安・龍泉窯系青磁I類が多く出土、龍泉II類ないことから12世紀後半位と思われるが、東播系鉢は時期的に13世紀初頭～前半位のものとも思われる。

S K - 2 1 (Fig.24、P L.21)

I - 3 にて検出された。長軸180cm、短軸95cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。残存深さは約20cmを測り、床面は平坦である。遺構の長軸はほぼ北を向く。木棺墓である。

出土遺物(Fig.27) **170**～**173** 上師器小皿。すべて底部糸切り。法量(口径・器高)は順に、9.2-0.9、9.0-0.9、9.3-1.2、9.0-0.9cm。**174** 同安窯系青磁碗。体部から口縁にかけてはやや内湾気味。高台内の割りはかなり雑。**175** 青銅製品。薄く半球形を呈する。頂部に一ヶ所穿孔あり。側面の穿孔は故意にあけたものか不明。口径3.4、器高2.2、厚さ0.1cm。**176**～**183** 鉄釘。いずれも断面は四角形。**175**は上部に木質が残る。遺構の時期は土師器法量、同安窯系青磁が出土していることから12世紀後半位と思われる。

S K - 2 2 (Fig.26、P L.24)

H - 3 にて検出された。長軸150cmを測り、平面は長円形を呈する。残存深さは約30cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物(Fig.27) **184** 土師器小皿。底部糸切り。**185** 土師器小皿。底部糸切り。**186** 土師器坏。磨滅著しく調整等不明。口径14.2、器高2.1cm。**187** 白磁碗IX類。内底は輪状釉剥ぎ。口径16.8cm。**188** 白磁碗VI類。内底に沈圓線巡る。高台径6.2cm。**189** 龍泉窯系青磁碗I類。**190** 滑石製鍋。口縁両側に縦耳が付く。口径17.0cm。**191** 砕石。表面と片側面の一部を使用。石材は砂岩。遺構の時期は土師器の法量と、同安・龍泉窯系青磁I類が出土していることから12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。

S K - 2 3 (Fig.26、P L.24)

H - 3 にて検出された。調査区の南側にあたり、遺構は調査区外に広がる。遺構残存深さは約10cm

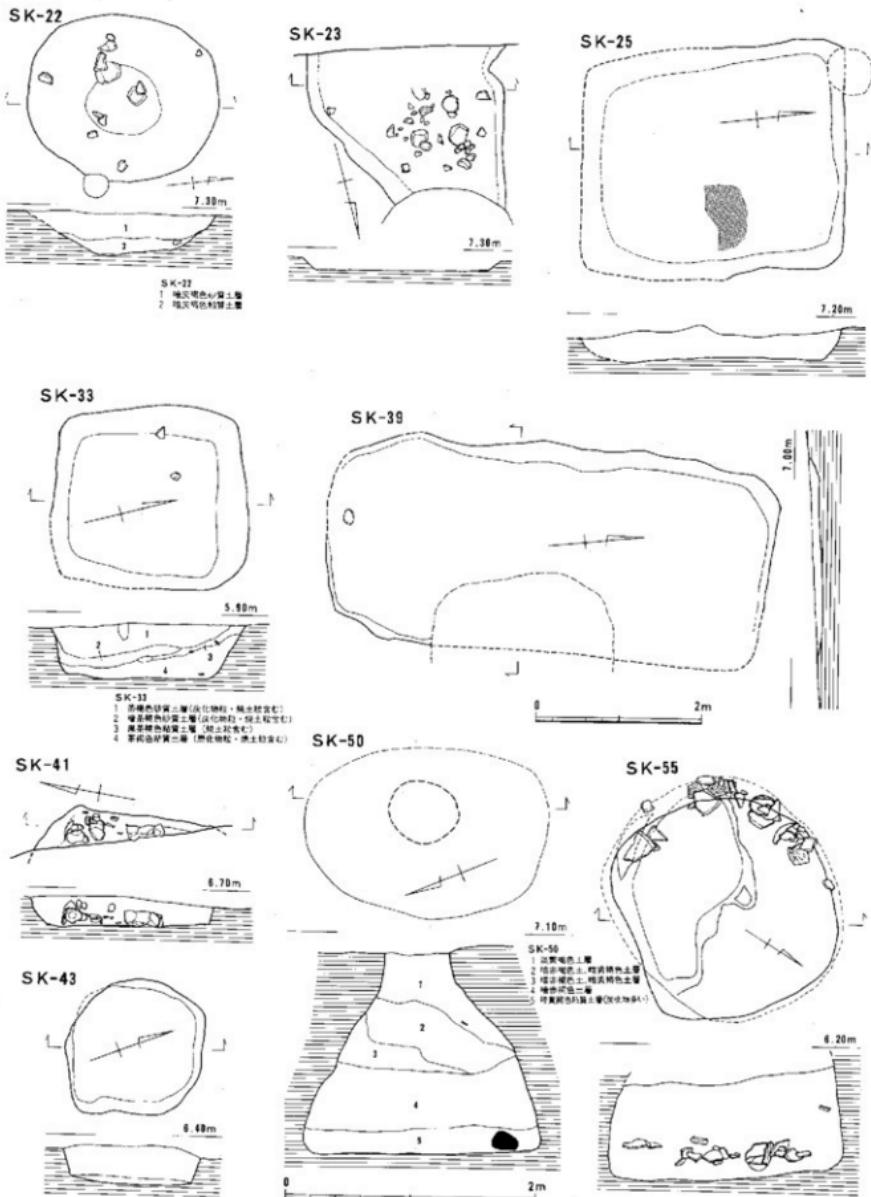


Fig.26 土坑・土壤・貯藏穴 (SK)-22, 23, 25, 33, 37, 41, 43, 50, 55 実測図(1/40)

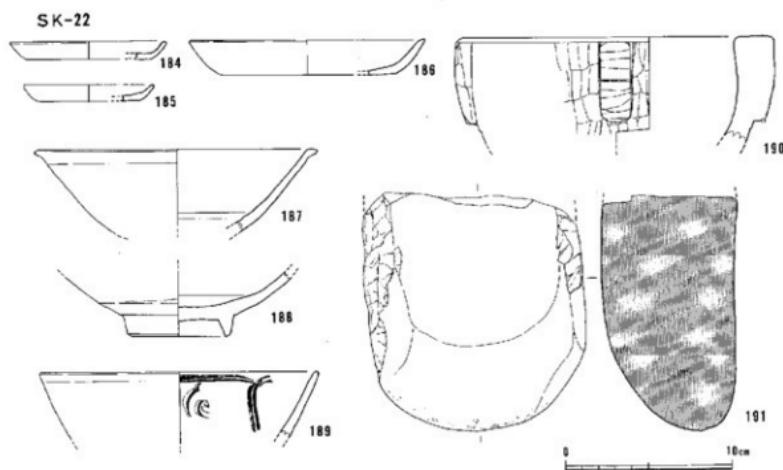
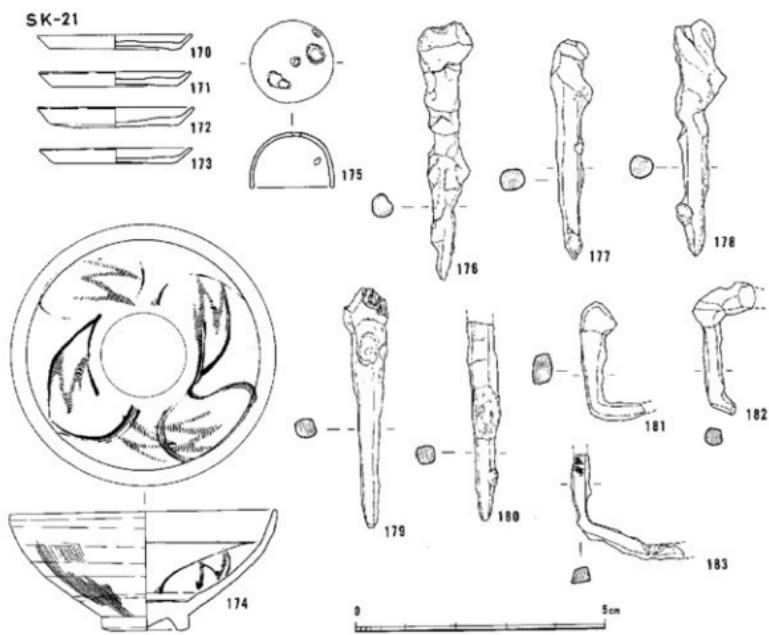


Fig.27 土坑・土壤・貯藏穴（SK）出土遺物実測図 4 (1/3, 1/1)

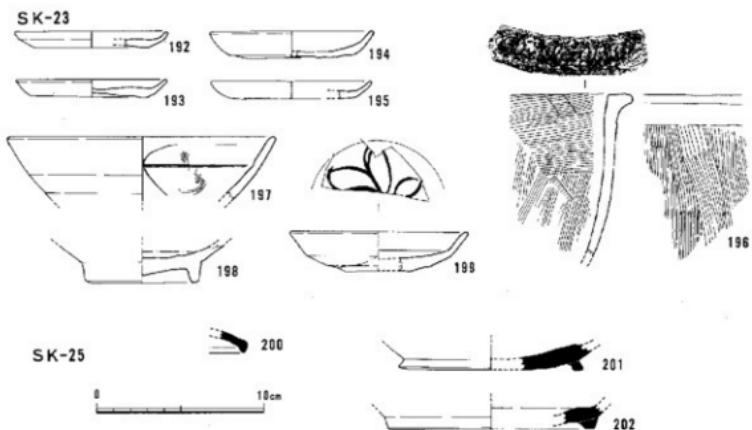


Fig.28 土坑・土壙・貯藏穴 (SK) 出土遺物実測図 5 (1/3)

を測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.28) 192 土師器小皿。底部糸切り。口径9.0、器高1.0cm。193 上師器小皿。底部糸切り。口径9.0、器高1.0cm。194 土師器小皿。底部ヘラ切りか。口径9.8、器高1.6cm。195 土師器小皿。底部糸切りか。口径9.6、器高1.1cm。196 土鍋。口縁は逆L字状に短く外折し、上端面には縄目を押圧する。内外ともハケ目調整。197 白磁碗。口径15.8cm。198 白磁碗IX類。内底を輪状剥ぎする。高台径6.8cm。199 白磁平底皿Ⅲ類。体外面下半は露胎。内底には割文花が施される。口径10.6、器高2.4、底径3.8cm。遺構の時期は土師器の法量と、土鍋、同安・龍泉窯系青磁I類が出土していることから12世紀後半代と思われる。

S K - 2 5 (Fig.28)

I - 2 にて検出された。S C - 2 6 を切る。長軸215cm、短軸190cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。遺構の深さは約20cmを測り、底面は平坦である。底面東側には炭化物が集中する部分がみられた。

出土遺物(Fig.26) 200 須恵器坏蓋。口縁の屈曲は明瞭で断面三角形を呈する。201 須恵器坏身。高台は断面四角形で底部と体部の境に付く。高台径11.0cm。202 須恵器坏身。高台は断面台形で底部と体部の境に付く。高台径12.4cm。切り合いと遺物の出土状態から S C - 2 6 は6世紀後半から7世紀初頭、S K - 2 5 は8世紀後半頃の埋没であろうと考えられる。

S K - 3 3 (Fig.26)

L - 3 にて検出された。長軸155cm、短軸150cmを測り、平面は略方形を呈する。底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.29) 203 土師器坏蓋。扁平なつまみが付く。天井部外面は回転ヘラ削りか。204 須恵器坏蓋。かなり扁平、口縁の屈曲は強く断面三角形を呈する。天井部外面は回転ヘラ削り。口径14.0cm。205 須恵器坏身。高台は断面四角形で体部と底部の境に付く。高台径7.2cm。206 土師器堷。

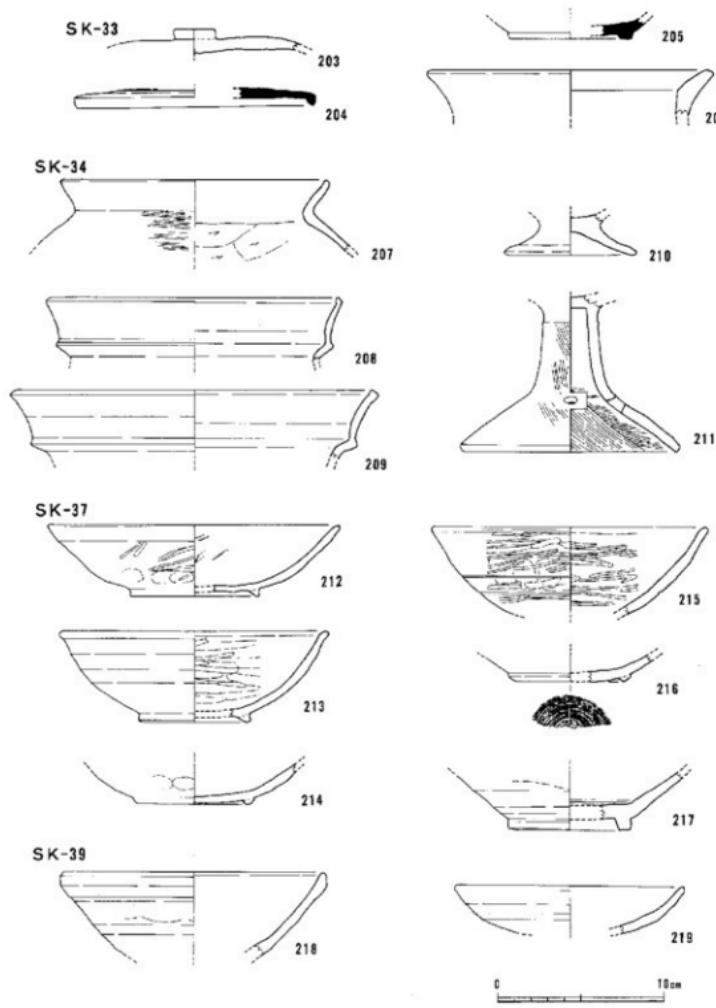


Fig.29 土坑・土壤・貯藏穴（SK）出土遺物実測図 6 (1/3)

口縁は短くやや外反、屈曲部内面の稜は明瞭。口径17.0cm。遺構の時は8世紀代後半と思われる。

S K - 34

J - 2, K - 2にて確認された土坑である。谷の落ち際の包含層上にあり明確なプランは不明である。

出土遺物(Fig.29) 207 土師器壺。口径15.6cm。208 土師器二重口縁壺。口縁端部をつまみ出す。口径17.6cm。209 土師器二重口縁壺。口縁端部を若干つまみ出す。口径22.0cm。210 土師器高壺か台付き壺。底径7.8cm。211 土師器高壺脚。下位で一旦屈曲し大きく開く。屈曲部に二ヶ所穿孔あり。内外ハケ目調整。底径13.0cm。遺構の時期は古墳時代初頭と思われる。

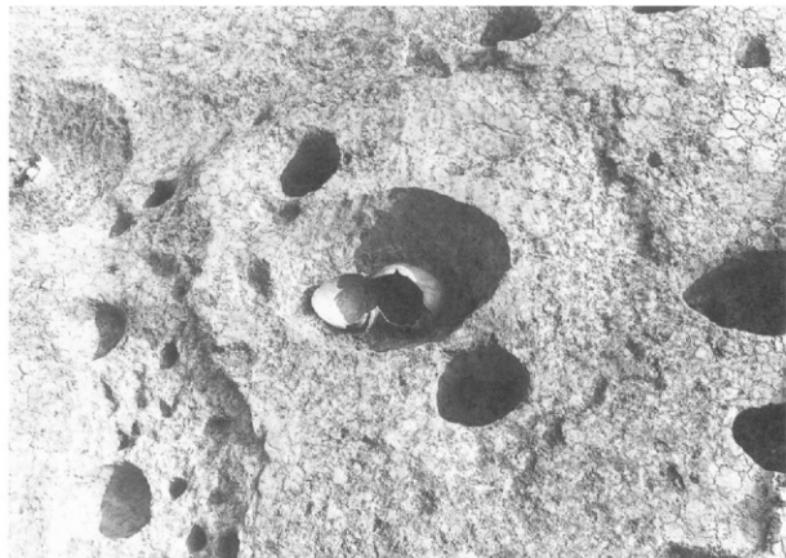
S K - 37

J - 2, K - 2にて確認された土坑である。谷の落ち際の遺物包含層上にあり明確な規模や性格は不明である。

出土遺物(Fig.29) 212~216 瓦器椀。高台は小さく断面略台形を呈す。内外ヘラ磨き施すが雜で、磨きと磨きの間の隙間が多く、外面に指押さえの痕が残るものもある。外底はヘラ切り。212は内面にコテあての痕が残る。口径17.4、器高4.3、高台径7.7cm。213は口径16.0、器高5.5、高台径6.6cm。214は高台径6.8cm。215は口径16.4cm。216は高台径6.4cm。外底にヘラ記号が認められる。217 白磁碗Ⅸ類。内底を輪状釉剥ぎする。高台径7.2cm。遺構の時期は白磁碗と瓦器の形態から12世紀中頃~後半代と思われる。

S K - 39 (Fig.26)

J - 2, J - 3にて検出された。長軸355cm、短軸170cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。



P h. 4 合せ口壺棺 4-4 検出状況

出土遺物(Fig.29) 218 白磁続IV類。口径15.8cm。 219 士師器丸底坏か。外底は糸切りで、板状痕が残る。押し出しの痕は認められず、内面の調整もヘラ磨きと思われるが不明瞭。口径13.6cm。遺構の時期は龍泉窯系青磁II類が出土していることから13世紀前後以降と思われる。

S K - 4 1 (Fig.26, P L.25)

J - 3 にて検出された。搅乱に大きく切られプラン、規模は不明である。底面は平坦であり、遺構のコーナとおもわれる部分がみられプランは長方形であったかと思われる。

出土遺物(Fig.31) 221 壺。胎土は暗茶褐色～黒褐色で白色砂粒多量含む。胴部は丸味をおび、口縁は短く外反。口縁端部外面に刻み目を施す。外面はハケ目調整。内面は剥落著しく調整不明。口径19.2、器高24.8、底径7.0cm。 222 弥生土器壺。胎土は224と同じ。外底中央は粘土盤接合のためか若干凹む。底径8.8cm。遺構の時期は弥生時代前期である。

S K - 4 3 (Fig.26)

K - 3 にて検出された。一辺105cmを測り、平面は略方形を呈する。残存深さは約30cmを測り、床面はほぼ平坦である。遺構の壁は直線的に立ち上がり、一部はえぐれる。貯蔵穴と思われる。

出土遺物(Fig.31) 223 壺。底径8.4cm。遺構の時期は出土遺物が少ないが弥生前期と考えられる。

S K - 4 4

H - 2 で検出された小児用の合せ口壺棺である。直径約2m、幅20～40cmの溝が円形に巡り、その中央部に片方の壺口縁を打ち欠き、2個体を合わせ口にして壺棺としている。溝は出土遺物もほぼ同時期のS D - 4 6と一部接しながらつられており、付設するようにつくられたと考える。壺の方向は東西方向を向いており上壺は東を向く。調査時での傾斜角度は13°である。

出土遺物(Fig.31) 224 上壺。土師器壺。口縁を打ち欠いているが、下壺と同じ二重口縁壺であったと思われる。長胴であるが胴部最大径はやや上位にある。外面はかなり細かなハケ目調整を施すが、器面剥落が著しく不明瞭。内面は手持ちヘラ削り、下半部は指押さえの痕が顯著。器高27.7cm。 225 下壺。二重口縁壺。口縁端部は外面につまみ出し、断面三角形に小さく肥厚する。上壺と同じく、長胴であるが胴部最大径はやや上位にありなで肩。外面はハケ目調整施すが、器面剥落著しく不明瞭。肩部に波状文あり。頸部と底部に指押さえの痕顯著に残る。口径24.4、器高37.0cm。

S K - 5 0 (Fig.26)

J - 1 にて検出された。上面の入り口部は直径約50cmを測り、底面は長軸195cm、短軸135cmを測る。断面形はフラスコ形を呈する。底面はほぼ平坦であり、平面は椭円形を呈する。貯蔵穴である。

出土遺物(Fig.30) 220 鉢。外而横方向の細かなヘラ磨き調整。底径12.8cm。弥生時代前期である。

S K - 5 5 (Fig.26, P L.25)

J - 2 にて検出された。底面の長軸は200cm、短軸170cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。床面に遺物がみられた。貯蔵穴である。

出土遺物(Fig.32) 231 鉢。胎土は赤褐色～暗褐色、粗砂粒を多量含む。底部から大きく外に開き、口縁は短く外反する。内外面全面に横方向のかなり精緻なヘラ磨きを施すが、内面口縁付近には指押さえの痕が残る。外底はヘラ状工具によるナデ調整。口径42.6、器高23.2、底径13.0cm。 232 鉢と思わ

SK-50

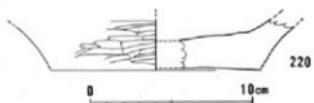


Fig.30 土坑・土壤・貯蔵穴（SK）出土遺物実測図 7 (1/3)

れる。胎土は赤褐色、白色粗砂粒を多量含む。外面は底部近くはハケ目調整、上からヘラ磨き。内面はナデ調整。外底はヘラ状工具によるナデ調整。底径10.8cm。233 壺。胎土は黄褐色、白色粗砂粒を多量含む。肩部に細い沈線が二条巡る。外面は磨き調整と思われるが、磨減著しく不明瞭。234 壺。胎土は暗赤褐色、粗砂粒を多量含む。口縁はやや外反し外面端部には刻み目が入る。外底は粘土盤接合によりかすかに凹む。外面は縱方向のハケ目調整、内面には焦げが付着。口径23.9、器高22.4、底径9.2cm。235 壺。胎土は赤褐色、粗砂粒を多量含む。磨減著しく不明瞭であるが、内外に磨き痕が若干残る。口径24.4cm。236 壺。胎土は淡黄白色、粗砂粒を多量含む。口縁は大きく外反し外面端部に刻み目を施す。外面はハケ目調整。口径17.6cm。237 壺。胎土は暗褐色～黒褐色、粗砂粒を多量含む。外面はハケ目調整。外底は粘土盤接合により若干凹版。底径7.0cm。238 土製紡錘車。直径3.8、厚さ1.1cm、中央に径0.5cmの穿孔。239 打製石器。縁辺に粗い打削調整を加える。長さ8.3cm、幅8.0、厚み3.2cm。弥生時代前期である。



P h. 5 貯蔵穴 5 5 調査状況

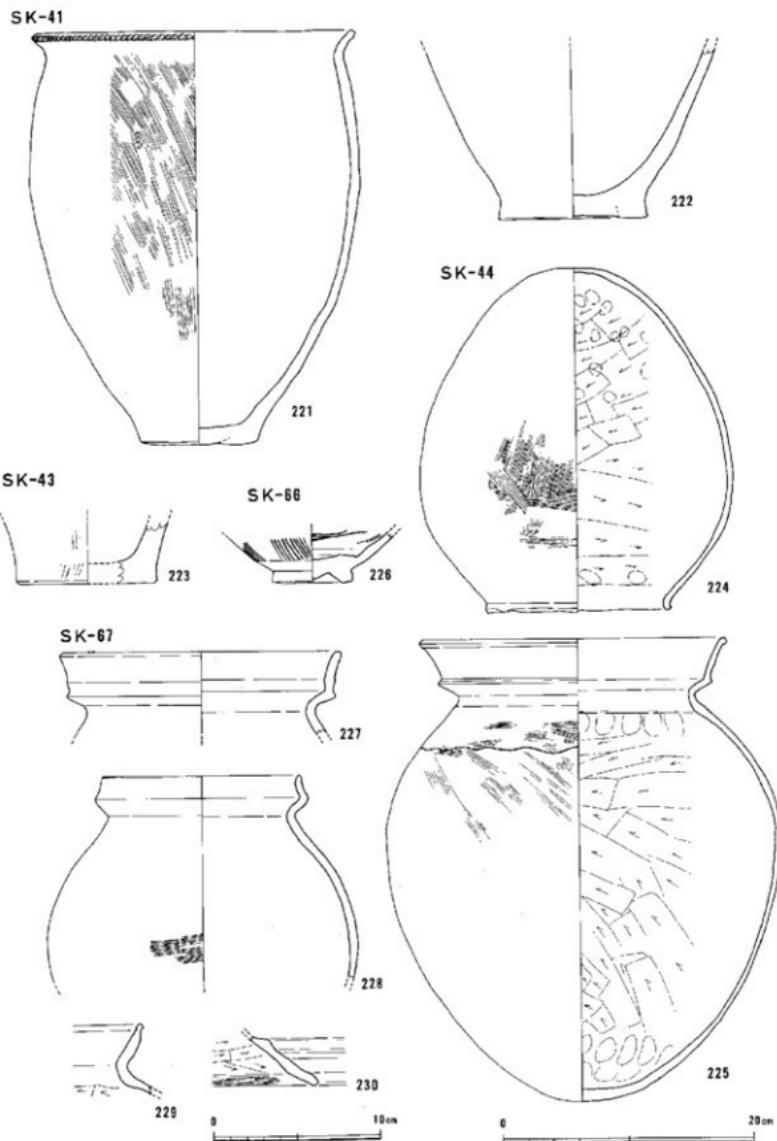


Fig.31 土坑・土壤・貯蔵穴（SK）出土遺物実測図 8 (1/3)

SK-55

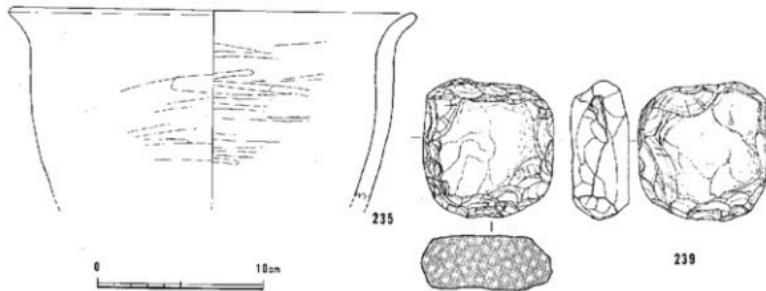
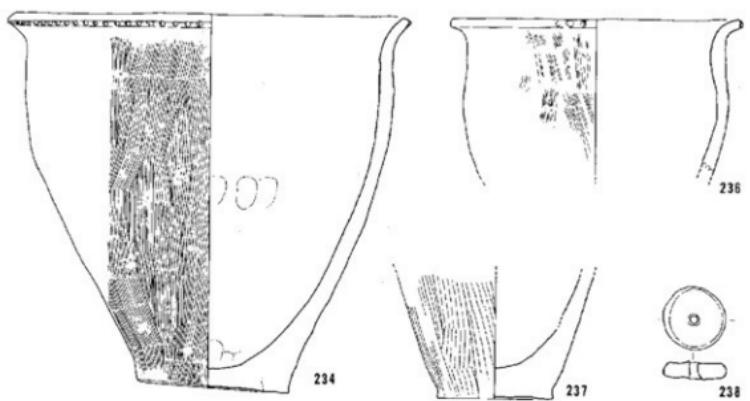
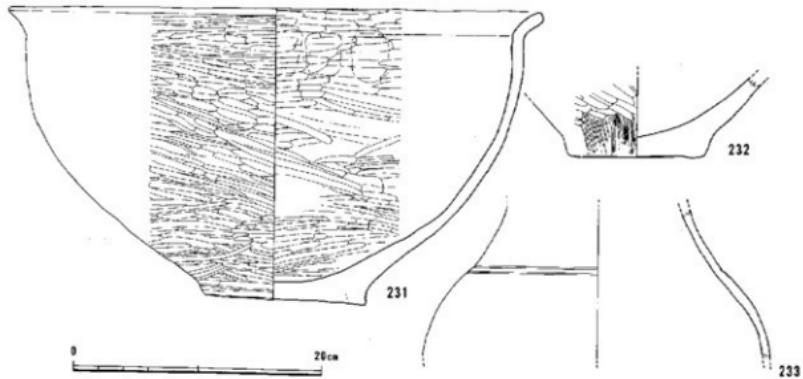


Fig.32 土坑・土壤・貯藏穴（SK）出土遺物実測図 9 (1/3)

S K - 6 6 (Fig.33)

D - 3 にて検出された。長軸130cmを測り、平面は不定形を呈する。柱穴の切り合いかとも思われるが、明瞭な切り合いかみられなかった。

出土遺物(Fig.31) 226 同安窯系青磁碗。高台径4.8cm。遺構の時期は出土遺物が少なく不確定だが、12世紀後半以降と思われる。

S K - 6 7 (Fig.33)

D - 3 にて検出された。調査区の南端あたり、遺構はさらに南側に広がる。残存深さは約10cmであり、東側にむけて高くなる。

出土遺物(Fig.31) 227 土師器二重口縁壺。口縁端部は丸くおさまる。磨滅著しく調整不明。口径16.8cm。 228 土師器二重口縁壺。頸部の屈曲強く、口縁は短く内傾する。磨滅著しく調整は不明瞭だが、外向一部かなり細かなハケ目調整が認められる。口径11.8cm。 229 土師器壺。 230 土師器鼓形器台。内面は手持ちヘラ削り、下位は横方向のハケ目調整。遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

S K - 6 8 (Fig.33)

D - 3 にて検出された。長軸140cm、短軸60cmを測り、平面は長楕円形を呈する。深さは約15cmを測る。

出土遺物 土師器小皿片、青磁片が出土している。

S K - 6 9 (Fig.33、P L.26)

D - 3、D - 4、E - 3、E - 4 にて検出された。長軸195cm、短軸190cmを測り、平面は隅丸方形を呈する。残存深さは約30cmを測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.34) 240 上師器小皿。底部糸切りか。口径8.4、器高10cm。 241 土師器小皿。外底部糸切りか。口径8.8、器高1.0cm。 242 土師器小皿。底部糸切り。口径9.6、器高1.3cm。 243 土師器壺。底部糸切り。口径12.6、器高2.2cm。 244 瓦器椀。高台小さく断面三角形を呈する。内外磨き調整。高台径7.0cm。 245 上鍋。口縁は逆L字状に外折し、上端面は繩目を押す。内面はハケ目調整。 246 滑石製鍋。縦耳が口縁端部に付く。欠損品を再加工しようとしたのか、破面に溝が二条入る。遺構の時期は土師器の法量と、土鍋、同安、龍泉窯系青磁I類があることから12世紀後半代～13世紀代と思われる。

S K - 7 1 (Fig.33)

D - 3、E - 3 にて検出された。長軸385cm、短軸200cmを測り、平面は隅丸長方形を呈し、長軸は磁北に向く。残存深さは10cmを測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物(Fig.34) 247 須恵器ははう。外面下部は回転ヘラ削り、上から胴部最大径を挟んで上下にカキ目を入れる。外面底部下に一条沈線が巡る。 248 須恵器壺。口縁端部は上下に拡張する。外面口縁下には突帯が巡り、その下には波状文を施す。

S K - 7 2 (Fig.33)

E - 3 にて検出された。長軸460cmを測り、平面は不定形を呈する。底面には凹凸がみられる。

出土遺物(Fig.34) 249 須恵器脚付き椀。脚は披状に開き、体部は真っ直ぐ上にのびる。体部下位は回転ヘラ削り、体部中位の二条の沈線を挟んで上下にカキ目を施す。

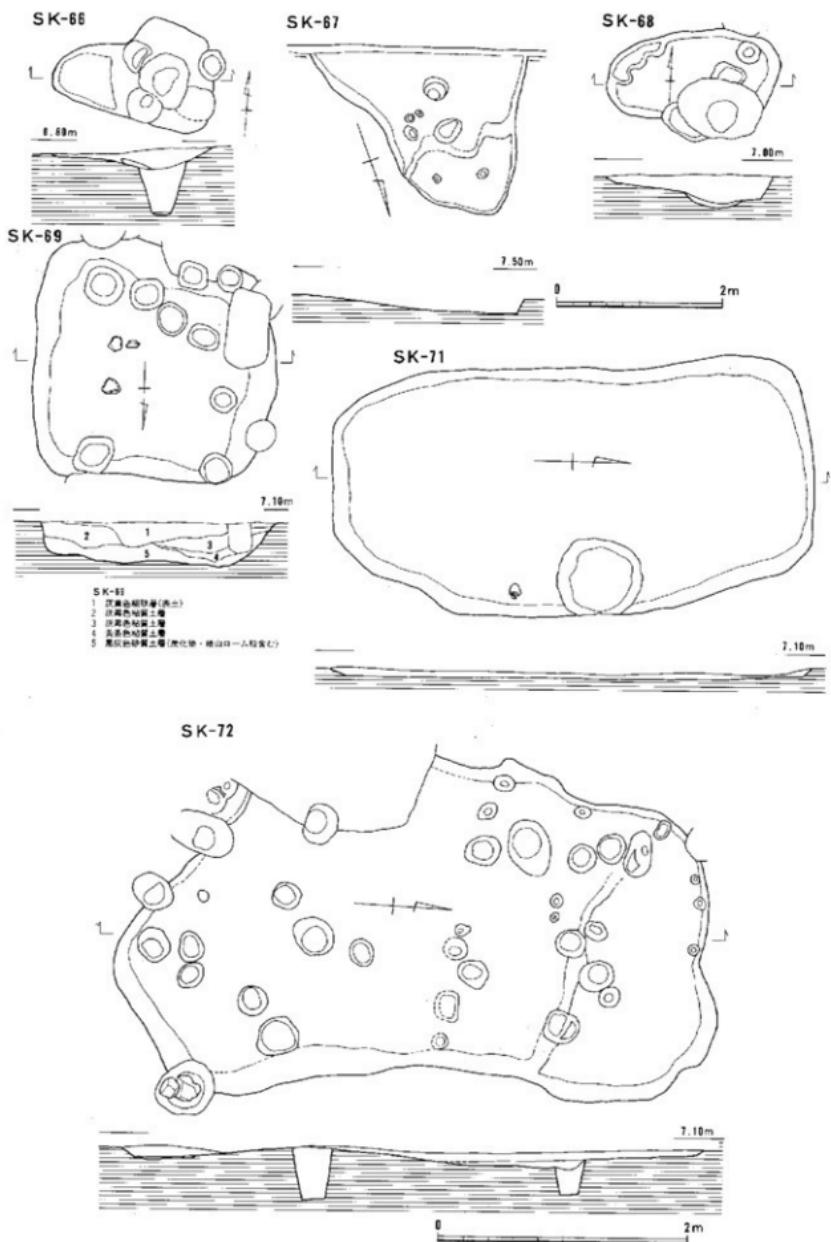


Fig.33 土坑・土壙・貯藏穴 (SK) - 6 6, 6 7, 6 8, 6 9, 7 1, 7 2 実測図(1/40)

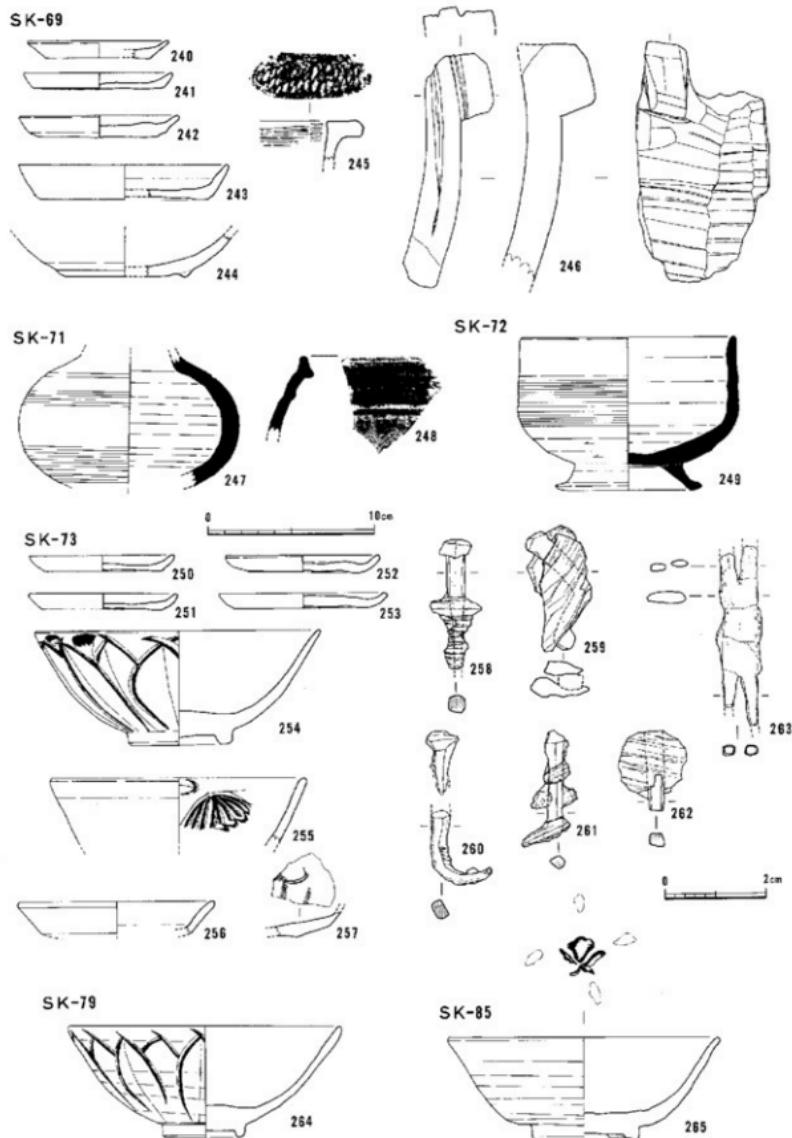


Fig.34 土坑・土壤・貯藏穴（SK）出土遺物実測図10(1/3、1/1)

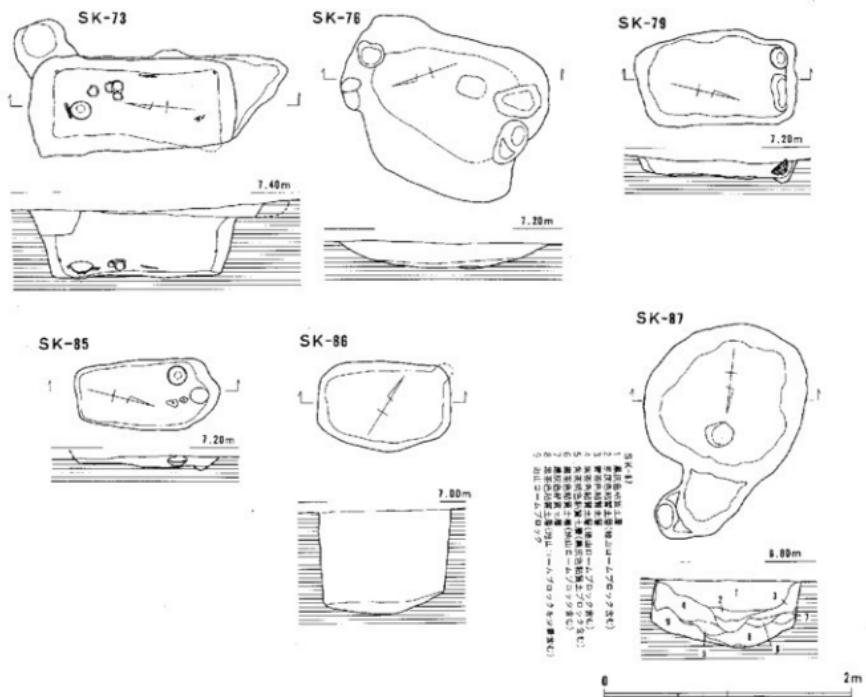


Fig.35 土坑・土壤・貯蔵穴 (SK) - 73, 76, 79, 85, 86, 87 実測図(1/40)

SK - 73 (Fig.35、PL.26)

F - 3 にて検出された墓である。長軸165cm、短軸75cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。残存深さは約50cmを測り、底面は平坦である。鉄釘がみられることから木棺墓である。

出土遺物(Fig.34) 250～253 上師器小皿。すべて外底部糸切り。法量(口径・器高)は、順に8.6-1.0、8.8-1.0、9.2-1.0、10.0-1.0cm。254 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。外面には複介籠透弁文を施す。疊付けから高台内は露胎。口径17.0、器高6.9、高台径6.2cm。255 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。内面には割花文を施す。口径15.2cm。256 同安窯系青磁皿。口径11.6cm。257 同安窯系青磁皿。外底は施釉後釉剥ぎ。258～262 鉄釘。断面は方形と思われる。いずれも木質が付着する。263 鉄製品。不明。埋葬時期は13世紀前後～前半代と思われる。

SK - 76 (Fig.35)

D - 2 にて検出された。長軸160cm、短軸120cmを測り、平面は不定形を呈する。残存深さは約20cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物 手づくねの球状をした不明土製品が1点のみ出土している。

S K - 7 9 (Fig.35、P L.27)

E - 2 にて検出された墓である。長軸130cm、短軸75cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。残存深さは約15cmを測り、底面は平坦である。

出土遺物(Fig.34) 264 龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。外面には鏽蓮弁文を施す。疊付けから高台内は露胎。口径16.3、器高6.7、高台径4.9cm。遺構の時期は出土遺物から13世紀前後～前半代と思われる。

S K - 8 5 (Fig.35、P L.27)

F - 2、F - 3 にて検出された。長軸115cm、短軸55cmを測り、平面は略隅丸長方形を呈する。長軸方向は磁北からややずれる。残存深さは約10cmを測り、南側に向けて高くなる。

出土遺物(Fig.34) 265 龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。内底に印花文施す。疊付けから高台内は露胎。内底四ヶ所に目跡が残り、外底にはハマが付着する。口径16.2、器高6.1、高台径6.4cm。遺構の時期は出土遺物から12世紀後半代と思われる。

S K - 8 6 (Fig.35)

F - 3 にて検出された。105長軸cm、短軸70cmを測り、平面は隅丸長方形を呈する。遺構残存深さは80cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物 遺物は出土していない。

S K - 8 7 (Fig.35)

B - 2、C - 2 にて検出された。直径130cmを測り、平面は略円形を呈する。残存深さは約50cmを測り、中央部が最も深い。

出土遺物 土師器片、須忠器の大型壊破片が出土している。

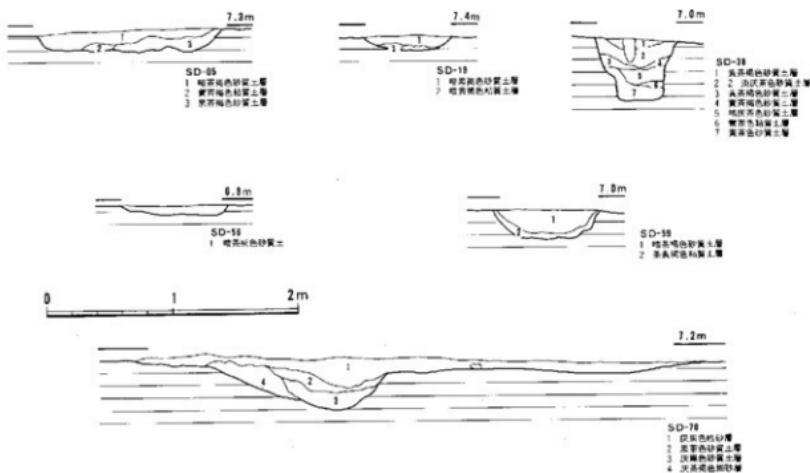


Fig.36 溝(S D) 0 5, 1 9, 3 8, 5 6, 5 9, 7 0 実測図(1/40)

溝 (S D)

S D - 0 5 (Fig.36)

F - 2, G - 2 で検出された N - 18° - W 方向の溝である。確認された長さは約 7.5m、幅は上端で約 1.5m を測る。残存する深さは 15~20cm であり、底面はやや平坦である。覆土は上から暗茶褐色砂質土、黄茶褐色粘質土、黒茶褐色砂質土であり、水の流れを示す粗砂の堆積はみられない。

出土遺物(Fig.37) 267 須恵器の壺口縁破片である。268 は土師器壺の口縁破片である。

S D - 1 5

F - 3、G - 3 にて検出された。方向は約 N - 28° - W である。確認された長さは約 6m、幅は上端で最大 1.2m を測る。北側に深さ 60cm、直径約 2m の溜まり状の土坑が付設する。溝の深さは約 20cm 前後であるが南から北側にかけて緩やかに低くなっている。溜まり部にむかっている。遺構の半分ずつを別の調査区で確認したため全体の写真は撮影されていない。覆土は茶褐色砂質土である。

出土遺物(Fig.37) 269 土師器壺。口縁内面の屈曲は明瞭。口径 18.0cm。他に須恵器の高壺破片などが出土している。

S D - 1 9 (Fig.36、P L.28)

G - 2, H - 2, H - 3 にて検出された。方向はほぼ磁北方向である。確認された長さは 42m、幅約 70cm を測る。深さは 10cm 程度であるが下端の幅は均一で直線的にのびる。覆土は上から暗黒褐色砂質土、暗黄褐色粘質土である。

出土遺物(Fig.37) 270 土師器小皿。糸切り。口径 8.4、器高 1.1cm。271 土師器小皿。糸切り。口径 9.2、器高 1.2cm。遺構の時期は出土遺物から中世とおもわれる。

S D - 3 8 (Fig.36)

確認できた長さは約 5m で東側は擾乱に切られる。西側は S D - 1 5 同様溜まり状の遺構で終わる。N - 87° - E を測る東西方向の溝である。幅は上端で 80cm から 1m、下端は約 30cm を測り、壁の立ち上がりが強い。溜まり状遺構の深さは約 35cm であり、不定形を呈する。覆土は上から黄茶褐色砂質土、淡灰茶色砂質土、黄茶褐色砂質土、暗灰茶色砂質土、黄茶色粘質土、黄茶色砂質土である。水が流れる状況にはなく、水が溜まっていたと考えられる。

出土遺物(Fig.37) 272 須恵器壺。口縁部は外面に断面三角形に肥厚し、その下に突帯が一条めぐる。突帯下に一条、頸部中位あたりに三条の沈線が巡る。外面はカキ目を施し、沈線の間にはヘラ状工具の先端によって綱方向の沈線を入れる。口径 32.8cm。273 土師器鉢ないしは脚付き碗。胎土は赤褐色で細かい。外面はカキ目が施され、口縁下と体部中位下にそれぞれ三条の沈線が巡る。口径 11.6cm。遺構の埋没時期は出土遺物から古墳後期と考えられる。

S D - 4 6

I - 1, I - 2 にて検出された。石蓋土壙墓群を構成する溝と思われる。溝の幅は 40~100cm、深さは約 25cm を測る。覆土は暗茶褐色粘質土であった。復元直径は約 4m ほどであろうと思われるが中央部を立ち割ったが遺構はみられなかった。地上に構築される施設も予想されるが、それを裏付けるものはみられなかった。遺構の南側において底面に接する状態で壺 1 点を検出した。

出土遺物(Fig.37) 274 土師器壺。口縁は二重口縁で短く直立する。口縁立ち上がりは明瞭で段を有する。口径8.5cm。 275 土師器二重口縁壺。口径19.0cm。 276 土師器二重口縁壺。磨滅著しく調整不明。口径18.0、器高33.0cm。遺構の時期は出土遺物から古墳初頭と考えられる。

SD-4 9

J-1, J-2, K-2にて検出した。残存する幅は上端で1.8m、深さは35cmを測る。底面のレベルは北側から緩やかに弧を描きながら低くなり、東方向へ湾曲する。覆土は灰褐色砂質土の単層である。この遺構が屋敷を画する溝の南西角であると仮定すれば、現在調査区東側は急激な斜面になっているが、中世屋敷の北東側への広がりが予想される。

出土遺物 図化できないが龍泉II類の碗の破片が出土しており、遺構の埋没時期は13世紀前後から前半が考えられる。

SD-5 6 (Fig.36)

B-2, C-2, C-3にて検出された。方位はN-2°-Wをむく。検出された長さは約21mを測り、さらに遺構は南側にのびる。幅は約1mで直線的にのび、底面のレベルは南側に向けて徐々に低くなる。覆土は暗茶灰色砂質土であった。

出土遺物(Fig.37) 277 須恵器壺蓋。口縁やや上に沈線が二条巡る。 278 須恵器壺。口縁は外面に若干肥厚する。外面には格子目叩き、内面にはあて具の痕が残る。口径23.4cm。出土遺物では古墳時代のものが出土しているが、覆土が他の遺構では中世にみられる土色に近いこともあり、遺構の時期については不明としたい。



P h. 6 溝4 6 遺構検出状況

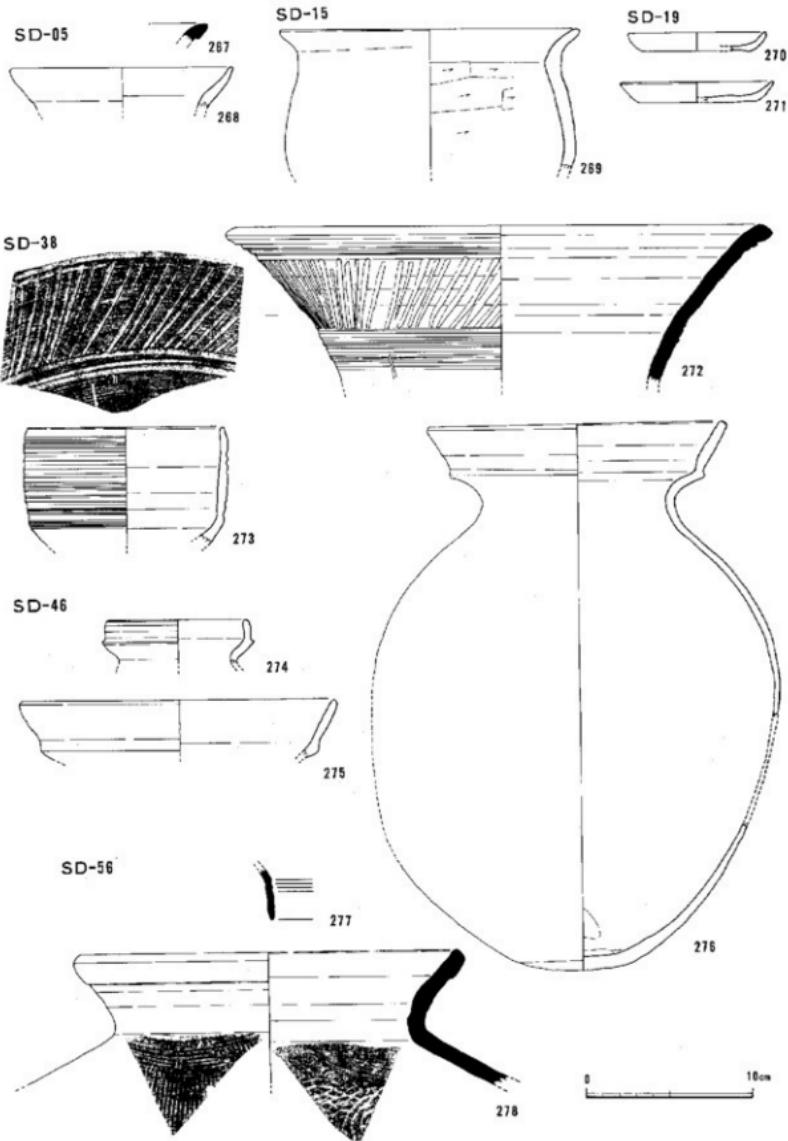


Fig.37 满 (SD) 出土遺物 1 (1/3)

S D - 5 9 (Fig.36、P L.28)

C - 2, C - 3, D - 3 にて検出した。方向はほぼ磁北とあっており、直線的にのびる。幅は0.8~1.2mで深さは約25cm程度である。底面のレベルは南北ほぼおなじである。覆土は上から灰茶褐色砂質土、茶黃褐色粘質土である。

出土遺物(Fig.38) 279 須恵器坏蓋。鉢付く。口縁端部は断面三角形を呈するがかなり退化した感じで、内面に浅い沈線が巡る。天井部外側はヘラ切り離しのまま未調整。口径13.4、器高2.8cm。 280 須恵器坏身。外底はヘラ切り離し後、ヘラ状工具でナデ調整を施す。口径12.8、器高3.4、底径7.4cm。遺構の埋没時期は出土遺物から8世紀後半~9世紀初頭と考えられる。

S D - 7 0 (Fig.36)

D - 1、D - 2、E - 2、E - 3、F - 2、F - 3 にて確認された。平面は南北方向にあるが緩やかに西側に弧を描く。覆土は上層から灰黒色粗砂層、黒茶色砂質土、灰黒色砂質土、灰茶色粗砂層である。幅は2.5~3.8mを測るが、溝の掘り返しが複数回おこなわれていることは土層断面や平面の観察からも明らかであり、後世の削平を考慮すると当時の溝幅はさらに広がるものと考える。底面のレベルは南北端に特に傾斜はみられない。中央部に一部張り出す所があり、東西方向の溝ないしは何か別の施設が付くのか不明であるが、この部分の深さが全体の中で最も深い。

出土遺物(Fig.38) 281 土師器小皿。糸切り。口径9.0、器高0.8cm。 282 土師器小皿。糸切り。口径9.4、器高0.9cm。 283 土師器坏。糸切り。口径13.0、器高2.6cm。 284 土師器坏。糸切り。口径13.3、器高2.3cm。 285 瓦質土器鍋。外面に格子目叩き、内面はハケ目調整を施す。周防型足鍋か。 286 白



P h. 7 溝38遺物検出状況

磁碗Ⅸ類。内底を輪状釉剥ぎする。高台径6.5cm。287 白磁碗Ⅳ類。外底には墨書が残る。高台径7.2cm。288 青磁碗。胎土は淡灰白色、白色と黒色微粒が入る。釉調は緑黄色不透明釉で、全面施釉。高台疊付けの釉は掻取り、内底には白色の目土が残る。高麗か。高台径6.7cm。289 同安窯系青磁碗。高台径3.0cm。290 青白磁碗。胎土は白色で精良、釉調はわずかに空色がかった透明釉。腰折れ。口径9.6cm。291 滑石製品。石鍋の転用品か。表面に一ヶ所、裏面に二ヶ所穿孔途中の穴がある。遺構の埋没時期は土師器の法量と龍泉Ⅱ類が出土していることから13世紀前後～13世紀前半代と思われる。

SD - 7 5

E - 2, F - 2, F - 3にて検出した。方向は南側はほぼSD - 7 0に沿うが北側では2本に分かれ蛇行する。幅は1.5～2mを測り、深さは約20cmである。覆土は灰茶色砂質土であり、土層の観察では明確ではなかったが北側では複数に分かれることから溝の掘り返し、または切り合いなどがあることが考えられる。SD - 7 0同様台地の落ち際を巡るものであろう。

出土遺物(Fig.38)292 白磁碗。淡黄白色のきめ細かな胎土に乳白色の不透明釉がかかる。口径16.1cm。293 白磁碗Ⅸ類。内底を輪状釉剥ぎする。高台径6.4cm。294 青白磁碗。内面口縁下に沈圈線巡る。胎土は淡灰白色、きめ細かく精良。釉調は淡水色透明釉でよくとけている。口径15.4cm。295 鉄製品。遺構の時期は土師器が少なく不確定だが、龍泉Ⅱ類あることから13世紀前後～13世紀前半代が考えられる。

SD - 7 7



P h. 8 溝7 0 調査状況

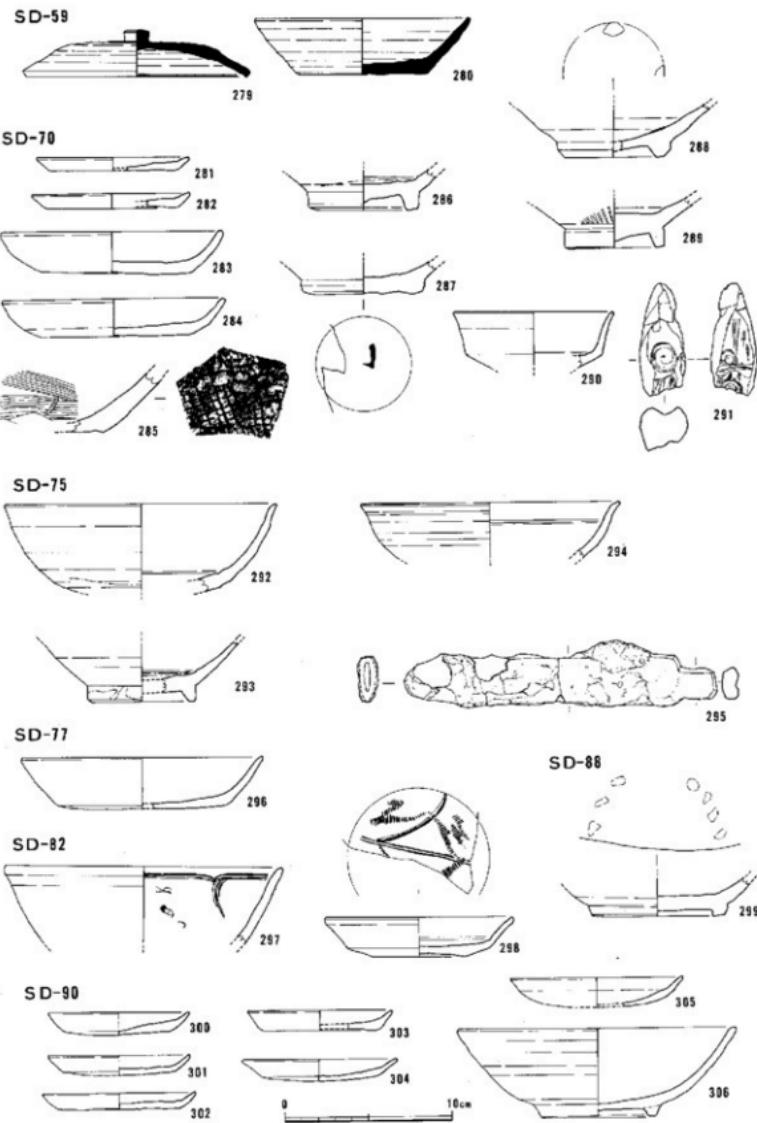


Fig.38 溝 (SD) 出土遺物 2 (1/3)

F - 3 にて検出された。SD - 7 5 の東側で同じ方向を向く。南側では幅約1.2m、深さ15cmを測るが、北側ではプランが不明瞭となる。覆土はSD - 7 5 とよく似た灰茶色砂質土であった。断面形は緩やかなU字型をしており、底面のレベルから水の流れは北から南側に流れる。

出土遺物(Fig.38) 296 土師器杯。糸切りと思われるが器面磨滅著しく不明瞭。口径14.2、器高3.1cm。造構の時期は出土遺物が少なく不確定だが、龍泉T類が出土していることから古くとも12世紀後半代以降と考えられる。

SD - 8 2

F - 3 にて検出した。方向は磁北に直行する。確認できた長さは約3.5mであり、幅は90cmを測る。深さは10cmほどで、断面は緩やかなU字型を呈する。覆土は灰茶褐色砂質土であり、南北方向の溝とつながるものと考えられる。

出土遺物(Fig.38) 297 龍泉窯系青磁碗I類。内面に割花文施す。口径16.4cm。298 同安窯系青磁皿。外底は施釉後釉剥ぎ。口径11.2、器高2.4、底径5.4cm。造構の時期は出土遺物が少なく不確定だが、龍泉窯系、同安窯系遺物があることから古くとも12世紀後半代以降が考えられる。

SD - 8 8

B - 2、B - 3、C - 2、C - 3 にて検出した。確認できた長さは5.2m、幅約60cm、深さは10cmを測り、直線的にのびる。方向はN - 86° - E を向く東西溝である。断面の形は緩やかなU字形を呈し、覆土は灰茶色砂質土である。

出土遺物(Fig.38) 299 越州窯系青磁碗(精製品)。輪状高台で全面施釉。内底と高台疊付けに日痕が残る。高台径8.0cm。造構の時期は遺物量が少量のため詳しくは不明であるが、中世の範疇でとらえられる造構と考えられる。

SD - 8 9

C - 3 にて検出された。SD - 9 0 に切られる。方向はN - 88° - W を指し、直線的にのびる東西溝である。確認された長さは2.9m、幅約30cm、深い部分で8cmを測る。磁北方向と直行することからも複数の磁北方向の南北溝とつながるものと考えられる。

出土遺物 造構の時期は時期を特定できる遺物が出土していないが、SD - 9 0 に切られるが、土師器片と陶磁器片がみられることからSD - 9 0 の時期を大きく選ぶものと考える。

SD - 9 0

C - 3 にて検出された。SD - 8 9 を切る。溝がほぼ直角に屈曲した部分のみで、深さも8cm程度である。覆土はSD - 8 9 と近似する灰茶色砂質土である。幅は約50cmで、溝の方向は磁北に規制されている。底面上に張り付いた状態で遺物を検出した。

出土遺物(Fig.38) 300 土師器小皿。ヘラ切り。口径8.4、器高1.3cm。301 土師器小皿。ヘラ切りか。口径8.5、器高1.2cm。302 土師器小皿。糸切りかヘラ切りか不明。口径9.0、器高1.0cm。303 土師器小皿。糸切り。口径8.6、器高1.2cm。304 土師器小皿。ヘラ切り。口径9.2、器高1.3cm。305 瓦器小皿。磨滅著しく調整等不明。口径10.2、器高1.8cm。306 瓦器椀。高台はやや太く断面略台形。磨滅著しく調整不明。口径16.6、器高5.4、高台径7.0cm。造構の時期は土師器皿の底部切り離し技法に糸、ヘラが混在することと、龍泉T類があることから12世紀中～後半代が考えられる。

SK-42

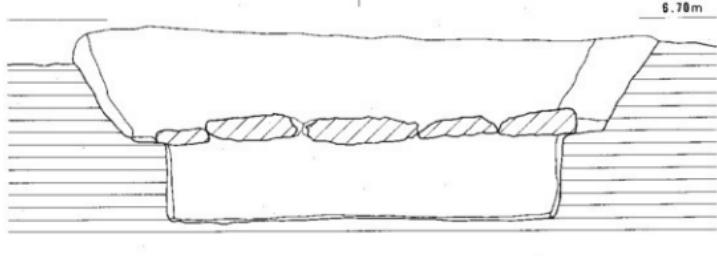
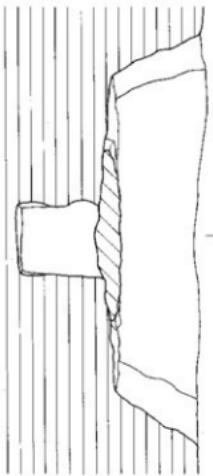
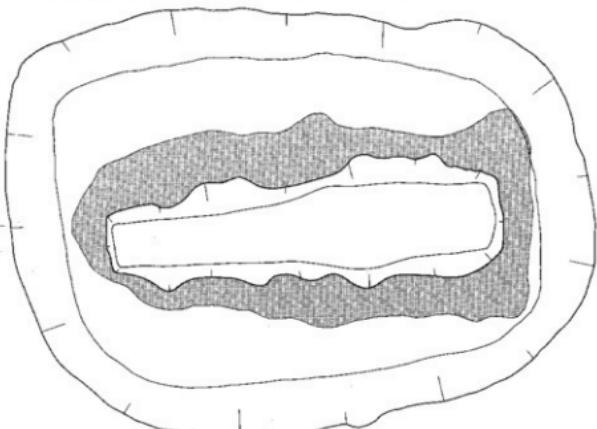
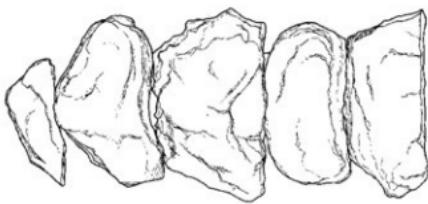


Fig.39 石炭土壤基 SK-42 實測圖(1/20)

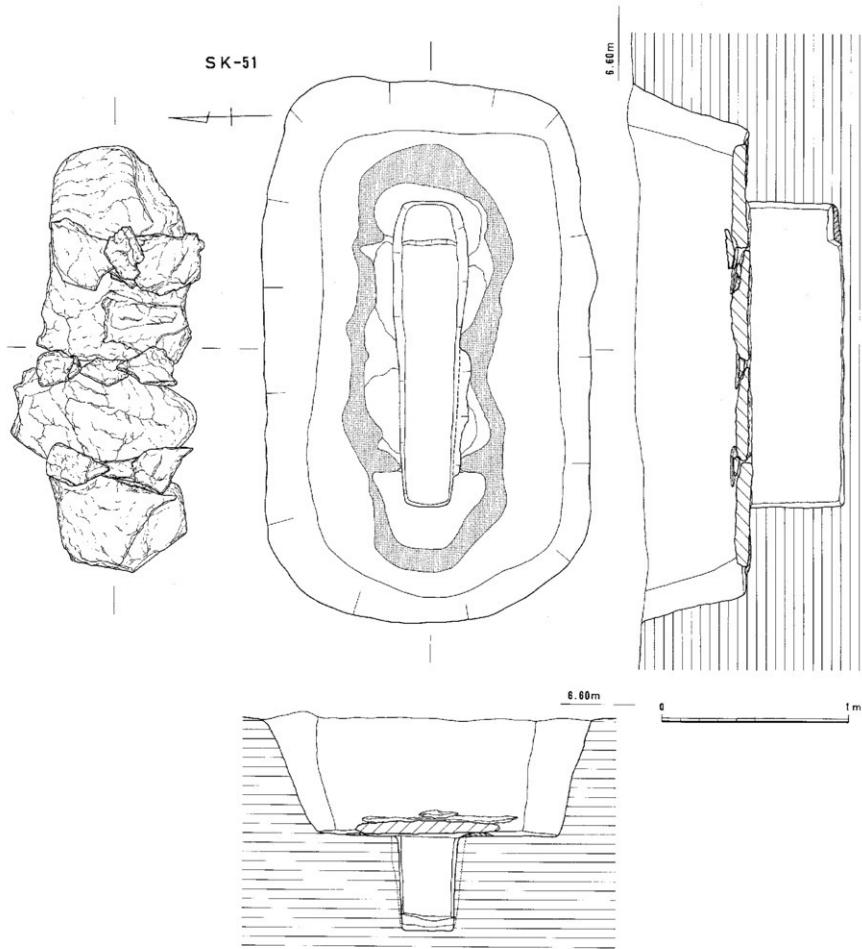


Fig.40 石蓋土壤基 SK-51実測図(1/20)

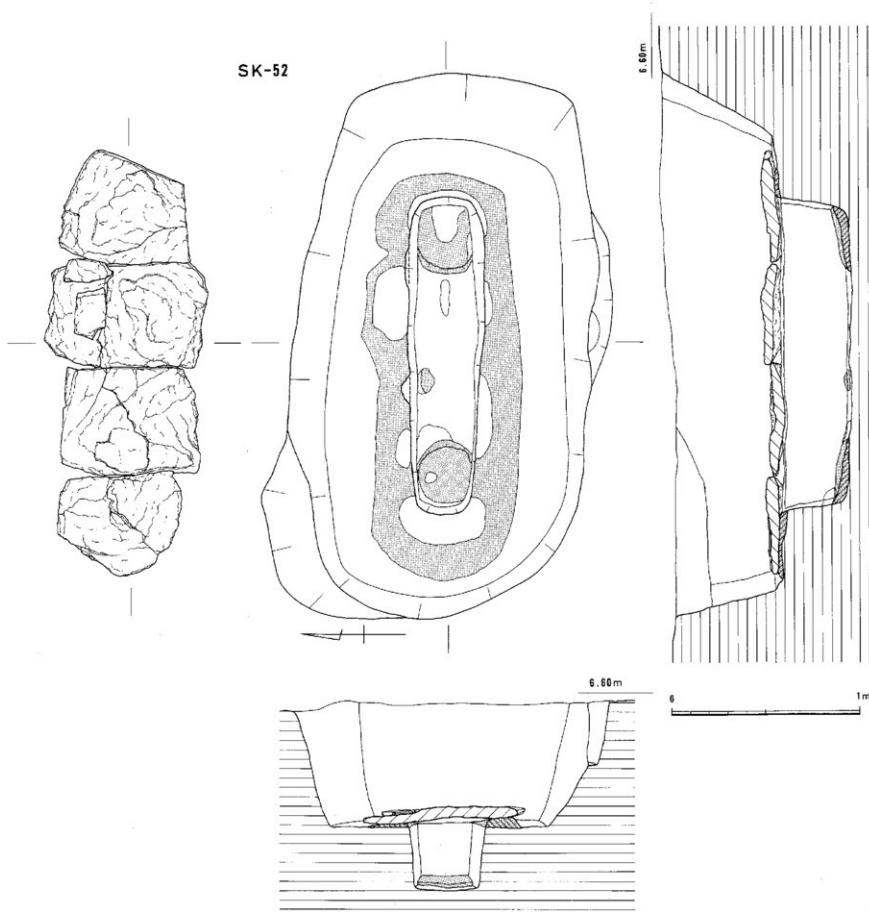
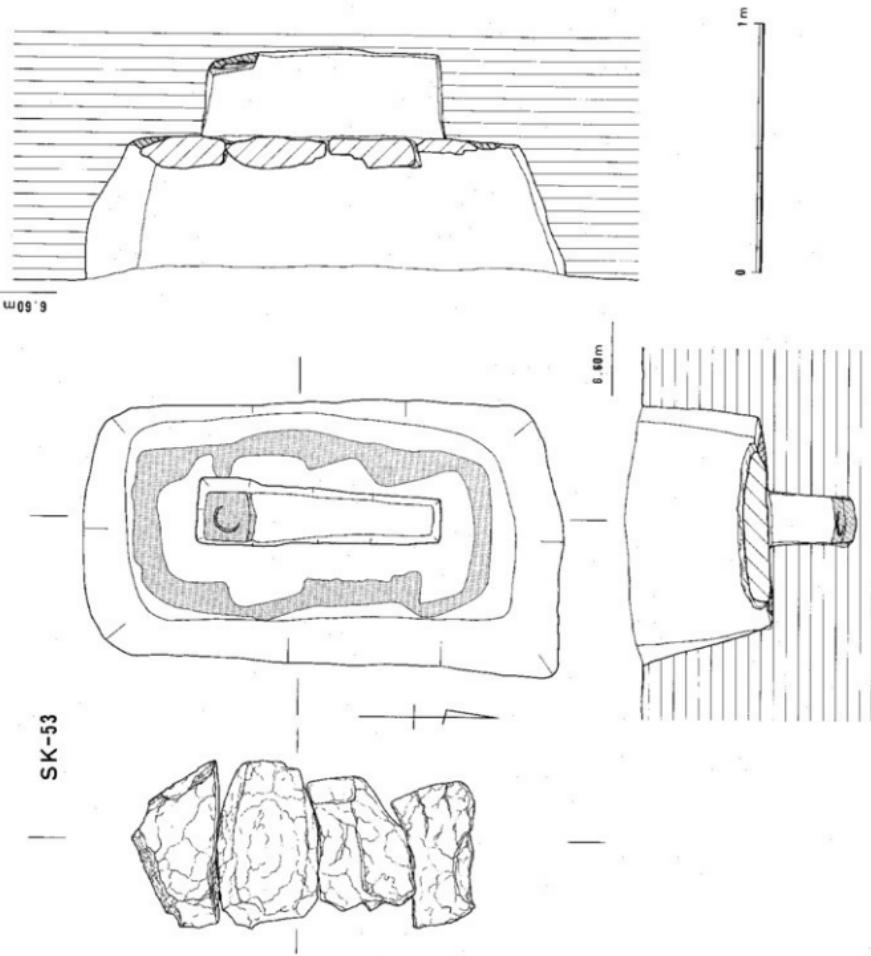


Fig.41 石蓋土壤基 SK-52実測図(1/20)

Fig.42 石蓋土壤基 SK-53測図(1/20)



石蓋土壙墓

S K - 4 2 (Fig.39, P L.29)

J - 3, K - 3 にて検出された。一段目の掘りかた上端の平面は長円形を呈し、長軸273cm、短軸168cmを測り、残存深さは38cmを測る。床面は平坦であり、壁はやや傾斜をもってつくられている。二段目の掘りかた上を6石の玄武岩の板石と白色粘土を目張りにつかい塞いでいる。北側から2石目と3石目の間に透き間があいているが、掘り下げ時に誤って1石取り外してしまったが、隙間を塞ぐように玄武岩の板石が白色粘土で目張りして据えられていた。二段目の掘りかた上端の平面はクサビ形を呈し、長軸158cm、広部38cm、狭部25cmを測る。深さは35cmを測り、壁は平坦につくられており、直線的に立ち上がる。壁面には工具痕、板状の痕跡等はみられなかった。壁面、床面には赤色顔料の塗布が全面にてみられた。二段目の掘りかたの平面形から幅広側を頭位と仮定するなら南側を向くこととなる。

出土遺物(Fig.43) 307 土師器壺。口縁端部をつまみ出すが不明瞭。口縁内面の屈曲明瞭。墓壙の掘りかたより出土した。

S K - 5 1 (Fig.40, P L.30)

I - 1, J - 1 にて検出された。一段目の掘りかた上端の平面は隅丸長方形を呈し、長軸288cm、短軸176cmを測り、残存深さは62cmを測る。床面は平坦であり、壁はやや傾斜をもってつくられている。二段目の掘りかた上を玄武岩の大きな板石4枚と複数の小板石とを組み合わせ塞いでいる。白色粘土は板石の下側にもぐり込んでいることから、二段目の掘りかた上端の周間に粘土をおいてから大石を据えている。二段目の掘りかた上端の平面は長方形を呈し、長軸162cm、東側小口部30cm、西側小口部25cmを測る。深さは50cmを測り、壁は平坦につくられており、直線的に立ち上がる。壁面には工具痕、板状の痕跡等はみられなかった。壁面、床面には赤色顔料の塗布が全面にてみられた。二段目の掘りかたの平面形から幅広側を頭位と仮定するなら東側を向くこととなる。

S K - 5 2 (Fig.41, P L.31)

J - 1, J - 2 にて検出された。一段目の掘りかた上端の平面は長椭円形を呈し、長軸287cm、短軸157cmを測り、残存深さは60cmを測る。床面は平坦であり、壁はやや傾斜をもってつくられている。二段目の掘りかた上を玄武岩の大きな板石4枚と玄武岩の小片とを組み合わせ塞いでいる。白色粘土は板石の下側にもぐり込んでいることから、二段目の掘りかた上端の周間に粘土をおいてから大石を据えている。二段目の掘りかた上端の平面は長方形を呈し、長軸170cm、東側小口部30cm、西側小口部27cmを測る。深さは36cmを測り、壁は平坦につくられており、直線的に立ち上がる。壁面には工具痕、板状の痕跡等はみられなかった。壁面、床面、右蓋の内面側には赤色顔料の塗布が全面にてみられた。二段目の掘りかたの平面形から幅広側を頭位と仮定するなら東側を向くこととなる。

出土遺物(Fig.43) 308 上師器鉢。内面はハケ目調整、外面下位は手持ちヘラ削り。口径19.0、器高4.2cm。309 土師器鼓形器台。内面はヘラ削りした後、ハケ目調整を施す。口径19.8cm。墓壙の掘りかた内より出土した。

S K - 5 3 (Fig.42, P L.32)

I - 1, I - 2, J - 1, J - 2 にて検出された。一段目の掘りかた上端の平面は隅丸長方形を呈し、長軸191cm、短軸105cmを測り、残存深さは55cmを測る。床面は平坦であり、壁はやや傾斜をも

ってつくられている。二段目の掘りかた上を玄武岩の板石4石で塞いでいる。白色粘土は板石の下側にもぐり込んでいることから、二段目の掘りかた上端の周囲に粘土をおいてから大石を据えている。二段目の掘りかた上端の平面はクサビ形を呈し、長軸98cm、南側小口部27cm、北側小口部17cmを測る。深さは37cmを測り、壁は平坦につくられており、直線的に立ち上がる。壁面には工具痕、板状の痕跡等はみられなかった。壁面、床面、石蓋の内面側には赤色顔料の塗布が全面にてみられた。床面南端には、厚さ約3cmの白色粘土を枕状に敷いた部分がみられた。二段目の掘りかたの平面形と枕状の遺構から頭位は南側を向く。

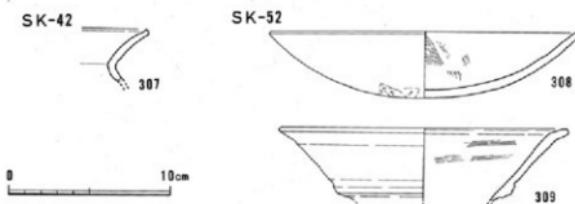


Fig.43 石蓋土壙墓出土遺物



P h. 9 石蓋土壙墓配置状況

福岡市内における石造土器墓一覧表

遺跡・遺構名	標高 石村・枚数	墓種	土 墓	埴 物	備 考
1 井戸		板状粘晶片岩	9×0.4×0.4	?	無
2 井戸B遺跡SK-10	14.3	板状泥質3	(2.3×1.3)mm丸方形	1.9×0.5×1.3 N-159° E-不整長方形	無 成人 頭位北東 床面・石蓋裏に赤色顔料
SK-12	14.4			1.8×0.90×0.2-0.25 N-41° E-不整長方形	成人 頭位南東 床面・石蓋裏に赤色顔料
3 小笠遺跡1号	37.7	板状(3)		1.25×0.21-0.3×0.39±2層長方形	無
2号	35.6	板状花崗岩4		0.95×0.35×0.35長円形	無
3号	35.1	板状花崗岩4石		0.98×0.35×0.25mm丸長方形	無
4号	35.1	板状砂岩7		1.70×0.50×0.35長梢円形	缺
5号	35.1	板状花崗岩5		1.11×0.44×0.33長梢円形	無
6号	35.0	砂岩 花崗岩4		1.07×0.48×0.30mm丸長方形	無 小兒 柄内埋土
4 日佐原遺跡		板状(2)		(0.84)×0.36×0.42長方形	無 側壁・石蓋裏にベンガラ
5 織田御石墓土壙其一 其二		板状花崗岩(2)斜石		1.57×0.34×0.27長方形	折生式切形土器 成人 床面に少量の赤色顔料
6 織田御石墓土壙周溝外SKM-4	50.2	花崗岩塊4石	(1.85×1.1)×0.1長方形	無	石蓋裏に赤色顔料
7 宝満花石塚下石蓋土壙		板状多種(4)薄片體	(1.77×1.25)×0.18長方形	1.18×0.38-~0.3×0.15 S-70° W長方形	小兒 頭位東
宝満花石塚下石蓋土壙	25.1	板状花崗岩 彫岩(4)	(0.56×0.91)×0.25長方形	1.10×0.48×0.25N-25° E長方形	土器片 1 成人 石蓋裏に赤色顔料
13号土壙	26.4	砂石 片状 砂岩板状7		2.11×0.65×0.42 N-71° E長方形	帶彫刻刀子・柄外 成人 頭位西 石槽内側用磨擦
8 左寺古墳群5号墳	43.8	板状岩(3)			長輪車西方面 墓丘基部の前後
9 総合G遺跡第1次調査Ⅱ区SK-04 22.2			1.9-2.0×1.3-~1.4×0.15長方形	1.8×0.45-0.5×0.45 N-72° E	小形彷彿鏡 鏊刀子 土器片に赤色顔料
総合G遺跡第2次調査Ⅱ区SK-04 22.2				1.8×0.5×0.23 N-84° W	無

文 獻

- 中山平文忠 1924 「井戸の洗生式土器」『考古学雑誌』14-1-2 同1926 「井戸及び寺福寺の墓掘」『考古学雑誌』17-1-2
- 山口謙介・吉留秀穂 1958 「井戸B遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集
- 柳田国男著 1973 『小笠遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 篠山猛 1954 「福岡県内小笠(西)」『先史』78
- 中山平文忠 1931 「福岡県原野に発見せる石蓋土器と黑墨土器」『考古学雑誌』21-9
- 吉留秀穂 1987 『福岡古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 山崎純男著 1974 『宝満花石塚』福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 山口謙介・吉留秀穂 1959 「左寺古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集

石蓋土壙墓について

今回調査では4基の石蓋土壙墓を調査した。遺構の残存は良好であり、調査をおこなって気が付いたことを2, 3記したい。

土坑内は赤色顔料が石蓋の内面を含め全面塗布されており、壁面にもその痕跡がみられた。自然科学分析で明らかになったことには、SK-51の頭部赤色顔料には水銀朱が含まれており、その他はベンガラのみを使っており、施朱の使い分けが石蓋土壙墓でもおこなわれていることがわかった。

壁面の壁はなめらかで、板状の痕跡はみられず、また床面にも板を立てたような痕跡はない。土坑と石蓋との間には白色粘土を敷き、石と石の間を板状の小石で塞ぐときにも白色粘土を隙間に充填しており、白色粘土により土坑を密閉するという感覚を強く受けた。

4基の石蓋石材を西南学院大学名譽教授の唐木田芳文先生に観察していただいたところ、石材は角閃石が多く含む玄武岩であり、角閃石の多少はあるもののすべて同質の石で同じ場所から運んできたと考えられるとの教示を得た。また玄武岩は響灘沿岸でみられ、福岡市周辺では現在今山周辺で見られるとも教えていただいた。

石材はSK-53の4個のうち花崗岩が1個含まれるのみで、あとはすべてこの玄武岩である。石の表面が風化して丸みを持つもの（SK-51の東端石）があり、露出している石を探集したようである。古墳の石室に好んで玄武岩が使われるようになるのと同じく石蓋土壙墓でも同様のことがおこなわれているようである。そしてこの墓をつくった集団は同じ場所にその石を取りに行ったことになる。

SK-51にはSD-47とSD-48で墓の周囲を溝が巡っていたと考えられ、石蓋土壙墓に溝が伴うことが明らかとなった。また小児合せ壺棺のSK-44は溝をSD-46に取り付くかたちでつくられており、遺物からも矛盾がない。SD-46がなにを囲んでいたのかは不明であるが、供獻土器を伴う構造物が想像される。

配置の関係とSK-52がSK-53を切ることから、まずSK-42とSK-53の頭位を北方向に向けるやや小型で散漫な配置をみせる2基がつくられ、その後やや時間を経て、頭位を東側に向ける大型のSK-51, SK-52, SK-44が溝を共有するようにつくられていったと考えれば、切り合いの存在と頭位方向の時期的な差として説明がつく。今後の石蓋土壙墓の発見と研究に期待したい。



P h. 10 唐木田先生調査風景



P h. 11 谷頭土層断面状況

その他の遺物

谷頭部調査

調査区東側大きく削平を受けた部分にて谷状に凹む部分がみられた。立地と状況から谷頭部分と思われる。谷の土層断面の観察から上、中、下層の3つに大きく分けた。第1層から第5層までの黄褐色に発色する層を中心として上層とした。中層を茶褐色砂質土の堆積である第6層から第13層までとし、第14層と第15層の黒褐色粘土を下層とした。第1~6層は上面からのしみ込みである。自然科学分析をおこなった谷ベルト1は土層番号第2層、谷ベルト2は土層番号第8層、谷ベルト3は土層番号第15層からそれぞれ採集した。遺物の出土状況は上層には須恵器を含み遺物量が多い。中層は遺物量が少なく古式土師器を含む。下層には遺物がみられない。

自然科学分析ではそれぞれの層が堆積した時代の環境や堆積の状況を復元できるデータは得られなかった。遺物の出土状況から、古墳時代初頭では居住面と数メートルの高低差をもつ谷状の凹みであったと思われる。最深部では平坦面、硬化面などは特にみられなかった。ただ地形的に降雨時は雨水が流れる状況であったと思われる。第8層に切られるピット状の遺構が土層断面にみられることから構築物があった可能性が考えられる。谷頭のすぐ前にSK-42の石蓋土壙墓がつくられている。6世紀から7世紀初頭頃には谷はある程度埋没していて、浅い凹み状をなしていたと思われる。堆積の厚さはこの時期のものが最も厚い。古代には埋没してしまい。中世では凹みすらない状況であったと考えられる。

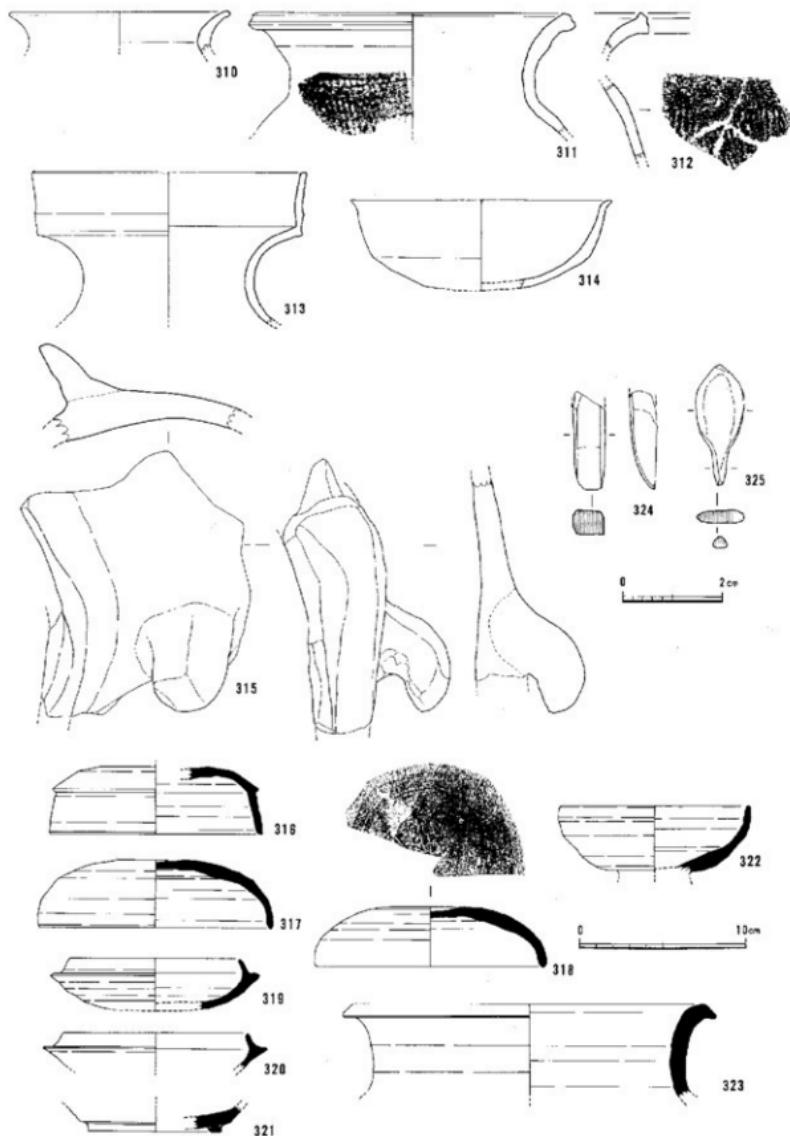


Fig.45 谷頭出土遺物実測図(1/3)

- 310 土師器甕。口径13.4cm。上層出土。
- 311 土師器甕。胎土は黄褐色、細かな砂粒多く含む。口縁は外反、上端面はやや凹む。外面に擬格子状叩き痕残る。口径19.6cm。
- 312 土師器甕。胎土は明黄褐色、細かな砂粒多く含む。口縁端部は上下に拡張し、外面はやや凹む。外面に平行叩き痕残る。
- 313 土師器二重口縁甕。口縁は真っ直ぐ立ち上がる。磨滅著しく調整不明。山陰系。口径16.4cm。
- 314 土師器鉢。胎土は暗赤褐色。丸底で、口縁は上位で外反。磨滅著しく調整不明。口径15.6、器高5.5cm。
- 315 土師器甕。把手は下方に向く。内面は被熱しており赤変する。下層出土。
- 316 須恵器坏蓋。天井部と口縁の境は明瞭な段がつく。天井部外面は回転ヘラ削り。口径12.8cm。下層出土。
- 317 須恵器坏蓋。器高高く、口縁端部は丸くおさまる。天井部外面は回転ヘラ削り。口径14.0、器高4.1、ただし歪み著しく不明確。上層出土。
- 318 須恵器坏蓋。器高高く、口縁端部は丸くおさまる。天井部外面は回転ヘラ削りか、ヘラ記号あり。口径13.9、器高3.6、ただし歪み著しく不明確。
- 319 須恵器坏身。口縁立ち上がりは内傾する。外底は回転ヘラ削り。口径10.0、器高3.1cm。上層出土。
- 320 須恵器坏身。口縁立ち上がりはやや内傾する。口径11.0cm。
- 321 須恵器坏身。高台は断面四角形で底部と体部の境のやや内側に付く。高台径8.0cm。上層出土。
- 322 須恵器高坏。坏部下位は回転ヘラ削り。口径11.4cm。上層出土。
- 323 須恵器甕。口縁は外反し、端部は先細りとなる。口径22.4cm。上層出土。
- 324 石盤。全面研磨。現存長さ4.0、幅1.3、厚み1.0cm。石材は粘板岩。
- 325 磨製有茎石鐵。かなり風化著しい。長さ4.9、幅2.0、厚み0.5cm。石材は粘板岩。遺構の時期は不明。古代の遺物数点、多くは6世紀末～7世紀初頭と思われる。古式土師器も多い。

包含層、その他

- 326～329 弥生土器甕。胎土は淡赤褐色で粗砂粒多量含む。外面肩部には沈圓線と羽状文が施される。326～328は同一個体と思われる。いずれも前期。
- 330 土師器甕。口縁端部のつまみ出しへはかなり退化しており、内面に不明瞭な段が付く。磨滅著しく調整不明。口径15.8cm。古墳時代前期。
- 331 須恵器坏蓋。器高は高く口縁はやや内傾気味、蓋部は丸くおさまる。天井部外面は回転ヘラ削り、ヘラ記号がある。口径13.0、器高3.8cm。6世紀末～7世紀初頭。
- 332～342 土師器小皿。335・336・339・340はヘラ切り、338・341・342・344は糸切り。口径は8.2～9.6cm、器高は0.9～1.3cm。
- 343・344 上師器高台付き小皿。高台径いずれも5.4cm。
- 345 土師器坏。ヘラ切り、板状痕残る。口径9.6、器高2.5、底径7.8cm。
- 346 土師器坏。糸切り。口径14.0、器高2.8、底径9.0cm。
- 347 土師器小椀。磨滅著しく調整等不明。口径8.0、器高2.7、高台径4.4cm。
- 348～355 土師器椀。口縁は玉縁状を呈し、高台は太い。胎土はいずれもかなり白っぽく、きめ細かいのが特徴で、他の土師器とは異質。磨滅が著しく調整等は不明瞭であるが、内面は磨き調整を施

しており、コテあて痕が残る。外面に指押さえの痕が残るものがある。白磁碗IV類を模倣したものか。福岡市内では田村、石丸古川遺跡でも出土しており、田村では11世紀の遺構から出土している。

356・357 瓦器小皿。358は内面にコテあて痕が残るのみ。口径10.4cm。359は内外に雑な磨き痕が残る。口径11.2cm。

358・359 瓦器椀。358は内外磨き施すが、外面は磨きと磨きの隙間が多い。外底はハラ切り。口径16.3、器高4.7、高台径6.9cm。359は内外磨き。内面はかなりていねいだが、外面は雑で磨きと磨きの隙間が広い。押し出ししており、外面下半に板状痕が残る。口径16.2cm。

360・361 土鍋。いずれも口縁は逆L字状に外折する。口縁上端面に360は縄目、361は棒状工具による押圧が施される。外面はハケ目調整。

362 須恵質土器椀。器壁薄く、口縁端部を上方につまみ上げる。内外横ナデ。口径16.6cm。搬入品と思われる。表探。

363 須恵質土器鉢。口縁端部を上方に引き上げ、断面三角形に肥厚する。内外横ナデ調整、内面下半は使用のため磨滅。口径26.8cm。束縛系。

364・365 越州窯系青磁碗。輪状高台精製品。全面施釉、内底と高台骨付けに日痕残る。高台径は364は8.0、365は6.6cm。

366 青磁碗。胎土は灰白色で精良、釉調は淡青緑色透明釉、かなり細かな冰裂が入る。内面口縁下に沈圈線が巡り、外面には縱方向にハラ彫りが施される。口径11.7cm。

367 龍泉窯系青磁碗I類。高台内側まで釉がかかり、疊付けの釉を雑に搔取る。内底には割花文が施される。高台径6.2cm。

368・369 白磁碗IV類。368は口径16.6、器高6.4、高台径7.4cm。369は高台径7.0cm。

370 白磁碗。体外面下半は露胎。高台径4.8cm。

371 白磁高台付き皿II類。内底輪状釉剥ぎ。高台径4.6cm。

372 白磁碗VI類。外底に「大」の墨書。高台径4.8cm。

373 白磁小壺。胎土は白色、精良、釉調はわずかに空色かった透明釉。釉下には化粧土が施される。口縁端部内外は施釉後釉剥ぎする。外面は口縁下に小さな珠文が巡り、その下に縱方向の繊維線を施す。口径6.4cm。広東産か。

374・375 土錘。374は現存長さ4.2、幅1.7、厚み1.5cm、重さ10g。375は長さ4.2、幅1.4、厚み0.9cm、重さ5g。

376 用途不明土製品

377~379 滑石製鍋。377は口縁外面に縦耳が付く。口径44.2cm。欠損品を転用しようとしたらしく、底部の破面を再度削り穿孔する。378・379は外面口縁下に鉤が巡る。

380 砥石。上端に穿孔途中。石材は砂岩。

381 石匙。横型。姫島産黒曜石を使用。全面にかなり細かな二次加工を施す。現存長さ2.8、幅4.3、厚み0.5cm。

382 石鎌。基部は円状になる。両面の一部に研磨あり。サスカイト。長さ2.8、幅1.4、厚み0.25cm。

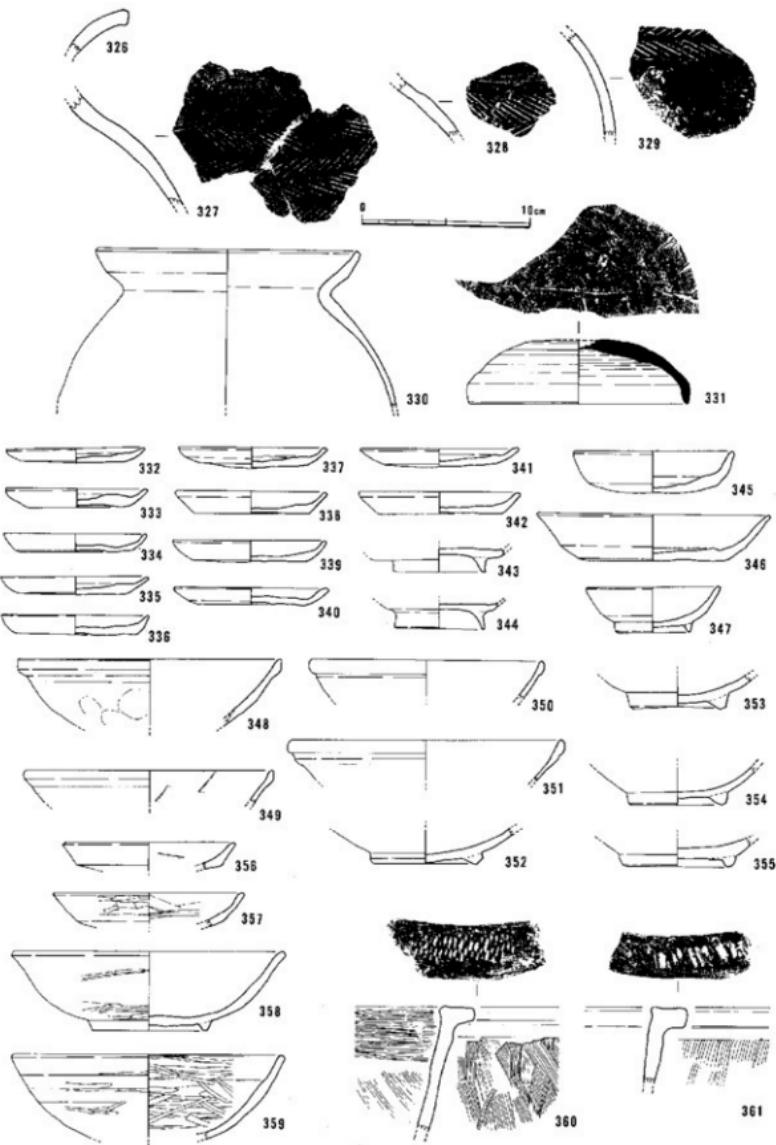


Fig.46 表探遺物実測図 1 (1/3)

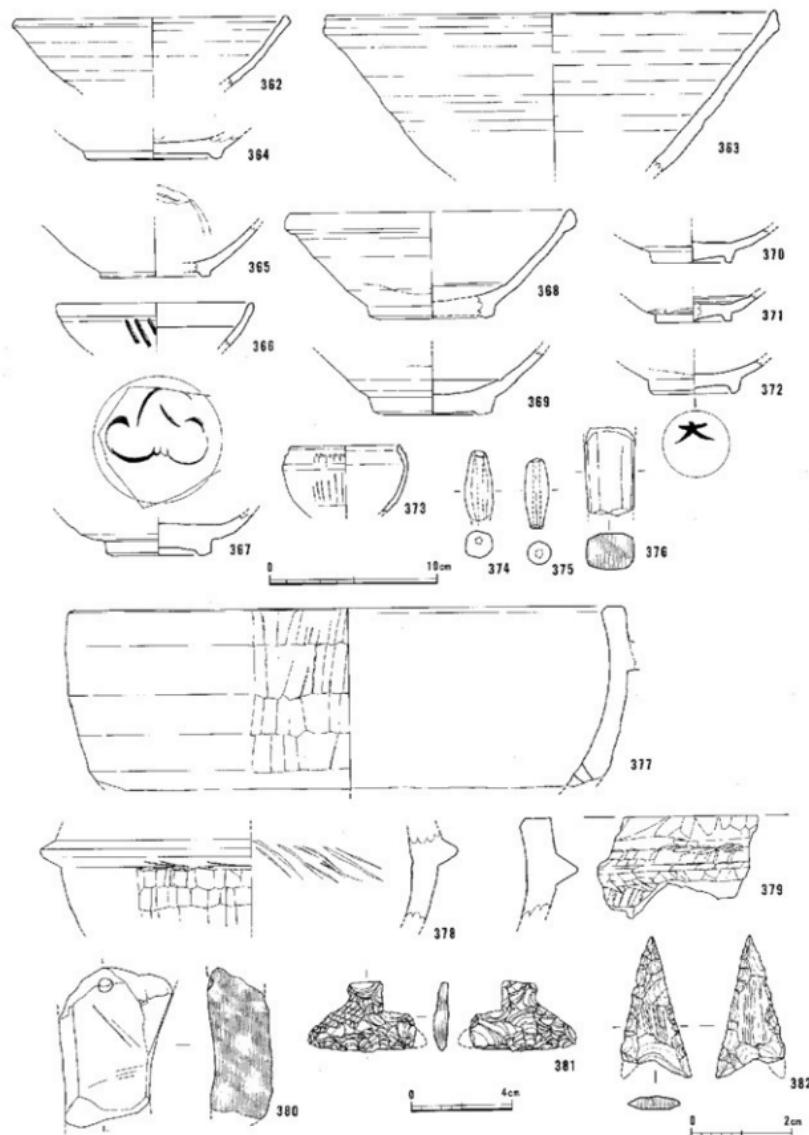


Fig.47 表採遺物実測図 2 (1/3)

3.まとめ

今回の調査は南北方向にのびる台地を東西方向に横切って帯状に調査をしたことになる。検出遺構は竪穴住居6棟、掘立柱建物12軒、石蓋土壙墓4基、土坑、溝、合せ口壙棺、土坑墓、溜井など樋井川の西側段丘上の立地をいかして長い間、集落として利用されていることが明らかになった。出土遺物から大きく5期にわたって人間の生活がみられた。

第1期は最も時代的の遅る弥生時代前期の貯蔵穴群の時代である。配列は台地の頂部から東側斜面にかけて計4基検出した。SK-06だけは台地の高所に位置するが、他の3基SK-46, 50, 51は東側斜面付近に列ぶ。遺構の残存が悪いことから後世の削平が著しいことは明らかであり、かつては住居と貯蔵穴の組み合わせによる集落が広がっていたことが想像される。

第2期は古墳時代初頭である。この時期に位置づけられる住居はSK-27のみであるが、同時期の埋葬施設である石蓋土壙墓の広がりが予想されることから、この時期の集落の密集部は今回の調査区外にあることが考えられる。

第3期は6世紀後半から7世紀初頭頃である。この時期の遺構としては竪穴住居ではSC-26, SC-80, 81、溝のSD-38, 56がある。密度は散漫であるが住居址は切り合っており、意図的に古い方の住居を埋め戻していないことから、住居廃絶後自然の堆積により平坦地となり、再び同規模の住居が建てられることから、生活の時間幅が広いことがわかる。

第4期は8世紀後半の時期である。規模の小さい竪穴住居と直線的にのびるSD-59や、台地の東側裾部に何穴かみられる方形の掘りかたを持つ掘立柱建物がこの時期にあたる。建物の規模は不明であるが、居住範囲の広がりが台地の下にものびていったようである。

第5期は12世紀から13世紀の集落である。溝を掘って屋敷を画し、屋敷内は掘立柱建物、溜井、土坑、屋敷内墓、などで構成されるようである。溝には直線的にのびるものとSD-70のように地形の沿ってやや蛇行するものがある。屋敷の中には降雨時に一時的に水の溜まる溜井(SK-02)が1基みられたのみで、他に井戸は検出されなかった。近くに樋井川が流れている水の確保が容易であったためかと思われる。台地頂部には掘立柱建物が複雑に建て替えられており、今回の調査で規模・方向が確認できた12棟の建物はほんの一部であり、検出された柱穴の数からこの何倍もの建物が建っていたことは明らかである。今回の調査では一時期の屋敷の規模、建物配置、出入り口などの構造、周辺の道路などを明らかにすることはできなかった。

調査地周辺の地形は細かい小さな谷が複数はいり、たいへん複雑であるが、大きくは南から北へ台地が高度を下げながらのびており、各時期の検出遺構の方向がほぼ一致するのは台地の方向に規制されることに原因があるようである。自然科学分析で谷の下層からイネ科の花粉と溜井SK-02からイネの植物珪酸体が検出されており、すなわち樋井川は肥沃な耕地を我々に与え続けて、この地に生活する人々の生命の根幹を支えてきたことを裏付ける。

田島A遺跡は昭和初期の土取り時に甕や壺が出土したとの話や、耕作上内に遺物の散布がみられることから遺跡の存在は以前から知られていたが、発掘調査としては今回の調査が初めてとなった。調査地周辺は古くから宅地化しており、今回の新設道路建設を機に再び宅地の立て替えなどが進むことが予想され、調査の機会も今後増加する事であろう。今後の調査からもさらなる田島周辺の地域史が明らかになることを期待する。

第6章 田島遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

田島遺跡は、鳥飼平野を流れる樋井川の左岸に位置する。本遺跡では、古墳時代の埋没谷、時期不明の土坑などが検出されている。この他にも石蓋土坑墓などが検出されている。

今回の自然科学分析調査では、古墳時代頃の遺跡周辺の古環境に関する情報を得るために珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。また石蓋土坑墓内から検出された顔料の素材を検討するためにX線回折と電子顕微鏡観察をそれぞれ実施する。

1. 試料

土壤試料は、時期不明であるSK-02下層から1点、また古墳時代初頭～6世紀代の谷埋積物から3点（試料名：谷ベルト1～3）、合計4点が採取された。これら4試料について珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行う。

X線回折と電子顕微鏡観察を行う試料は、SK-42から採取された1点、SK-51集中部および枕推定部から採取された2点、SK-52の集中部および西側小口部から採取された2点、合計5点である。これらの赤色顔料が採取された遺構は、すべて石蓋土坑墓とされている。

2. 分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。珪藻の同定と種の生態性については、Desikachariy (1987)、Hustedt, F. (1930, 1937-1938, 1938, 1955, 1959, 1961-1966)、K. Kraemer & H. Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、などを参考にした。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2%以上の主要な種類について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたって、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1989, 1991)、汚濁耐性についてはK. Asai & T. Watanabe (1995)

の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸=9:1）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

(3) 植物珪酸体分析

試料を湿重約5g秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250kHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

(4) X線回折分析

各試料中に含まれる赤色顔料を可能な限り純粋に抽出し、105°Cで2時間乾燥させた赤色物質をメノウ乳鉢で微粉碎する。この微粉碎試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、以下の条件でX線回折分析を行う（足立, 1980；日本粘土学会, 1987）。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐、未公表）により検索した。

装 置 : 島津製作所製 XD-3 A	Time Constant : 1.0sec
Target : Cu (K α)	Scanning Speed : 2° /min
Filter : Ni	Chart Speed : 2cm/min
Voltage : 30kVp	Divergency : 1°
Current : 30mA	Receiving Slit : 0.3mm
Count Full Scale : 5,000C/S	Scanning Range : 5~45°

(5) 電子顕微鏡観察

試料台にカーボンを織り込んだ両面テープを貼り、その上に赤色顔料を粉碎したものを載せる。それを走査型電子顕微鏡で観察する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表1・図1に示す。以下、各地点ごとに珪藻化石の産状を述べる。

S K - O 2 下層では、比較的多くの珪藻化石が検出される。検出される種群は、淡水生種を主として淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。生態性の特徴をみると貧塩-不定性種、好アルカリ性種、流水不定性種が優占する。主な産出種は、*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、

表1 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	SK-02 下層	谷ベルト		
	塩分	pH	流水			1	2	3
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	4	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	7	-	-	-
<i>Amphora ovalis</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-
<i>Diploneis elliptica</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	RA, T	1	-	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	147	29	22	14
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1	-	1	-
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	18	7	9	10
<i>Navicula plausibilis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	-	1	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	2	8	15
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-	-	-
<i>Pinnularia solaris</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RB, U	2	-	-	3
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	KI	-	-	3	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	14	-	-	3
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	1	-	-
<i>Stauroeis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	5
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	3	-	-	-
海水生種合計					0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					4	0	0	0
淡水生種合計					200	39	48	52
珪藻化石純数					204	39	48	52

凡例

H. R.: 塩分濃度に対する適応性

Ogh-Meh: 淡水生種-汽水生種

Ogh-ind: 貧塩不定性種

Ogh-unk: 貧塩不明種

pH: 水素イオン濃度に対する適応性

al-il: pH好アルカリ性種

ind : pH不定性種

ac-il: pH好酸性種

unk : pH不明種

C. R.: 流水に対する適応性

l-ph: 好止水性種

ind : 流水不定性種

r-ph: 好流水性種

unk : 流水不明種

環境指標種

S: 好汚濁性種 U: 宽適応性種 T: 好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)

R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分陸生珪藻、伊藤・堀内、1991)

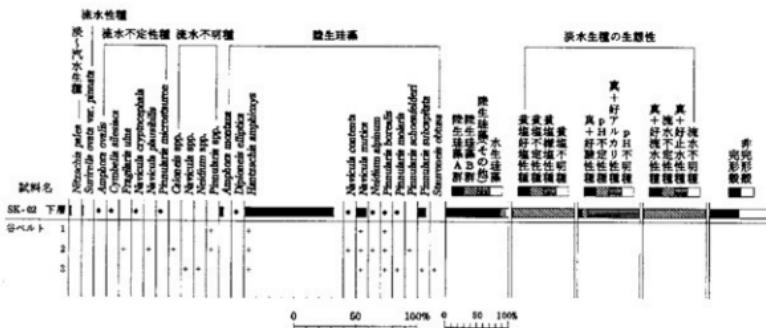


図1 主要藻類化石群の層位分布
海水・淡水・淡水生産率出率・各種出率・完形殻出率は全体基準、淡水生産の生産性の比率は淡水生産の合計を基準として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

Navicula mutica, *Pinnularia subcapitata* であり、陸生珪藻が全体の95%を占める。陸生珪藻とは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉、1988）である。

一方、谷ベルト1～3では、珪藻化石の検出個体数が100個体以下である。陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis* などが多産する傾向にある。

(2) 花粉分析

結果を表2に示す。花粉・孢子化石は少なく、全試料からシダ類胞子石、谷ベルト2でスギ属、谷ベルト3でイネ科が検出された。これら検出された花粉化石の保存状態は著しく悪い。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表3に示す。SK-02下層では、植物珪酸体の保存状態が悪いものの、イネ属、

表2 花粉分析結果

種類	SK-02		谷ベルト		
	試料名	下層	1	2	3
木本花粉					
スギ属	-	-	1	-	
草本花粉					
イネ科	-	-	-	1	
シダ類胞子					
シダ類胞子		2	3	20	13
合計					
木本花粉	0	0	1	0	
草本花粉	0	0	0	1	
シダ類胞子	2	3	20	13	
総計	2	3	21	14	

表3 植物珪酸体分析結果

種類	SK-02		谷ベルト		
	試料名	下層	1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	21	-	-	-	-
タケア科	14	7	2	-	-
ウシクサ族スキ属	7	-	2	2	-
イチゴツナガア科	3	4	-	-	-
不明キビ型	3	-	1	1	-
不明ヒグシバ型	2	-	-	-	-
不明ダンチク型	7	-	-	-	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	20	-	-	-	-
タケア科	5	3	3	-	-
ウシクサ族	11	-	-	4	-
不明	20	4	1	3	-
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	57	11	5	4	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体	56	7	4	7	-
総計	113	18	9	11	-
粗織片					
イネ属珪酸体	6	-	-	-	-
イネ属短細胞列	9	-	-	-	-
イネ属機動細胞列	2	-	-	-	-

タケ亞科、ウシクサ族、イチゴツナギ亞科などが認められ、特にイネ属の産出が目立つ。また、イネ属に由来する珪化組織片も認められる。谷ベルト1～3では保存状態が悪く、検出個数も少ない。各試料からはタケ亞科、ウシクサ族などがわずか、あるいは稀に認められる。

(4) X線回折分析

各赤色顔料のX線回折図を図2に示す。SK-51枕推定部を除く4点の回折パターンは、ほぼ類似したパターンを示し、約20°(2θ)付近からベースが高くなる。このことから、酸化鉄を含むことが明らかである。ピークとして検出された鉱物は、石英(quartz)、斜長石(plagioclase)、カリ長石(k-feldspars)、クリストバライト(cristobalite)、赤鉄鉱(hematite)、スマectタイト(smectite)の6種類である。

一方、SK-51枕部顔料は、赤鉄鉱と共に辰砂(cinnabar)と同定される回折ピークが認められるが、辰砂の最強回折線が石英の最強回折線と重複するため確実な判定は難しい。

なお、他の鉱物は岩石や土壤にごく一般的に認められる鉱物であることから、赤色物質採取時に混在した土壤由来の鉱物と推定される。

(5) 電子顕微鏡観察

全体的に試料が少量のものが多く、保存状態の良い部分での観察ができない。また、比較的状態の良好であったSK-52小口部では、組織のような痕跡は観察できない。

4. 考察

(1) 古環境の検討

SK-02下層で検出された珪藻化石は、大半のものが陸生珪藻に属するものであった。この中で、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*などは、乾燥に対する耐性の強い種群であり、陸生珪藻A群とされる(伊藤・堀内、1989, 1991)。また、過去の堆積物において、陸生珪藻が70～80%以上と優占する結果が得られれば、その堆積物は水域以外の空気に曝された、乾いた状況に置かれていた可能性が高いことが指摘されている。これらのことから、本土坑内には水が溜まることはほとんどなかったことが推定される。また、土坑壁面の崩落や周辺の乾いた土壤が流れ込んでいる可能性もある。花粉化石が検出されなかった原因としては、このような堆積環境が関係している可能性があり、おそらく風化作用により分解・消失したとみられる。

本土坑からは栽培種のイネ属珪酸体が産出し、イネ属の珪化組織片も見られた。このことから、土坑内部には稲藁や稻穀殻が混入していた、あるいは稲作耕土により埋積されたなどの可能性を考えられる。また、本時期に遺跡周辺で稲作が行われていたことも示唆される。

一方、古墳時代の谷埋積物からは、花粉化石・植物珪酸体ともほとんど検出されなかった。わずかに検出された花粉化石・植物珪酸体の種類は、当時の周辺植生を構成する要素であった可能性があるが、植生を推定するには至らない。珪藻化石の産状は、SK-02下層と同様に陸生珪

検出鉱物略号

- Qz: 石英(quartz)
- Pl: 斜長石(plagioclase)
- Kf: カリ長石(k-feldspars)
- Cr: クリストバライト(cristobalite)
- He: 赤鉄鉻(hematite)
- Ci: 辰砂(cinnabar)
- Sm: スメクタイト(smectite)

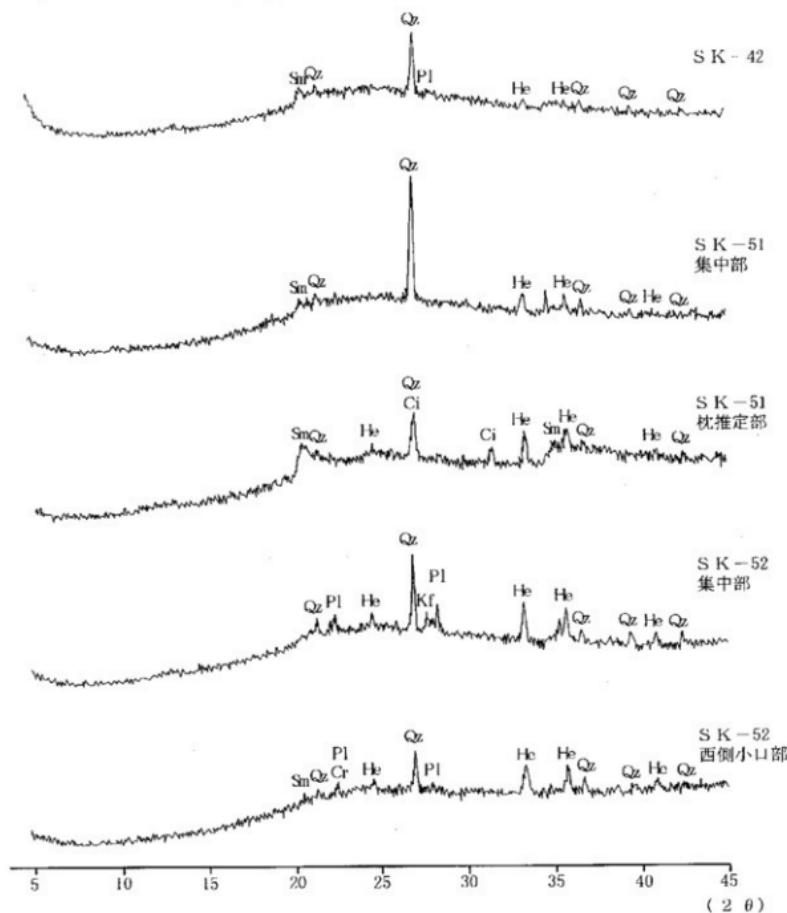


図2 赤色顔料のX線回折図

藻A群に属するものが多産した。このことから、谷内も常に冠水しているのではなく、ほとんどの時期が好気的な状態に置かれていたことが推定される。

(2) 赤色顔料の検討

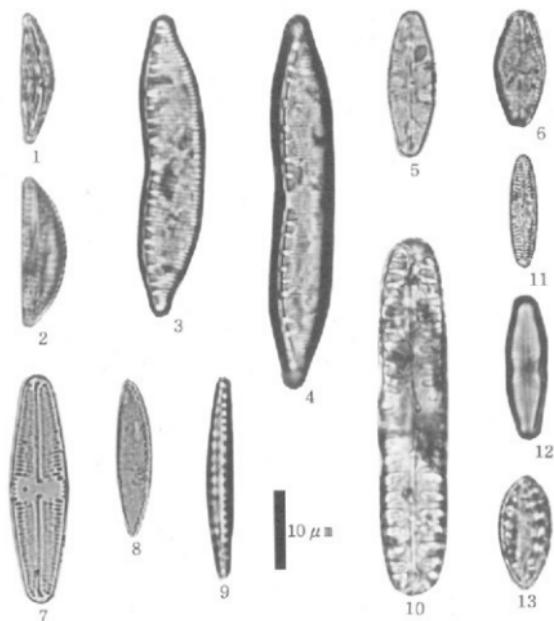
石蓋土坑墓内から検出された赤色顔料のうち、SK-51枕推定部を除く4点は、いずれも類似した回折パターンが得られた。この4点は、赤鉄鉱を含むことから、ベンガラと考えられる。ベンガラの原料には、赤鉄鉱の他にも様々な酸化第二鉄を含む鉱物が利用される（本田、1997）。また、ベンガラの中には、しばしばパイプ状構造を持つものがある。このパイプ状構造は、実験の結果から、鉄バクテリアにより生成された鉄分に富む物質を焼成してベンガラに精製したこと事が明らかとなっている（降幡・沢田、1997；岡田、1997）。今回の試料は、電子顕微鏡で観察した限りでは、パイプ状構造と考えられる構造は認められない。このことから、得られたベンガラは、赤鉄鉱を原料としたことが推定される。一方、SK-51の枕推定部では、ベンガラと共に辰砂と考えられる鉱物が確認され、2種類の赤色顔料が混在している様子が確認される。

墓の遺体埋納部に赤色顔料を塗布する、いわゆる施朱の習慣は各地の墓で見られる。また、九州地方では、遺体に施朱を施した例が知られている。このうち、福岡県内の立岩遺跡や一貫山銘子塚古墳などの例では、頭頂部に辰砂（水銀朱）、胸部以下はベンガラという使い分けが確認されている（市毛、1998）。今回の試料でもSK-51枕推定部に辰砂が見られたことから、同様に遺体の場所による顔料の使い分けが行われていた可能性がある。この辰砂は、ベンガラと混在していることから、ベンガラと辰砂を混ぜて利用したことや、実際には明確に塗り分けられたものが遺体の腐敗と共に混ざったことなどが考えられる。

引用文献

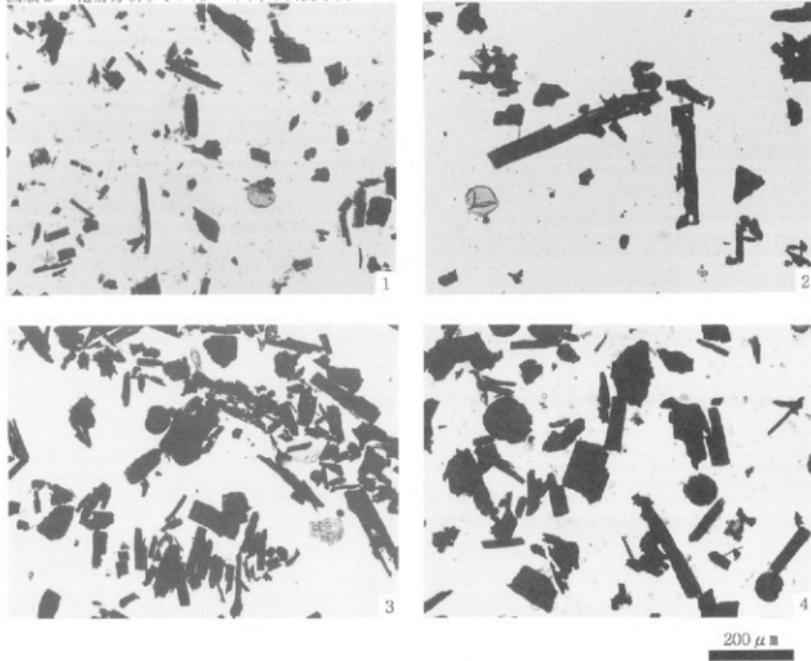
- 足立吟也 (1980) 粉末X線回折法、「機器分析のてびき3」, p.64-76, 化学同人.
- K. Asai & T. Watanabe (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- Desikachariy, T.V. (1987) Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. I~VI. Plates:22-621A.
- 本田光子 (1997) 出土ベンガラの多様性について. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p. 78-79.
- Hustedt, F. (1930) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p..
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen -Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809, 15, 1-155,

- Hustedt, F. (1938) Systematische und ökologische untersuchungen über der diatomeen flora von Java, Bali und Sumatra nach dem material der Deutschen limnologischen Sunda Expedition. Arch. Hydrobiol. suppl.
- Hustedt, F. (1955) Marine littoral diatoms of Beaufort, North Carolina. Bull. mar. Lab. Duke Univ. 6, p. 1-67.
- Hustedt, F. (1959) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p..
- Hustedt, F. (1961-1966) Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p..
- 市毛 繁 (1998) 新版 朱の考古学. 296p., 雄山閣.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1989) 古環境解析からみた陸生珪藻の検討——陸生珪藻の細分——. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 1, p. 9-44.
- 近藤鉢三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaceae, Band 2/2 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae, Band 2/3 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 日本粘土学会編 (1987) 粘土ハンドブック 第二版. 1289p., 技報堂出版.
- 岡田文男 (1997) バイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本国文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p. 38-39.
- 降幡順子・沢田正昭 (1997) 酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究. 日本国文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p. 76-77.



1. *Amphora montana* Krasske (SK-0 2 下層)
2. *Cymbella silesiaca* Bleisch (SK-0 2 下層)
3. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SK-0 2 下層)
4. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SK-0 2 下層)
5. *Navicula mutica* Kuetzing (SK-0 2 下層)
6. *Navicula mutica* Kuetzing (SK-0 2 下層)
7. *Navicula mutica* Kuetzing (谷ベルト 1)
8. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith (SK-0 2 下層)
9. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith (SK-0 2 下層)
10. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (SK-0 2 下層)
11. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (SK-0 2 下層)
12. *Stauroneis obtusa* Lagerstedt (谷ベルト 3)
13. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W. Smith) Hustedt (SK-0 2 下層)

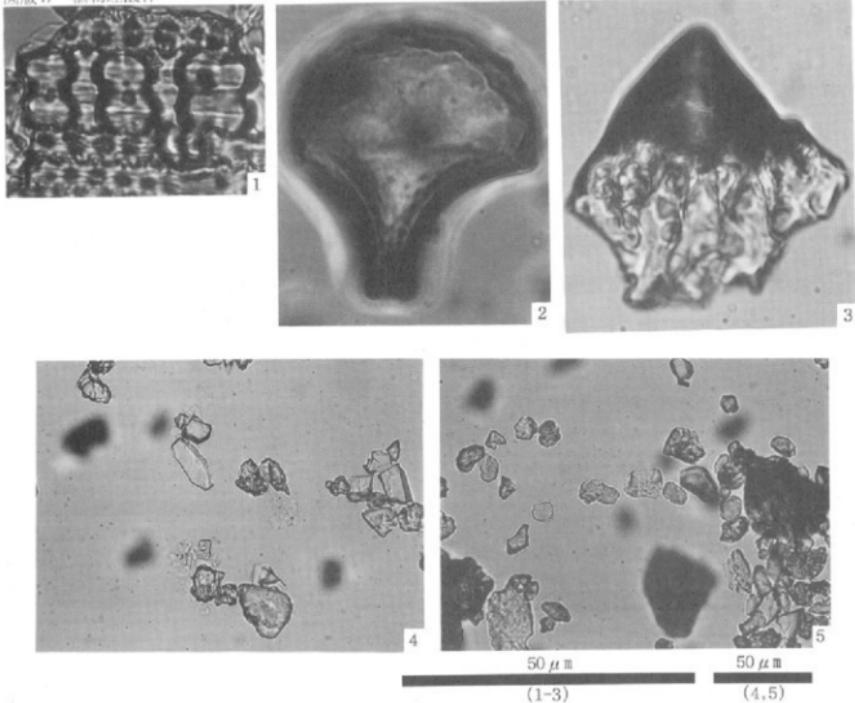
図版2 花粉分析プレパラート内の状況写真



1. 状況写真 (SK-02下層)
3. 状況写真 (谷ベルト2)

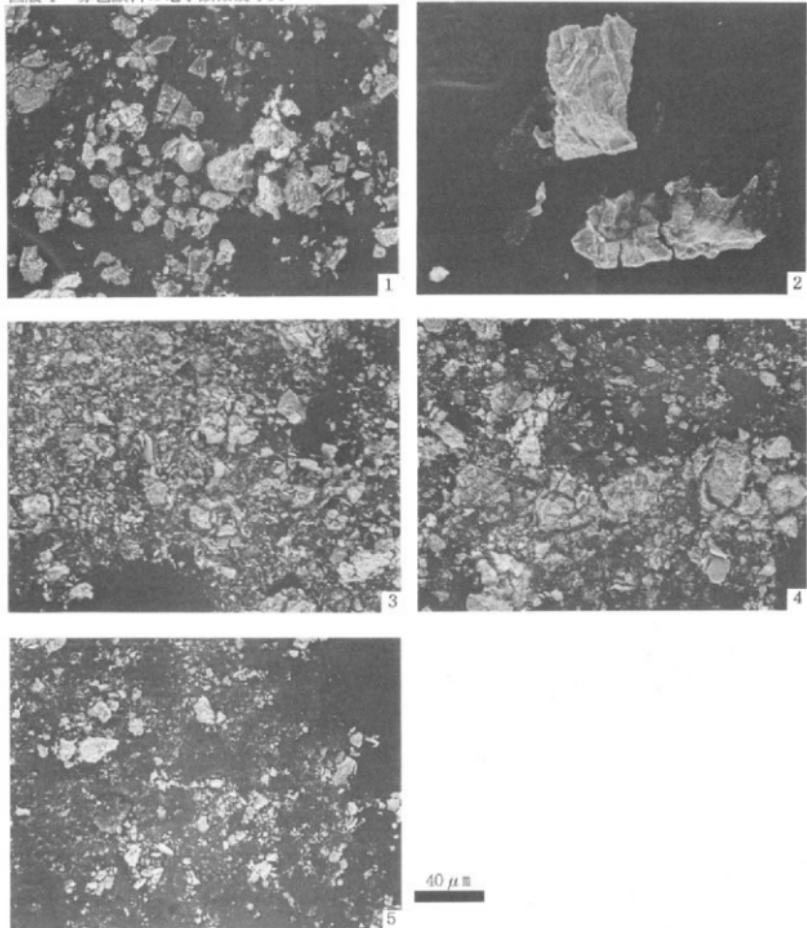
2. 状況写真 (谷ベルト1)
4. 状況写真 (谷ベルト3)

図版3 植物珪酸体



1. イネ属短細胞列 (SK-0 2下層)
2. イネ属機動細胞珪酸体 (SK-0 2下層)
3. イネ属穎珪酸体 (SK-0 2下層)
4. 状況写真 (谷ベルト2)
5. 状況写真 (谷ベルト3)

図版4 赤色顔料の電子顕微鏡写真



1. SK-52西側小口部赤色
3. SK-52赤色顔料
5. SK-42赤色顔料

2. SK-51枕部顔料
4. SK-51赤色顔料



(1) IA区、IB区全景（西から）



(2) IA区全景（北西から）



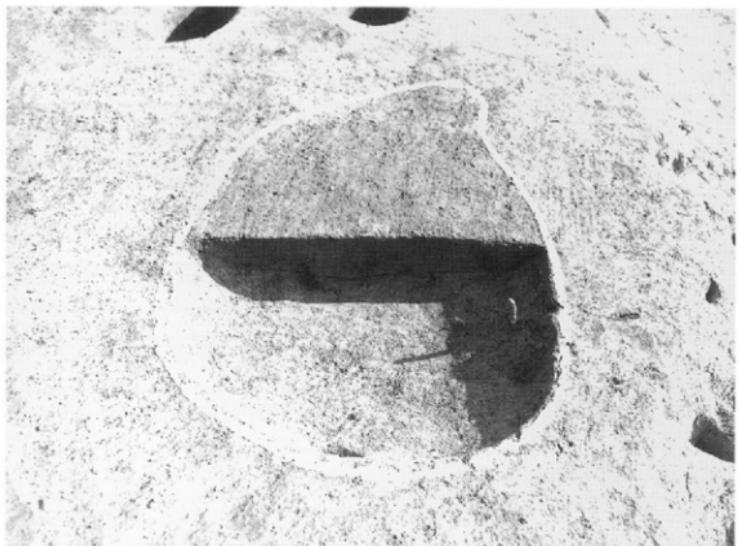
(1) IA区全景（北西から）



(2) IA区SK-01完掘状況（北東から）



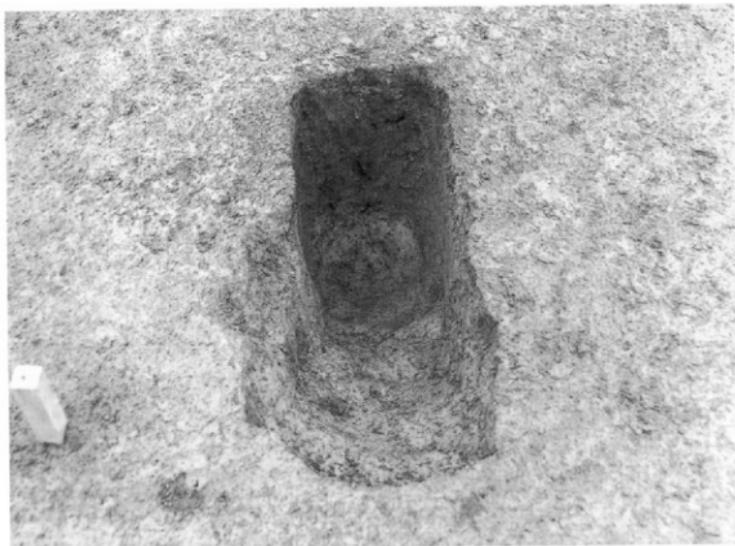
(1) IA区、IB区全景（南東から）



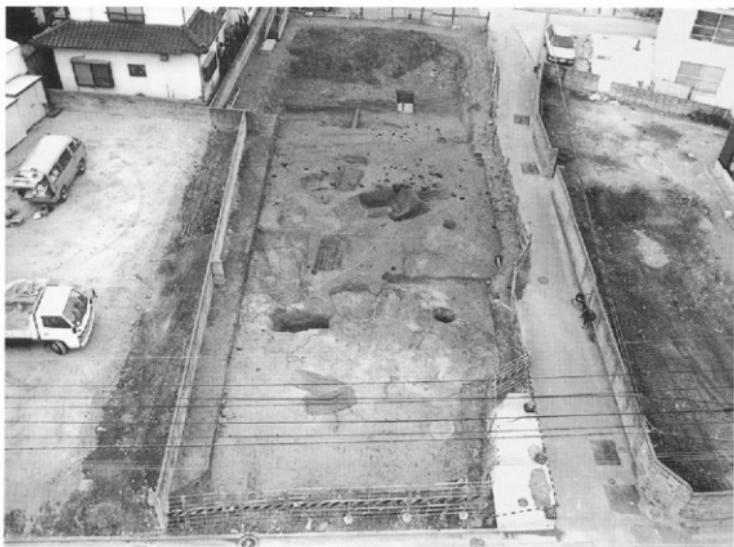
(2) IA区SK-02掘削状況（北から）



(1) I B区南壁土層断面（東から）



(2) I B区SK-01 摂削状況（南から）



(1) II区全景（西から）



(2) II区全景（東から）



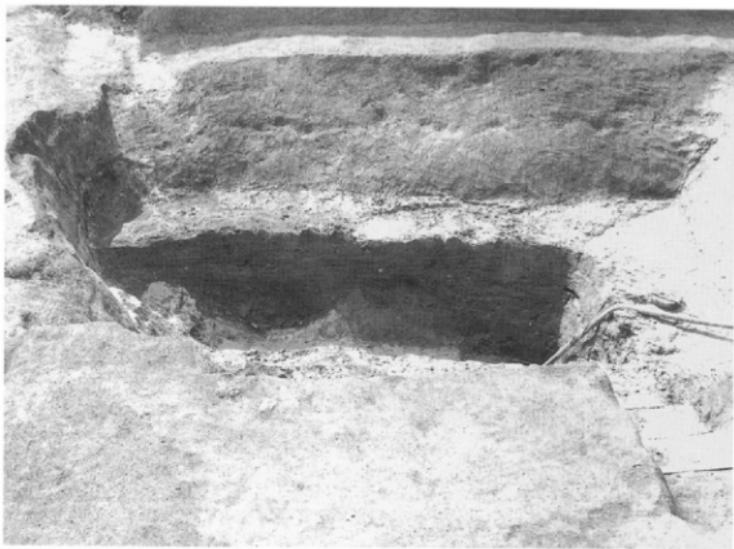
(1) II区全景（東から）



(2) II区段落ち際状況（北東から）



(1) II区谷部掘削状況（北西から）



(2) II区谷部断面状況（北東から）



(1) 調査区掘削状況（東から）



(2) 調査区掘削状況（西から）



(1)調査区掘削状況（北から）



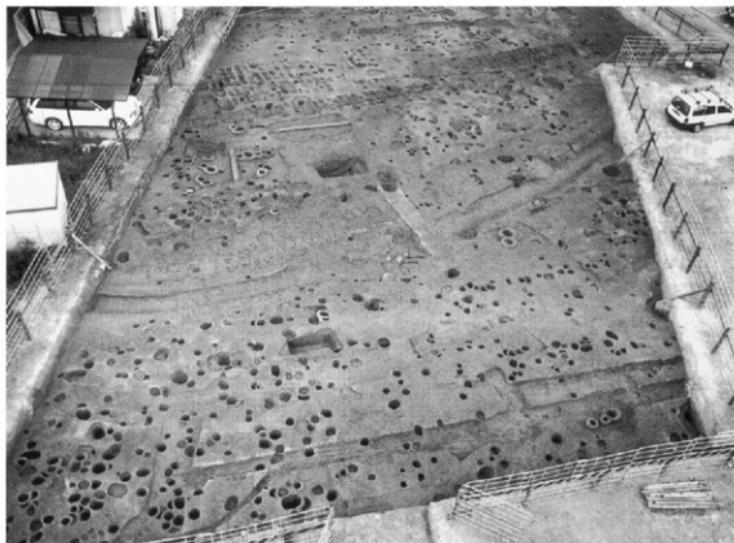
(2)調査区掘削状況（西から）



(1)調査区掘削状況（東から）



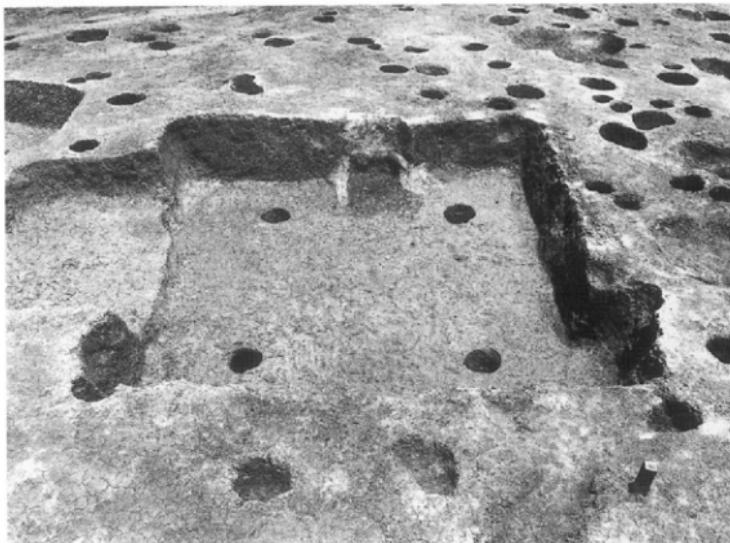
(2)田島A遺跡 2次調査区全景（南西から）



(1)調査区掘削状況（東から）



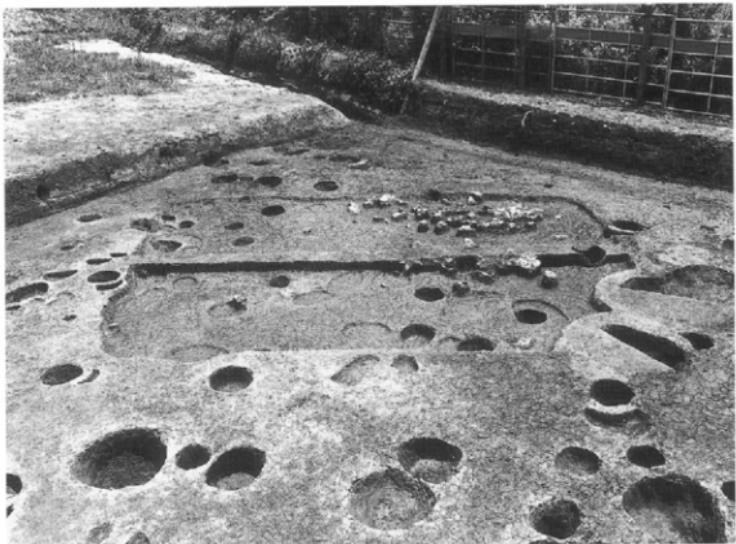
(2)調査区掘削状況（北から）



(1) SC - 26 完掘状況 (西から)



(2) SC - 26 カマド検出状況 (西から)



(1) SC-27 遺物検出状況（北から）



(2) SC-27 完掘状況（東から）



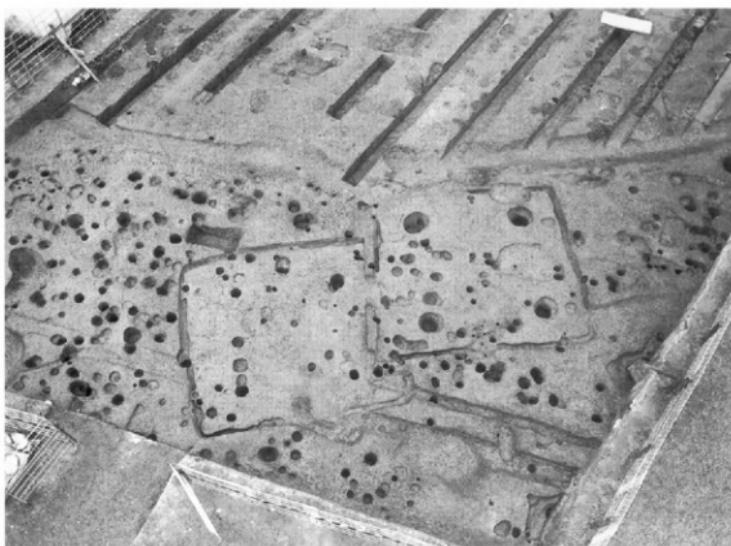
(1) SC - 3-5 完掘状況（北から）



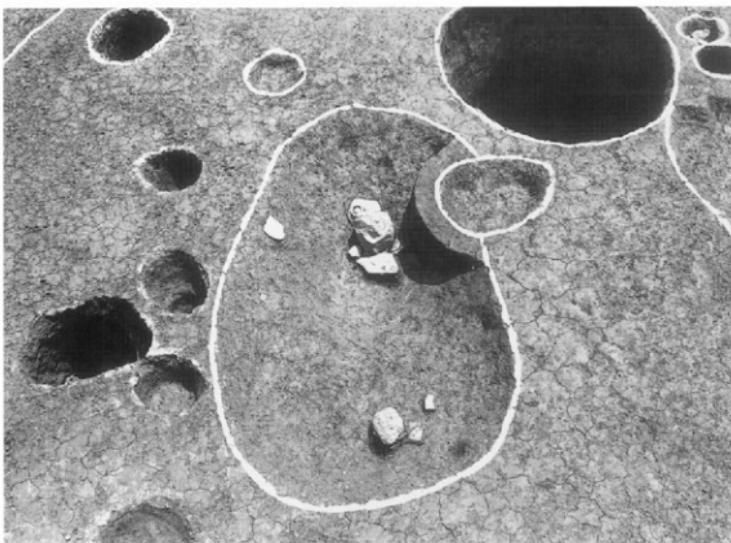
(2) SC - 3-6 完掘状況（北から）



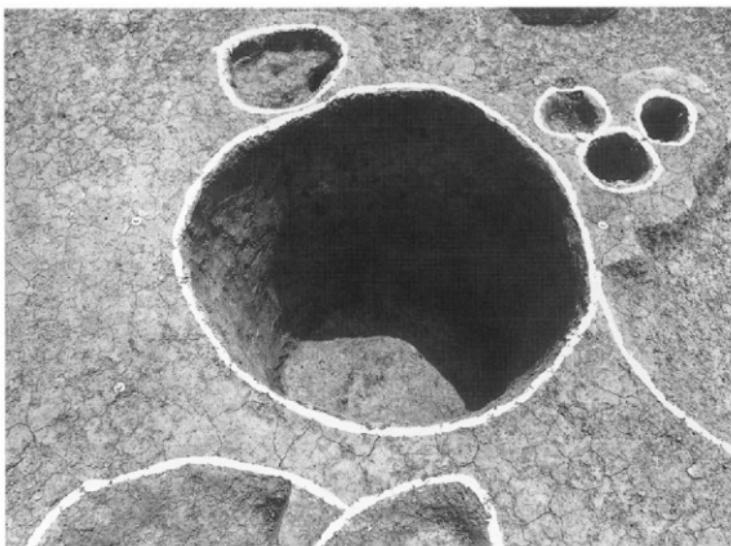
(1)SC-36 完掘状況（東から）



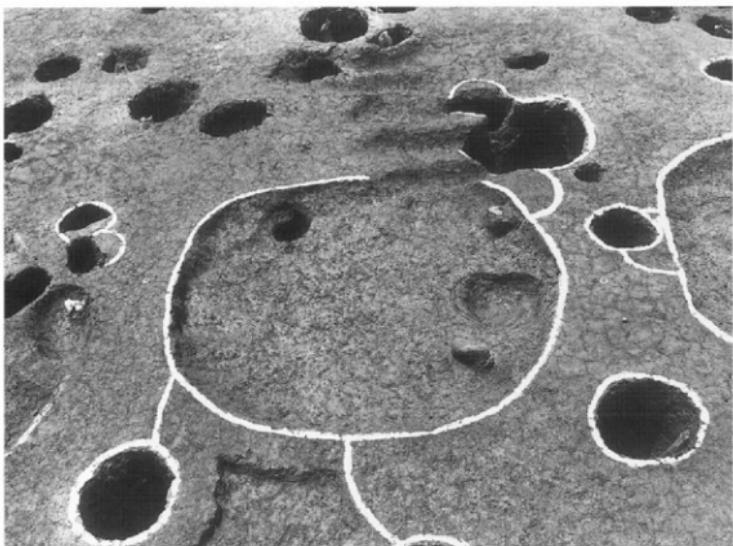
(2)SC-80, 81 掘削状況（東から）



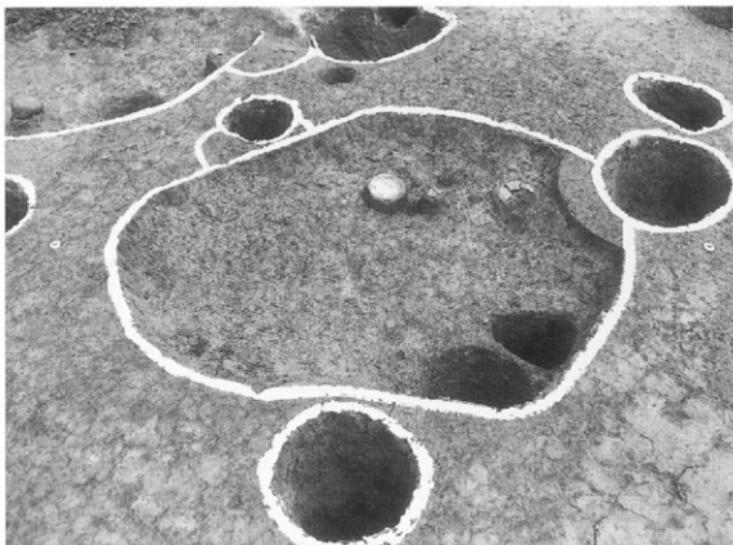
(1) SK - 0 1 掘削状況 (北東から)



(2) SK - 0 2 掘削状況 (北東から)



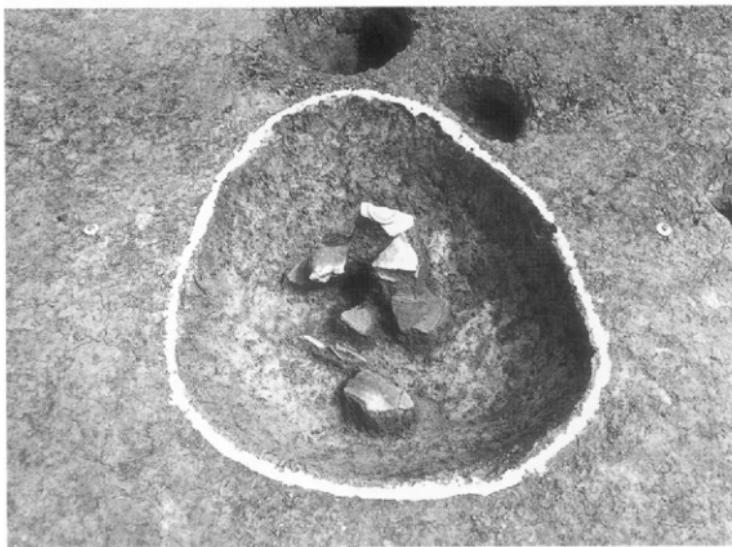
(1) SK - 0 3 掘削状況 (北から)



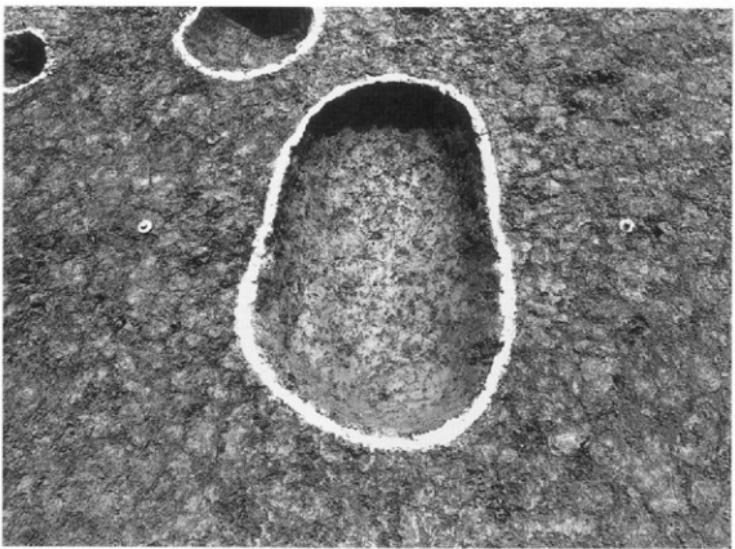
(2) SK - 0 4 掘削状況 (北から)



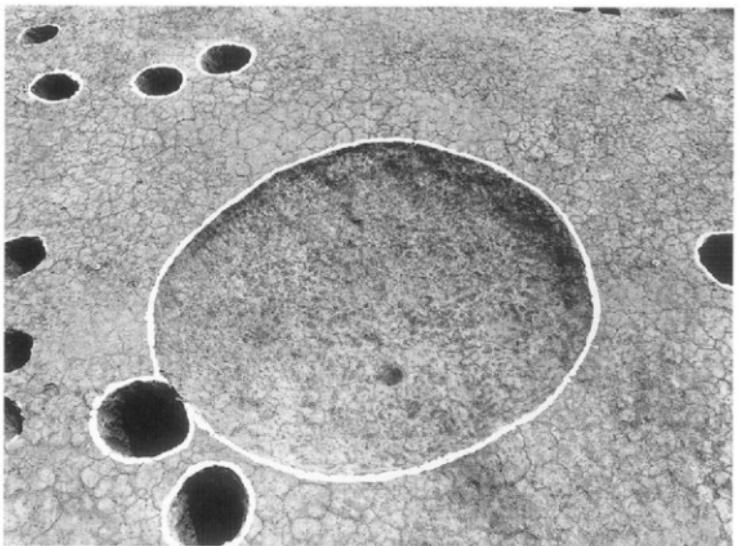
(1) SK - 07 遺物検出状況 (西から)



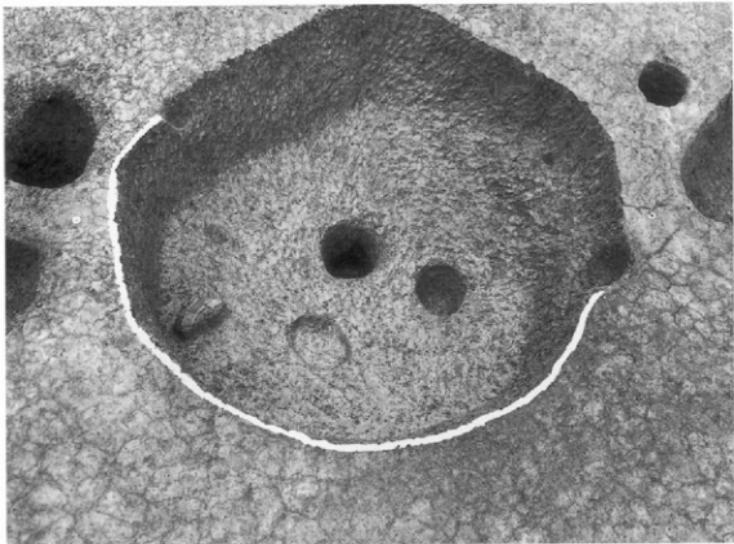
(2) SK - 08 遺物検出状況 (北から)



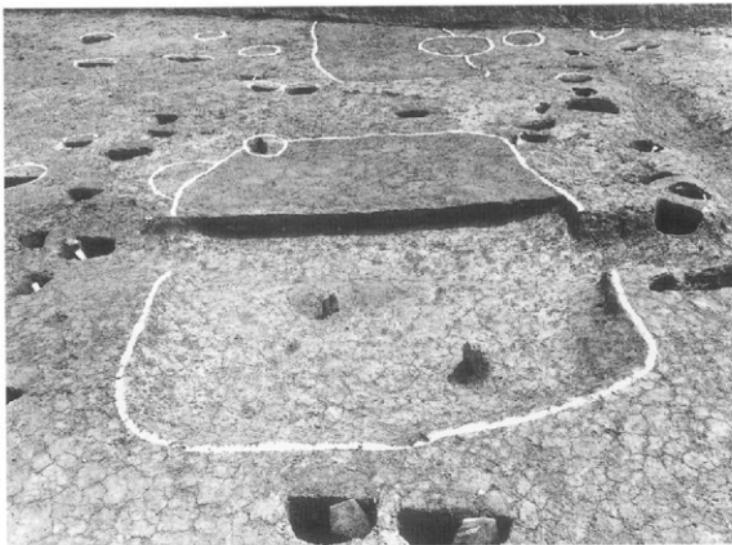
(1) SK - 09 掘削状況 (北東から)



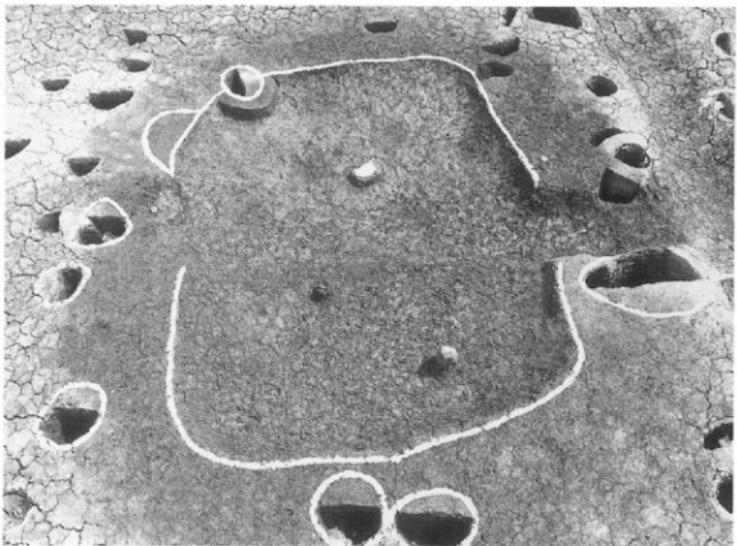
(2) SK - 10 掘削状況 (北東から)



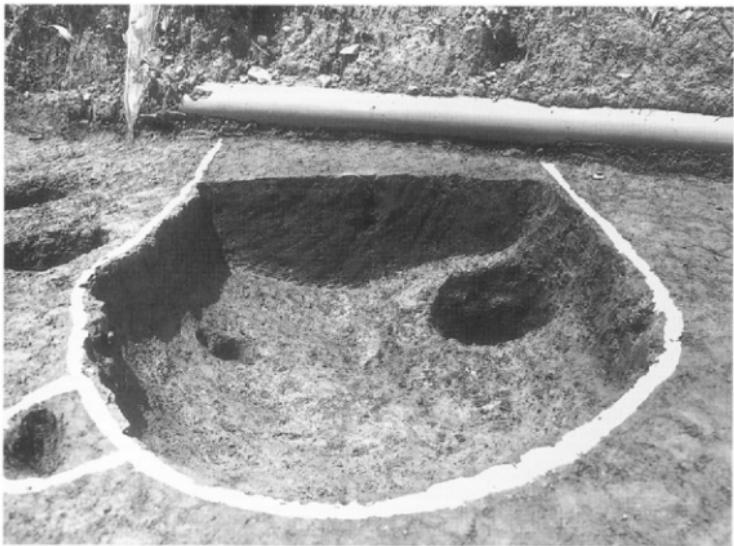
(1) SK - 1 1 挖削状況 (北から)



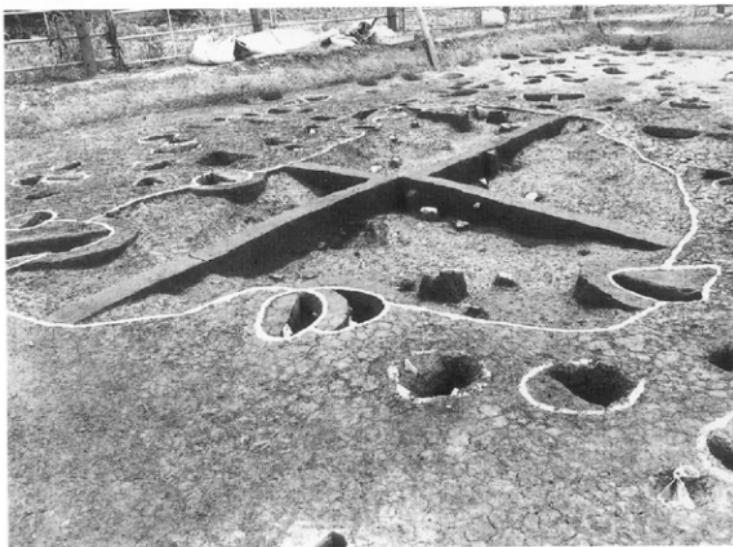
(2) SK - 1 2 挖削状況 (北から)



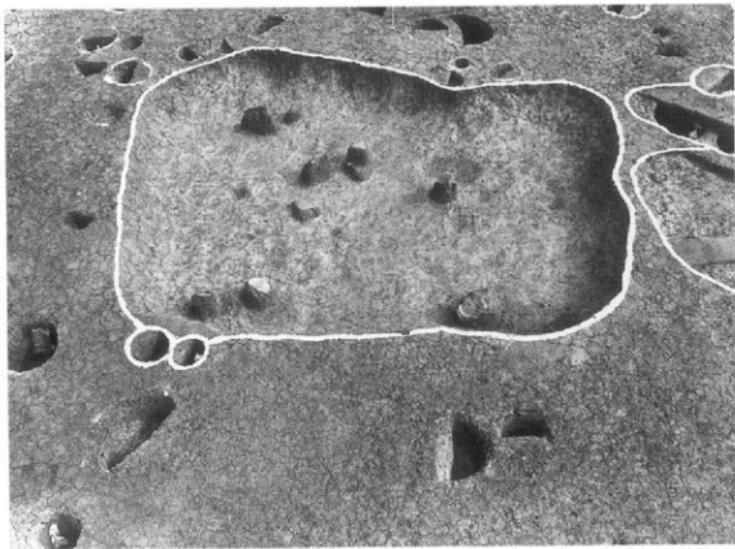
(1) SK-12 掘削状況（北から）



(2) SK-13 検出状況（東から）



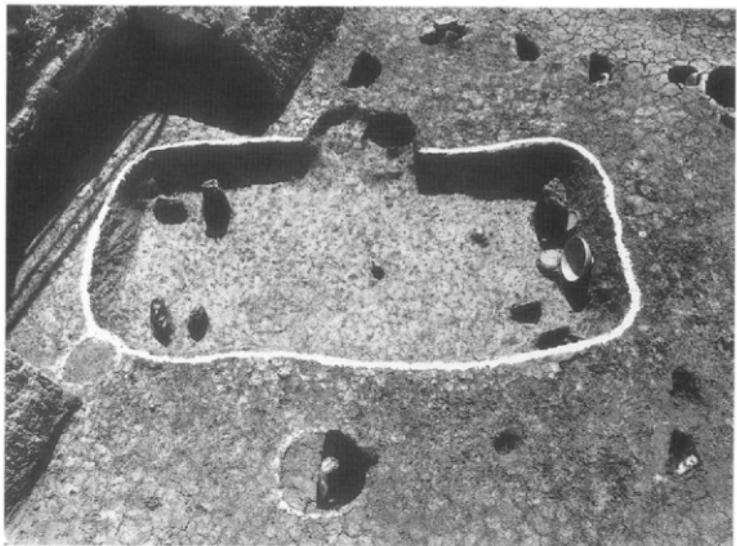
(1) SK-16 検出状況（北東から）



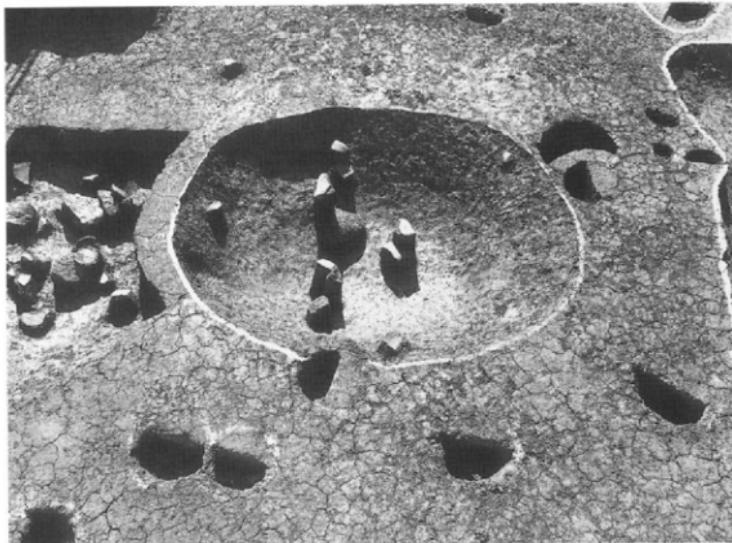
(2) SK-18 遺物検出状況（北から）



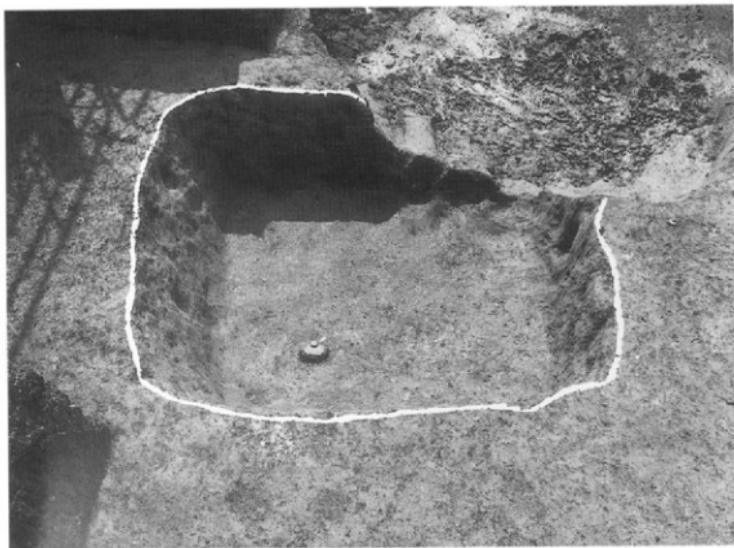
(1) SK-20 遺物検出状況（北西から）



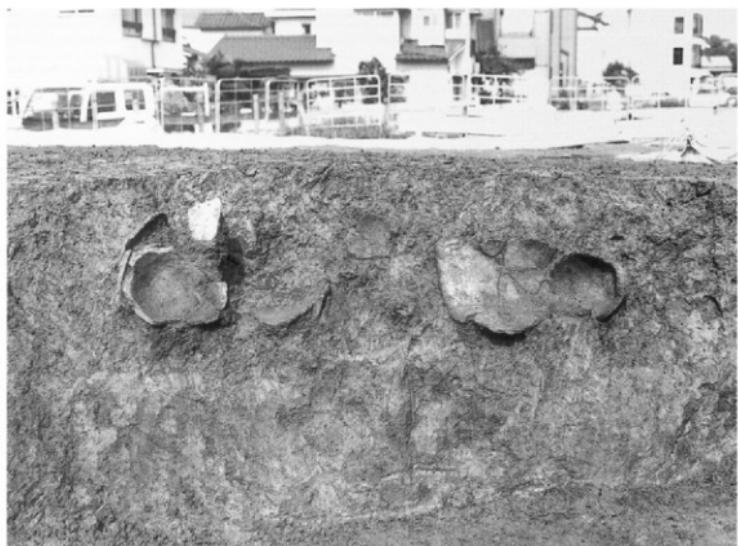
(2) SK-21 遺物検出状況（東から）



(1) SK - 22 遺物検出状況（東から）



(2) SK - 33 遺物検出状況（東から）



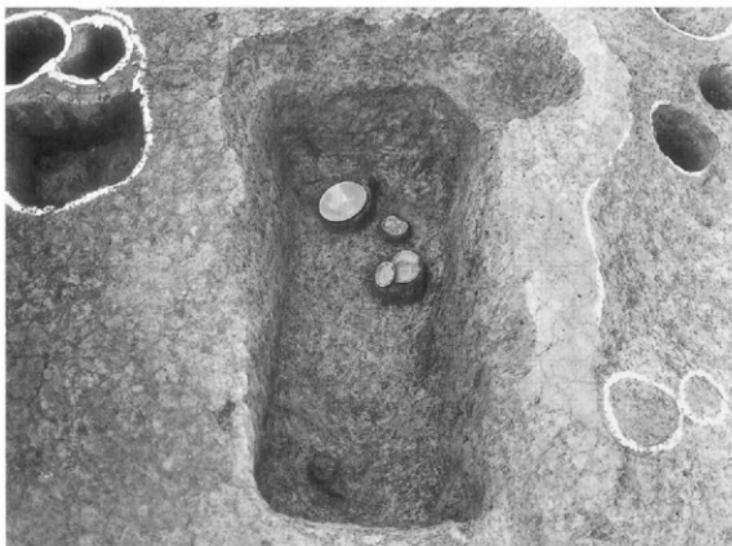
(1) SK-41 遺物検出状況（西から）



(2) SK-55 遺物検出状況（北から）



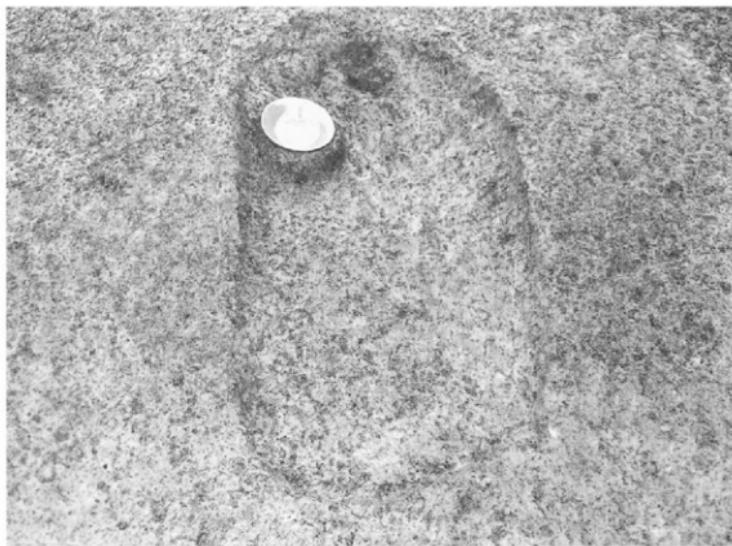
(1) SK - 6 9 遺物検出状況（北から）



(2) SK - 7 3 遺物検出状況（南から）



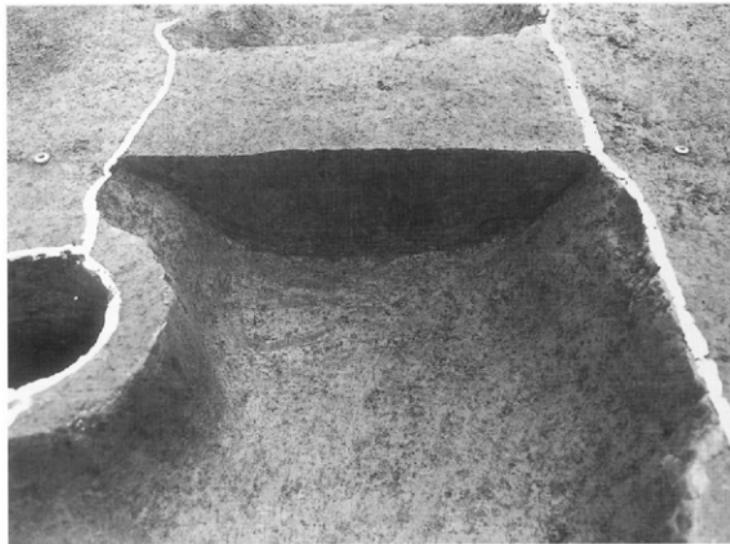
(1) SK-79 遺物検出状況（南から）



(2) SK-85 遺物検出状況（南から）



(1) SD-19 検出状況（北から）



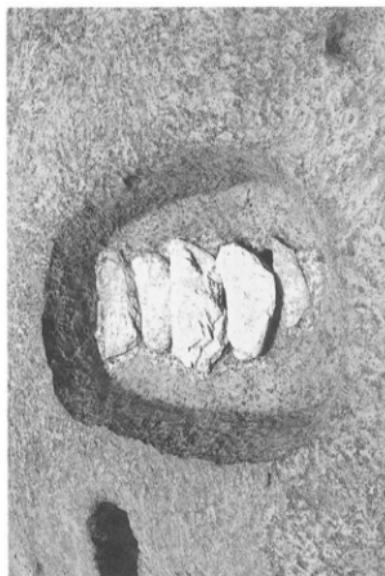
(2) SD-5 土層断面状況（北から）



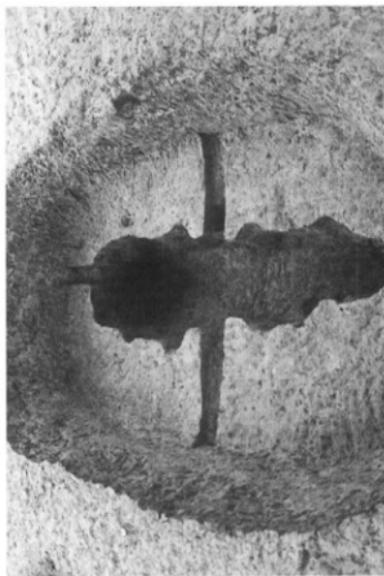
(1) SK - 4 2 蓋石状況 (北から)



(2) SK - 4 2 土壌内状況 (北から)



(3) SK - 4 2 土壌掘削状況 (北から)



(4) SK - 4 2 土壌内小口部状況 (北から)

(3) SK - 5 1 土壌内状況 (西から)



(1) SK - 5 1 壊石状況 (西から)

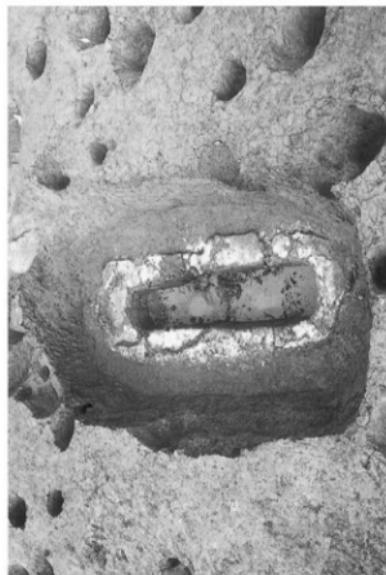


(4) 土壌調査状況 (南から)



(2) SK - 5 1 壊石状況 (南から)

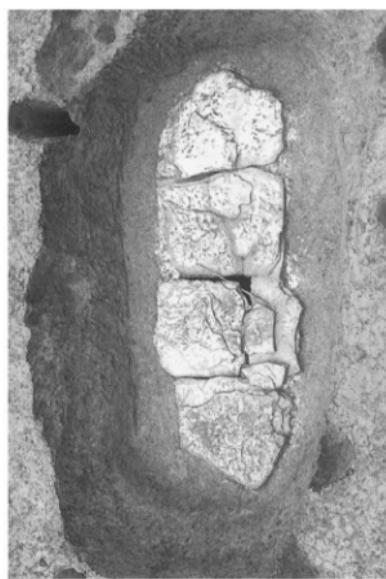




(2) 土壌内状況 (東から)



(4) 土壌上堆積上掘削状況 (南西から)



(1) SK-5 2 叠石状況 (北から)

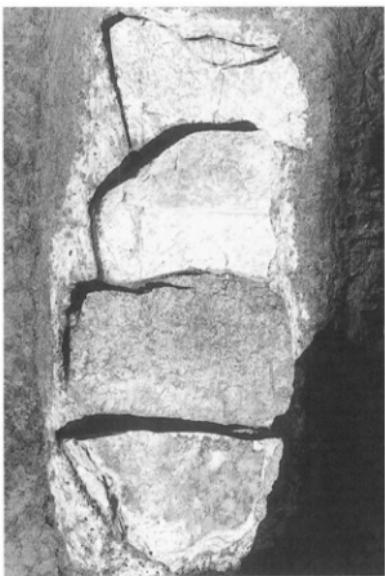


(3) 土壌内状況 (北から)

(3)土壤内状況（南から）



(1) SK - 5.3 盖石状況（西から）



(2) 土壌内床面状況（西から）



(4) 床面白色粘土状況（東から）





Ph. 12 合せ口壺 4 4 調査状況



Ph. 13 溝 4 6 遺物出土状況

田島小松浦 田島 A 遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第 647集

平成12年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 高松印刷有限会社

福岡市東区松島1丁目4-10